大分県文化財調査報告第83輯

大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1

会下（えげ）遺跡
的場2号墳
塩屋伊豫野原遺跡

1991年3月

大分県教育委員会

大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１

会下（えげ）遺跡

的場２号墳

塩屋伊豫野原遺跡

序　文

瀬戸内海の一角を占める別府湾の北岸一帯は、早水台遺跡をはじめ大分県の代表的な遺跡が多数所在するところとして知られています。

大分県は、この別府湾北岸地区を縦貫し、国道10号と大分空港を結ぶ高速道路を建設することになり、昭和58年度から発掘調査を実施してまいりました。

今回は、昭和62年度以降に実施した調査のうち、奈良時代の居館跡と推定される会下遺跡、典型的な横穴式石室墳である的場２号墳、縄文時代早期を主とした複合遺跡である塩屋伊豫野原遺跡の調査成果を収録いたしました。これらの遺跡は、いずれも大分県の古代史を考える上で貴重なものであります。本書が今後の学術研究ならびに文化財保護に活用いただければ幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御協力をいただいた関係各位に対し、心から感謝の意を表します。

平成３年３月30日

大分県教育委員会教育長　宮本高志

例　言

1．本書は、昭和62年、63年度に実施した空港道路建設に伴う、会下遺跡(日出町)、的場２号墳(杵築市)、塩屋伊豫野原遺跡(安岐町)の発掘調査報告書である。

2．会下遺跡の遺構の実測は主に調査員、調査補助員が行い、遺物の実測は栗田勝弘、製図の一部は姫野和子(県文化課)が担当した。

3．的場２号墳の遺構・遺物の実測は主に調査員、調査補助員が行い、吉田寛・吉武牧子(県文化課)の協力を得た。製図は宮内克己・阿部みゆき(県文化課)が担当した。

4．塩屋伊豫野原遺跡の遺構・遺物の実測は主に調査員、調査補助員が行い、石器の実測は牧尾義則(県文化課)が担当したほか、井口あけみ、永松みゆき等の協力を得た。

5．本書の執筆は、Ⅰ・調査に至る経過を清水宗昭、Ⅱ・会下遺跡を栗田勝弘、Ⅲ・的場２号墳を宮内克己、Ⅳ・塩屋伊豫野原遺跡を高橋徹が行ったが、塩屋伊豫野原遺跡の石器は清水宗昭が担当し、理化学分析には島根大学理学部の伊藤晴明・時枝克安先生の玉稿を賜わった。

6．本書の編集は会下遺跡を栗田勝弘、的場２号墳を宮内克己、塩屋伊豫野原遺跡を高橋徹がそれぞれ担当した。

大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　会下（えげ）遺跡……3
Ⅲ　的場２号墳……123
Ⅳ　塩屋伊豫野原遺跡……165

Ⅰ　調査に至る経過

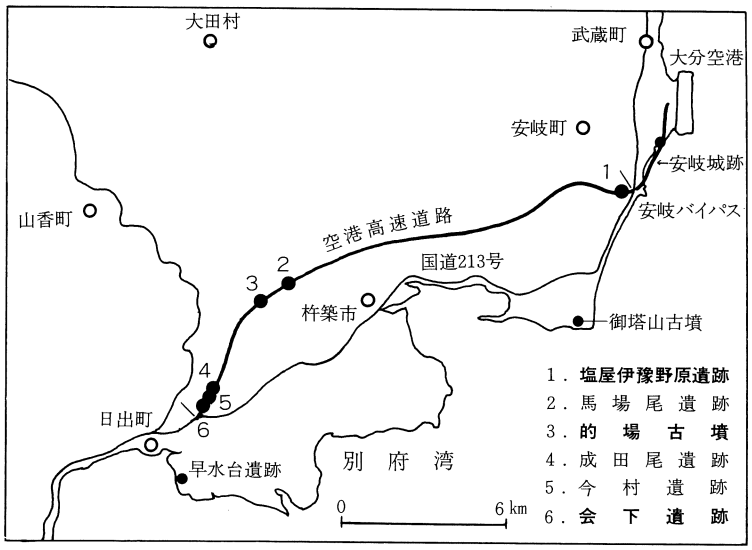
Ⅰ．調査に至る経過

国東半島の東岸にある大分空港と別府市・大分市の主要都市を結ぶ大分空港道路整備事業のうち、国道213号安岐バイパス建設工事に係る安岐城跡の発掘調査は、昭和58年９月から昭和61年３月まで３次にわたって実施した。その結果は、すでに『安岐城跡・下原古墳』（大分県文化財調査報告第76輯）として刊行されている。

一方、国道10号と国道213号の分岐点近くの日出町会下と安岐バイパスを結ぶ大分空港高速道については、新設工事であるため、大分県教育委員会は路線内の文化財の取扱いについて県土木建築部及び大分県道路公社と協議を重ねてきた。それをもとに、県教委は昭和59年度に全予定路線の遺跡分布調査を実施し、14ケ所の散布地等を確認した。これらの遺跡については、その後の用地買収状況にあわせて昭和62年５月から試掘調査を開始した。その結果、安岐町塩屋地区で縄文時代早期を主とする複合遺跡、日出町会下地区で奈良時代柱穴群を確認した。また、杵築市的場古墳群のうち１基の一部が橋脚部にかかることが明らかになった。これに、日出町成田尾遺跡と杵築市馬場尾地区を加えた５ケ所について本調査が必要と判断されたので、県土木建築部の委託をうけ、昭和62～平成元年度の３年次にわたって本調査実施した。

このうち、安岐町塩屋伊豫野原遺跡については、昭和62年10月から63年２月末まで発掘調査を実施した。昭和63年５月からは、日出町会下遺跡と杵築市的場古墳の本調査を実施した。会下遺跡については、予想を上まわる規模の奈良時代～平安時代（８～９世紀）の掘立柱建物群であり、石帯も出土しているところから速見郡における重要な集落と考えられた。的場古墳は、一部損壊をうけていたものの比較的保存のよい横穴石室墳であり、この地域における後期古墳の典型例を提示することができた。

平成元年度は会下遺跡の北方にある弥生中期の集落遺跡である成田尾遺跡、古墳時代の今村遺跡、中・近世の墳墓遺構である馬場尾遺跡の本調査を実施した。これについては、平成３年度に報告書の刊行を予定している。



第１図　大分空港道路関係遺跡位置図

別府湾北岸の歴史的環境

国東半島の南部は、瀬戸内海の一角を占める別府湾の北岸にあたり、南岸に対して屈曲のある海岸線を有している。その内陸部は、北部に杵築山地、南部に日出丘陵という比較的なだらかな地形に占められており、その中間を東部の鹿鳴越山地を源流とする八坂川が、湾入の深い守江湾に注いでいる。また気候も温暖な瀬戸内型に属し、適度の気温と降水に恵まれている。

こうした自然条件をもつこの地域は、先史時代から近世に至るまでの遺跡と史跡に富み、学史的にも重要な役割を果たしてきたと云える。南部の日出丘陵には、旧石器時代と縄文時代早期の早水台遺跡、弥生中期の大津遺跡等がある。古代中世には大神荘が成立していたところであり、近世には、城下町日出藩が形成されている。北部の杵築地方も、縄文早期の稲荷山遺跡等の先史遺跡があるが、ここでは古墳時代の古墳の発達が著しく、県下における重要な首長層をもつグループとして注目されている。とくに古墳時代前半期には、国東半島の東南端部の美濃崎地区の丘陵頂部に小熊山前方後円墳と御塔山円墳という県下最大級の首長墳が築造されている。また後期には七双子古墳をはじめとする横穴石室墳がとくに八坂川下流域に集中して造られている。古墳時におけるこの地域の半島及び別府湾岸における重要性を如実に語るものである。

守江湾の最奥部、八坂川の河口には近世に半島の大半を所領とする城下町杵築が形成された。日出といい杵築といい小藩であるが、この地域に近接した城下町がつくられたことは、この地域が地政学上きわめて重要な地点であったことを物語るものである。

調査の概要

杵築市と安岐町との境界にある塩屋伊豫野原遺跡は、後期旧石器時代の国府型ナイフ形石器が出土し、東九州地方における新資料として注目される。また縄文早期の集石遺構とともに押型文・無文土器、打製石器類、磨製石斧等の遺物は、早水台・稲荷山遺跡と対比する上でも貴重な資料である。

八坂川の左岸の傾斜地に造られた的場古墳は、この下流域に多数存在する横穴石室墳群の一つであり、４基中の１基を完掘した。封土・石室ともに比較的良好であり、築造工程を知る上での好資料を提供した。従来知られている七双子古墳群とあわせて、豊後地域の横穴石室墳の変遷をうかがう上でも重要と思われる。

日出丘陵上の会下遺跡は、旧大神郷と藤原郷の境界地域にあり、大型の掘立建物群がまとまって検出された。その時期は、出土した土師器、須恵器から奈良時代末から平安時代初頭と推定されるもので、２間×４間の廂をもつ建物のほか数棟の建物と倉庫、さらに大形土坑が伴っている。またここでは、県下初の石帯が出土しており、この建物群の性格について示唆する遺物である。

以上の３つの遺跡は、時代も違い、距離的にも離れており、比較しうる要素はないが、いずれも重要な遺跡であり、各時代における貴重な成果として評価できるものである。

Ⅱ　会下遺跡

目　次

Ⅱ．会下遺跡

第Ⅰ章　調査経過と調査団の構成……3

1．調査経過……3

2．調査団の構成……3

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……5

第Ⅲ章　調査の概要……7

第Ⅳ章　検出遺構と遺物……11

1．掘立柱建物遺構……11

①号掘立柱建物
～
⑲号掘立柱建物

2．検出土坑……29

1号土坑
～
24号土坑

3．柱穴内及び表土・包含層出土遺物……72

柱穴及び包含層出土遺物……72

表土及び包含層出土遺物……75

第Ⅴ章　まとめと考察……80

1．掘立柱建物群と土坑の機能について……80

2．出土遺物の様相と5号土坑遺物の層位的出土例……83

挿図目次

第１図　会下遺跡と周辺の主要遺跡位置図……6
第２図　会下遺跡と周辺地形図(1/3000)……8
第３図　発掘調査区遺構配置図(1/500)……9・10
第４図　①号掘立柱建物実測図(1/80)……11
第５図　②号掘立柱建物実測図(1/80)……12
第６図　③号掘立柱建物実測図(1/80)……13
第７図　④号掘立柱建物実測図(1/80)……14
第８図　⑤号掘立柱建物実測図(1/80)……15
第９図　⑥号掘立柱建物実測図(1/80)……16
第10図　⑥号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(1/3)……16
第11図　⑦号掘立柱建物実測図(1/80)……17
第12図　⑦号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(1/3)……17
第13図　⑧号掘立柱建物実測図(1/80)……18
第14図　⑨号掘立柱建物実測図(1/80)……19
第15図　⑨号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(1/3)……19
第16図　⑩号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(1/3)……20
第17図　⑩号掘立柱建物実測図(1/80)……20
第18図　⑪号掘立柱建物実測図(1/80)……21
第19図　⑫号掘立柱建物実測図(1/80)……22
第20図　⑬号掘立柱建物実測図(1/80)……23
第21図　⑭号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(1/3)……24
第22図　⑭号掘立柱建物実測図(1/80)……24
第23図　⑮号掘立柱建物実測図(1/80)……25
第24図　⑯号掘立柱建物実測図(1/80)……26
第25図　⑰号掘立柱建物実測図(1/80)……27
第26図　⑱号掘立柱建物実測図(1/80)……28
第27図　⑲号掘立柱建物実測図(1/80)……28
第28図　１号土坑実測図(1/60)……29
第29図　１号土坑出土遺物実測図(1/3)……30
第30図　２号土坑実測図(1/60)……31
第31図　２号土坑出土遺物実測図(1/3)……32

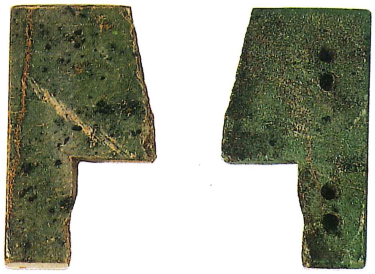
第32図　3号土坑実測図(1/60)……33
第33図　3号土坑出土遺物実測図(1/3)……33
第34図　4号土坑出土遺物実測図(1/3)……33
第35図　4号土坑実測図(1/60)……34
第36図　5号土坑実測図(1/100)……35
第37図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……36
第38図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……37
第39図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……38
第40図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……40
第41図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……41
第42図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……42
第43図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……43
第44図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……44
第45図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……45
第46図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……46
第47図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……47
第48図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)……48
第49図　6号土坑実測図(1/60)……50
第50図　6号土坑出土遺物実測図(1/3)……50
第51図　7号土坑実測図(1/60)……50
第52図　7号土坑出土遺物実測図(1/3)……51
第53図　8号土坑実測図(1/60)……52
第54図　8号土坑出土遺物実測図(1/3)……52
第55図　8号土坑出土遺物実測図(1/3)……53
第56図　9号、10号土坑実測図(1/60)……54
第57図　9号土坑出土遺物実測図(1/3)……55
第58図　9号土坑出土遺物実測図(1/3)……56
第59図　9号土坑出土遺物実測図(1/3)……57
第60図　10号土坑出土遺物実測図(1/3)……58
第61図　11号土坑実測図(1/60)……59
第62図　11号土坑出土遺物実測図(1/3)……60
第63図　12号土坑実測図(1/60)……60
第64図　13号土坑実測図(1/60)……61

第65図　13号土坑出土遺物実測図(1/3) ……62
第66図　14号土坑実測図(1/60) ……63
第67図　14号土坑出土遺物実測図(1/3) ……64
第68図　15号土坑実測図(1/60) ……65
第69図　16号、17号、18号土坑実測図(1/60) ……66
第70図　16号、17号土坑出土遺物実測図(1/3) ……67
第71図　18ｂ号土坑出土遺物実測図(1/3) ……68
第72図　19号土坑実測図(1/60) ……68
第73図　20号土坑実測図(1/60) ……69
第74図　20号土坑出土遺物実測図(1/3) ……69
第75図　21号土坑実測図(1/60) ……69
第76図　21号土坑出土遺物実測図(1/3) ……70
第77図　22号土坑実測図(1/60) ……70
第78図　23号土坑実測図(1/60) ……71
第79図　23号土坑出土遺物実測図(1/3) ……71
第80図　24号土坑実測図(1/60) ……71
第81図　24号土坑出土遺物実測図(1/3) ……72
第82図　柱穴内及び包含層出土遺物位置図(1/1500) ……72
第83図　会下遺跡柱穴及び包含層出土遺物実測図(1/3) ……73
第84図　会下遺跡柱穴及び包含層出土遺跡実測図(1/3) ……74
第85図　会下遺跡出土の石帯実測図(2/3) ……75
第86図　会下遺跡表土層及び包含層出土遺物実測図(2/3) ……76
第87図　会下遺跡表土層及び包含層出土遺物実測図(1/3) ……77
第88図　会下遺跡表土層及び包含層出土遺物実測図(1/3) ……78
第89図　掘立柱建物の方位別配置図 ……80
第90図　掘立柱建物の東西軸傾斜度 ……81
第91図　掘立柱建物の面積の比較 ……81
第92図　焼けた壁土粘土(１号土坑出土) ……82
第93図　会下遺跡出土の坏法量分布 ……84
第94図　会下遺跡出土の高台付碗法量分布 ……84
第95図　会下遺跡出土の丸底碗法量分布 ……84
第96図　会下遺跡の皿法量分布 ……84
第97図　会下遺跡出土の５号土坑上層土器群 ……86
第98図　５号土坑上層土器群(黒星)と５号土坑下層土器群(白丸)の坏法量分布 ……87

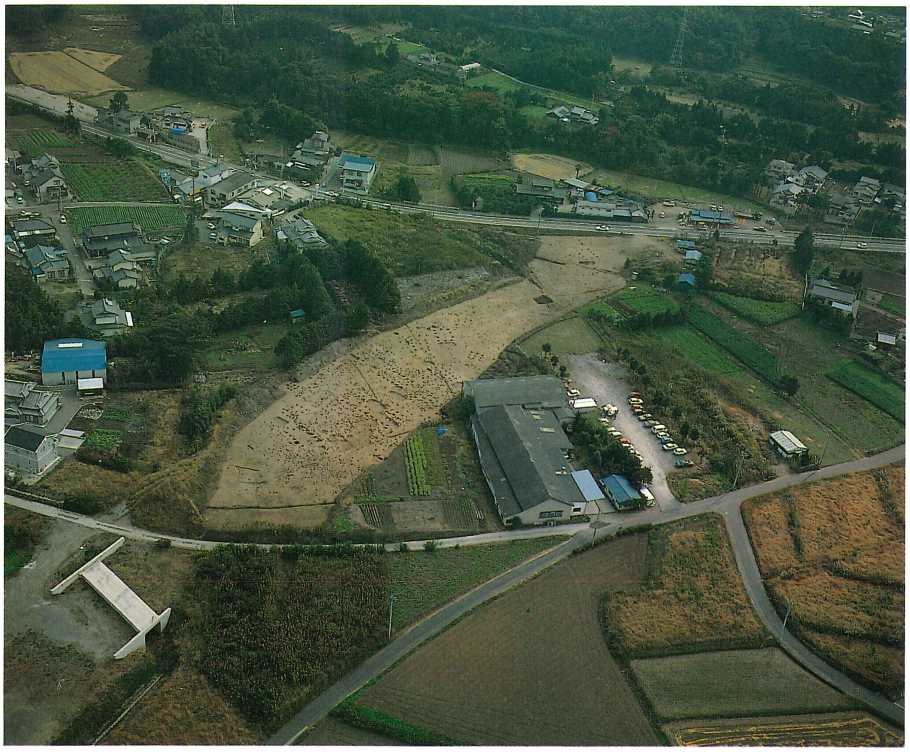
図版目次

図版１　調査区近景（北側より）…… 89
図版２　発掘調査風景（北側より）…… 89
図版３　①号掘立柱建物…… 90
図版４　②号掘立柱建物…… 90
図版５　③号掘立柱建物（西側より）…… 91
図版６　④号掘立柱建物（東側より）…… 91
図版７　⑤号掘立柱建物（東側より）…… 92
図版８　⑥号掘立柱建物（北側より）…… 92
図版９　⑦号、⑧号掘立柱建物（南側より）…… 93
図版10　⑨号、⑩号掘立柱建物（東側より）…… 93
図版11　⑪号掘立柱建物（東側より）…… 94
図版12　⑫号、⑬号掘立柱建物（東側より）…… 94
図版13　⑬号、⑭号掘立柱建物（東側より）…… 95
図版14　⑬号、⑭号掘立柱建物（東側より）…… 95
図版15　⑮号掘立柱建物（西側より）…… 96
図版16　⑰号掘立柱建物（南側より）…… 96
図版17　⑱号掘立柱建物（西側より）…… 97
図版18　１号土坑（南側より）…… 97
図版19　２号土坑（南側より）…… 98
図版20　４号土坑（南側より）…… 98
図版21　５号土坑（北側より）…… 99
図版22　５号土坑内遺物出土状態…… 99
図版23　８号土坑、７号土坑（南側より）…… 100
図版24　９号、10号土坑（東側より）…… 100
図版25　11号土坑（北側より）…… 101
図版26　12号土坑（北側より）…… 101
図版27　13号土坑（東側より）…… 102
図版28　19号土坑（東側より）…… 102
図版29　20号土坑（北側より）…… 103
図版30　24号土坑（南側より）…… 103
図版31　出土遺物１…… 104
図版32　出土遺物２…… 105
図版33　出土遺物３…… 106
図版34　出土遺物４…… 107
図版35　出土遺物５…… 108
図版36　出土遺物６…… 109
図版37　出土遺物７…… 110
図版38　出土遺物８…… 111
図版39　出土遺物９…… 112
図版40　出土遺物10…… 113
図版41　出土遺物11…… 114
図版42　出土遺物12…… 115
図版43　出土遺物13…… 116
図版44　出土遺物14…… 117
図版45　出土遺物15…… 118
図版46　出土遺物16…… 119
図版47　出土遺物17…… 120
図版48　出土遺物18…… 121

会下遺跡周辺の空中写真（○が会下遺跡）



会下遺跡出土の石帯の表・裏(1/1)



会下遺跡の発掘調査区空中写真

第Ⅰ章　調査経過と調査団の構成

1．調査経過

大分空港道路の建設は国東半島南端基部の日出町大字大神字会下から、国東半島東端の安岐町の大分空港までの約20.4kmの区間である。大分県教育委員会では道路建設に先立って、昭和59年に計画区内の分布調査を行い、同62年には遺跡のありそうなNo１地点からNo14地点の試掘調査を実施し、当該区域に６箇所の遺跡を確認している。

日出町の会下遺跡はNo１地点に相当し、昭和63年に道路幅40ｍ、長さ約200mの約8,000㎡を発掘調査し、平成２年度に追加の幅員拡張された、約500㎡の発掘調査も併せて実施している。

その結果、会下遺跡は奈良時代末～平安時代にかけての掘立柱建物群の他、楕円状を呈する用途不明の土坑等を多数検出し、これに伴出する須恵器や土師器等を数多く発見している。中でも遺物包含層中より検出した石帯は、県内初の発掘事例であり、極めて稀有な遺物であった。

会下遺跡の時代背景や性格を考えるうえで極めて重要な意味を持つものと推察される。

2．調査団の構成

会下遺跡における昭和63年度、平成２年度の調査団の構成は次のとおりである。

昭和63年度調査体制

調査主体　大分県教育委員会

調査指導　賀川光夫(別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員)
　　西谷　正(九州大学教授)

調　査　員　清水宗昭(大分県教育庁管理部文化課文化財調査第一係長)
　　栗田勝弘(大分県教育庁管理部文化課主任・現主査)
　　平川信哉(大分県教育庁管理部文化課・現杵築市教育委員会主事)
　　猪　　薫(大分県教育庁管理部文化課・現三光中学校)
　　丸山啓子(大分県教育庁管理部文化課・現安岐町教育委員会)

調査事務　今永一成(大分県教育庁管理部文化課庶務係長・現管理係長)
　　西　哲弘(大分県教育庁管理部文化課主任)

調査補助員　宮下貴浩(別府大学学生・現鹿児島県金峰町教育委員会)他小出信子、中野宏一、富来潤、橋本誠(別府大学学生)等の協力があった。

調査作業員　諸富安子、荒巻富子、小山友美、木戸由美子、笠置和枝、長谷川純子、赤尾マスヨ、阿部優子、小田盛栄、藤本孝子、坂本隆夫、岩崎シゲ子、長野君子、川野ヤスエ、青柳カズ子、北村チヨ子、三浦美智子、阿部トヨ、井上展子、藤田厚子、諸富正子、比本季憲、長野カズ子、柴尾マツエ、藤田多女子、畔上清子、近藤マツエ、河野ミツ子、上野明美、森本薫、藤井スミエ、田畑徳久、長野キクエ、小出かほり、橋本常子、一宮とも子(順不同)

発掘調査中、調査委員の賀川光夫、西谷　正先生をはじめ、小田富士雄(現福岡大学教授)、佐藤興治(現堺市立博物館副館長)、水野正好(奈良大学教授)、横山浩一(九州大学教授)、〔故〕入江英親(大分県文化財保護審議会委員)、佐藤　暁(元日出町誌編纂室長)氏等諸先生方をはじめ、日出町教育委員会、日出町文化財調査委員の諸氏等の視察来訪があった。

平成2年度調査体制

調査主体　大分県教育委員会

調　査　員　渋谷忠章(大分県教育庁管理部文化課調査第二係長)
　　栗田勝弘(大分県教育庁管理部文化課主査)

調査事務　今永一成(大分県教育庁管理部文化課庶務係長・現管理係長)
　　山口淳史(大分県教育庁管理部文化課主事)
　　原　浩一(大分県教育庁管理部文化課主事)

調査作業員　諸富安子、長谷川純子、小田盛栄、笠置豊子、畔上清子、山本久子、矢田加代子、阿部エミ子、田辺チトセ、田辺スエ子(順不同)

また、資料整理には神屋富美子、坂本洋子、長野とよみ等資料室勤務の方々があたった。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

会下遺跡は日出町大字大神字会下に位置し、奈良時代末～平安時代に至る掘立柱群の遺跡である。

日出町大字大神は国東半島南端の付け根部に当り、伝説的な大神比義を先祖と仰ぐ大神氏の本貫地に当る。会下遺跡はこの大神郷の北西部標高260～280mの緩丘陵に所在するが、古代宇佐神宮の神職としての大神氏一族との関係を示す文献や絵図等は皆無であり、古代、中世の大神氏を地誌の中で弁別し遺跡との関係で把握することは不可能に近い。

会下遺跡は掘立柱の建物群とこれに共伴する土坑の中から出土した須恵器や土師器から、8世紀末～9世紀にかけての遺跡であるが、日出町内の主要遺跡には古代に所属する遺跡は皆無に近い。僅かに、豊岡の七ツ岩遺跡は烽火台跡、藤原の鹿趾遺跡(第1図2)は祭祀跡とされているが、正式な発掘調査等はなされておらず、実態や時代決定等はいまひとつ不明といわずを得ない様相である。

一方、日出町内の著名な遺跡を時代別に瞥見すると、会下遺跡の南方2.5kmには眼下に別府湾を望む早水台遺跡(第2図32・33)がある。ローム層下の石英脈岩、石英粗面岩を素材とした石器が前期旧石器とされ、前期旧石器論争の舞台となった。また縄文早期の尖底押型文土器を出土した大規模な遺跡でもあり、早水台式土器の標式遺跡としても有名である。

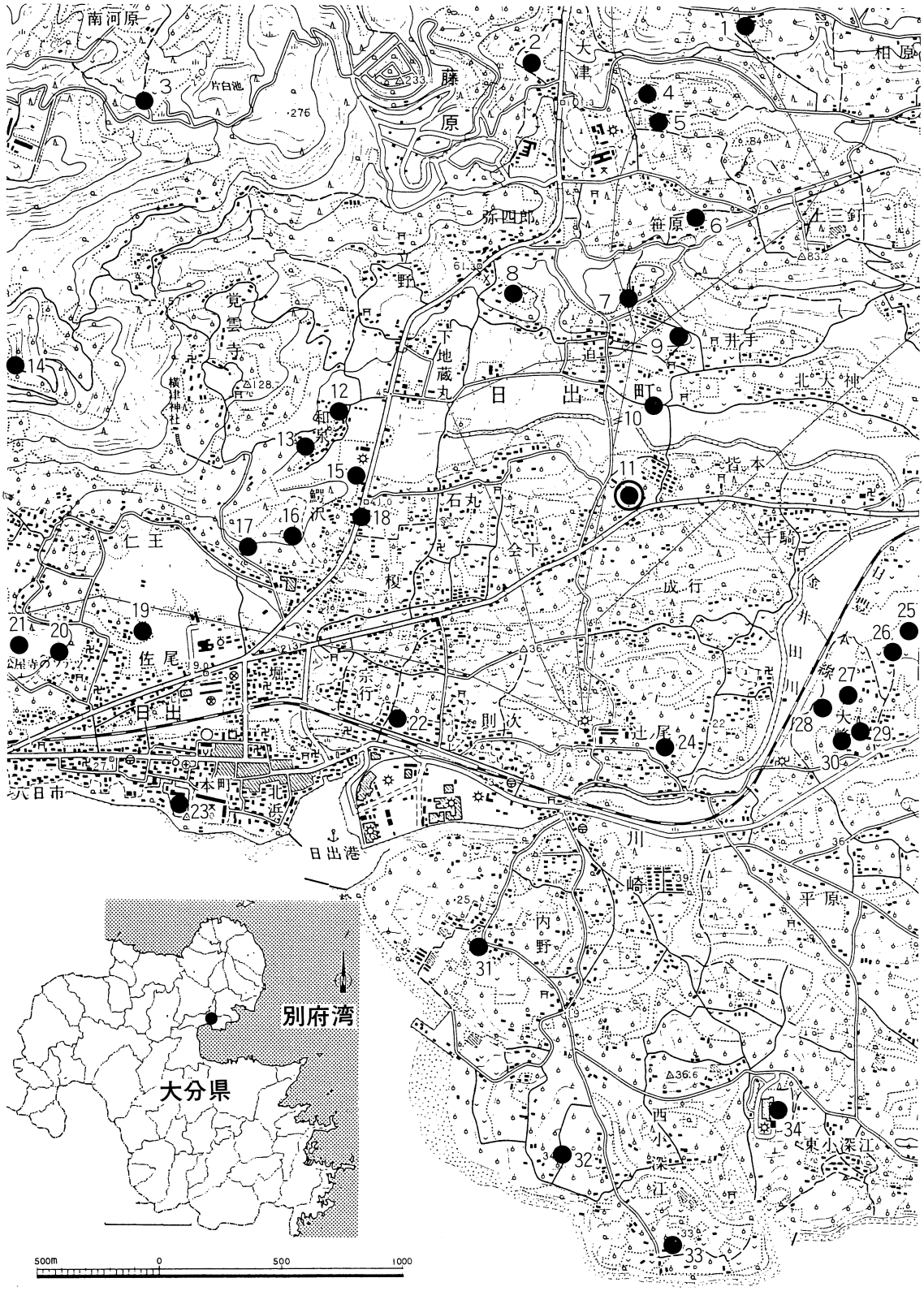
縄文後期では磨消縄文土器等を出土する橋詰遺跡(第1図22)が調査されている。

また、弥生時代では会下遺跡の北500mの空港道路の延長路線上で弥生中期の住居跡や小児用埋葬遺構を出土した成田尾遺跡(第2図9)や北1.5kmには弥生中期末～後期初頭の土器を出土した大津下原遺跡(第2図5)等がある。大津下原の支石墓からは二本の銅戈が発見されている。

一方、会下遺跡の東約2kmの真那井中原遺跡では弥生中期の甕や壷、土製勾玉等が出土しており、近くには組合式の石棺も発見されている。一方、真那井浮島神社には7本の広型銅鉾が所蔵されていた。これ等は伝尾首山出土とされている。

古墳時代の集落としては会下遺跡の北500mの空港道路の延長線で今村遺跡(第1図10)が調査されている。墳墓としては会下遺跡の西約1kmに直弧文を施す鹿角製刀装具を出土した鰐沢古墳群(第1図15～17)がある。一方、会下遺跡の北西1kmには横穴式石室の穴観音古墳があり、同南東1.2kmには伊勢森古墳群(第1図25～30)が群集している。

日出町大字豊岡には全長172mの前方後円墳といわれる亀峰山古墳があり、円筒埴輪片が発見されているといわれているが、本格的な調査も実測図もない状態であり、古墳かどうかの認定も含めて難しく見解の分かれるところである。



第１図　会下遺跡と周辺の主要遺跡位置図（国土地理院の1／25,000の地形図による）

1 相原遺跡(弥生)
2 鹿趾遺跡(歴史)
3 天提遺跡(旧石器)
4 上荒平遺跡(縄文)
5 大津下野遺跡(弥生)
6 笹原遺跡(弥生)
7 迫遺跡(弥生)
8 穴観音古墳(古墳)
9 成田尾遺跡(弥生)
10 今村遺跡(古墳)
11 会下遺跡(歴史)
12 和泉遺跡Ⅱ(歴史)
13 和泉遺跡Ⅰ(歴史)
14 真嶽城跡(歴史)
15 鰐沢古墳2号(古墳)
16 鰐沢古墳1号(古墳)
17 鰐沢古墳3号(古墳)
18 カネノトイ遺跡(弥生)
19 赤山遺跡(弥生)
20 狐塚遺跡(弥生)
21狐塚古墳(古墳)
22 橋詰遺跡(縄文)
23 暘谷城跡(歴史)
24 青津遺跡(弥生)
25 伊勢森6号墳(古墳)
26 伊勢森5号墳(古墳)
27 伊勢森3号墳(古墳)
28 伊勢森2号墳(古墳)
29 伊勢森1号墳(古墳)
30 伊勢森4号墳(古墳)
31 内野遺跡(縄文)
32 早水台遺跡A(縄文)
33 早水台遺跡B(縄文)
34 高尾山遺跡(旧石器)

第Ⅲ章　調査の概要

会下遺跡は空港道路の建設に伴う発掘調査であり、昭和63年と平成２年の２度に渡って計約8,500㎡の発掘調査を実施している。これは道路敷に沿うもので、幅約40mの長さ約210mに相当する。

遺構や遺物は奈良時代末～平安時代にかけてのものが主体であり、掘立柱の建物群やこれに伴出する土坑等が中心となる。これ等の遺構は調査区の全域に分布するが、調査区の南から約50m付近に標高の低い谷部が西・東に走っており、この緩い谷を画して、北側の標高約26m～28mの微高地を中心に展開している。また、南側の標高26ｍ～27mの緩斜面部にも遺構の点在を確認できる。

遺構は微高地では約30㎝～50㎝の表土耕作土層下の黄褐色ローム層に掘り込まれ、谷部付近には表土耕作土層の下に20㎝前後の漆黒色土層が堆積し、当該期の遺物の希薄な包含層を形成している。しかし、この層の上面や中位で遺構を検出することは不可能であった。

検出できた遺構は多数の柱穴群と掘立柱の建物群、これ等に伴出する歪な円形や楕円形の不定形土坑であった。掘立柱建物群は19基を確認し、土坑は24基を検出している。掘立柱建物は２間×２間が２棟、２間×３間が８棟、２間×４間が６棟、２間×５間が２棟、２間×α間が１棟である。これ等の大部分は東・西棟であり、南・北棟は２棟にすぎない。掘立柱建物群は重複関係や長軸方位で少なくとも２～５回の建て替えがありそうである。

一方、不定形の土坑は円形や楕円形の土坑が土坑内で重複し、不整形で歪な土坑が多い。これ等の用途や機能は速断できないが、覆土内には若干の遺物が包含されており、建物群の時期を決定する場合の有効な基礎資料となる。また、24基の土坑中、３基には土坑の床面近くに焼土塊があり、土坑の不確定要素の中での何らかの指針となりそうである。

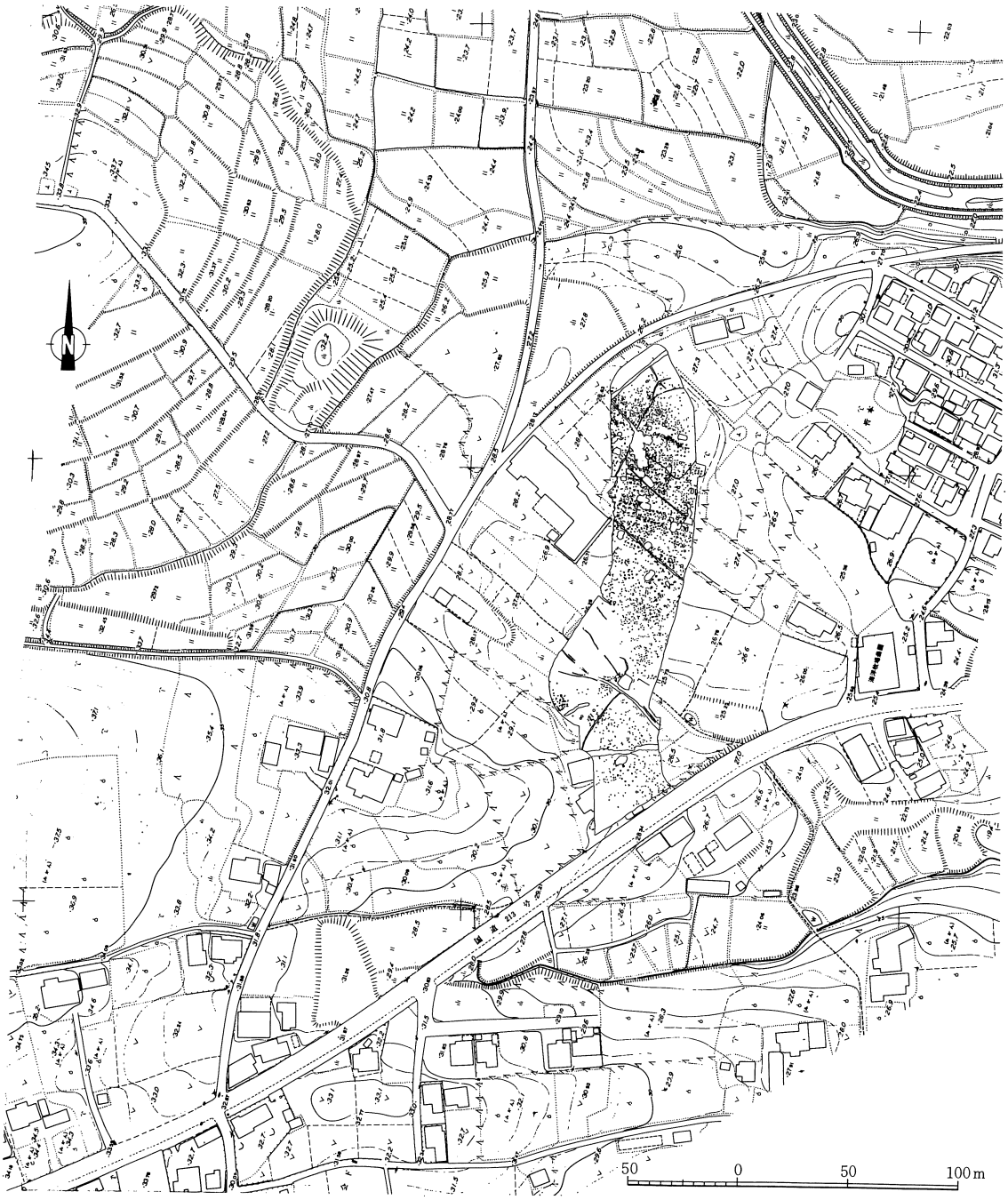
掘立柱建物と土坑との切り合い関係をみると、現在判明している新旧関係は、古い方から、２号土坑→⑬号掘立柱建物→１号土坑という関係が成立し、８号土坑→⑩号掘立柱建物という関係が成立するのみである。

また、①号掘立柱建物と24号土坑、④号掘立柱建物と12号土坑、⑥号掘立柱建物と11号土坑、⑦号掘立柱建物と13号土坑、⑰号掘立柱建物と４号土坑との関係には、何か有機的なものが推察されそうであるが、狭い空間の中での偶然性も否定できない。

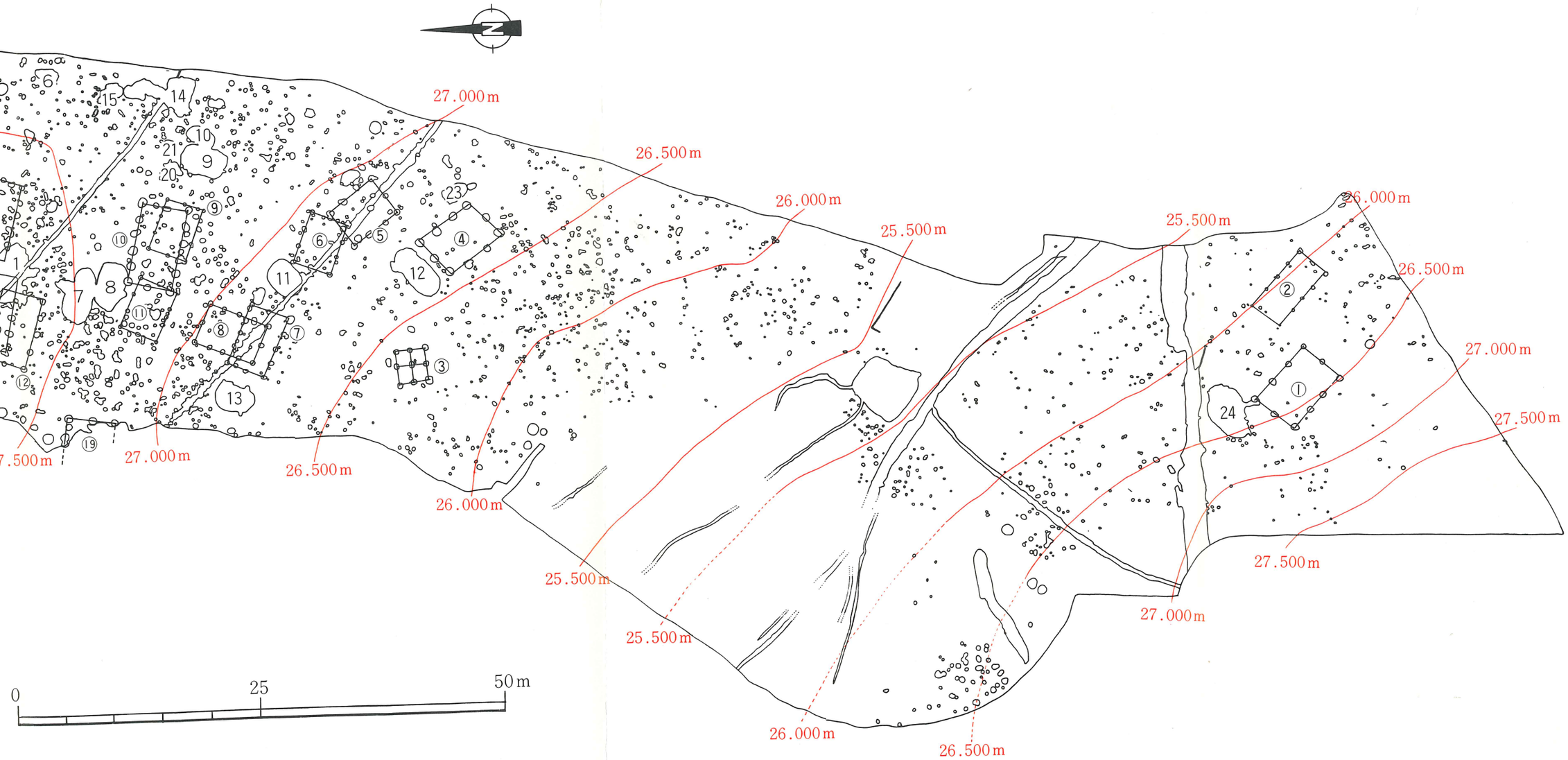
さて、土坑から出土した遺物は広大な５号土坑を除くと極めて少ない。出土遺物は奈良時代末～平安時代にかけての須恵器や土師器であり、器種は蓋・坏・椀・高坏・壷・鉢・甕等である。また、石製紡錘車、土錘、鞴の羽口、青銅製の座金、鉄製の紡錘車や鏃、刀子、石帯等も検出されている。中でも石帯は蛇紋岩製の巡方であり、発掘出土例では県内初の発見であった。石帯の出現は平安時代の初頭であり、土器類の時期や建物群の性格、遺跡の性質を考えるうえ

でのメルクマールとなり得るものである。

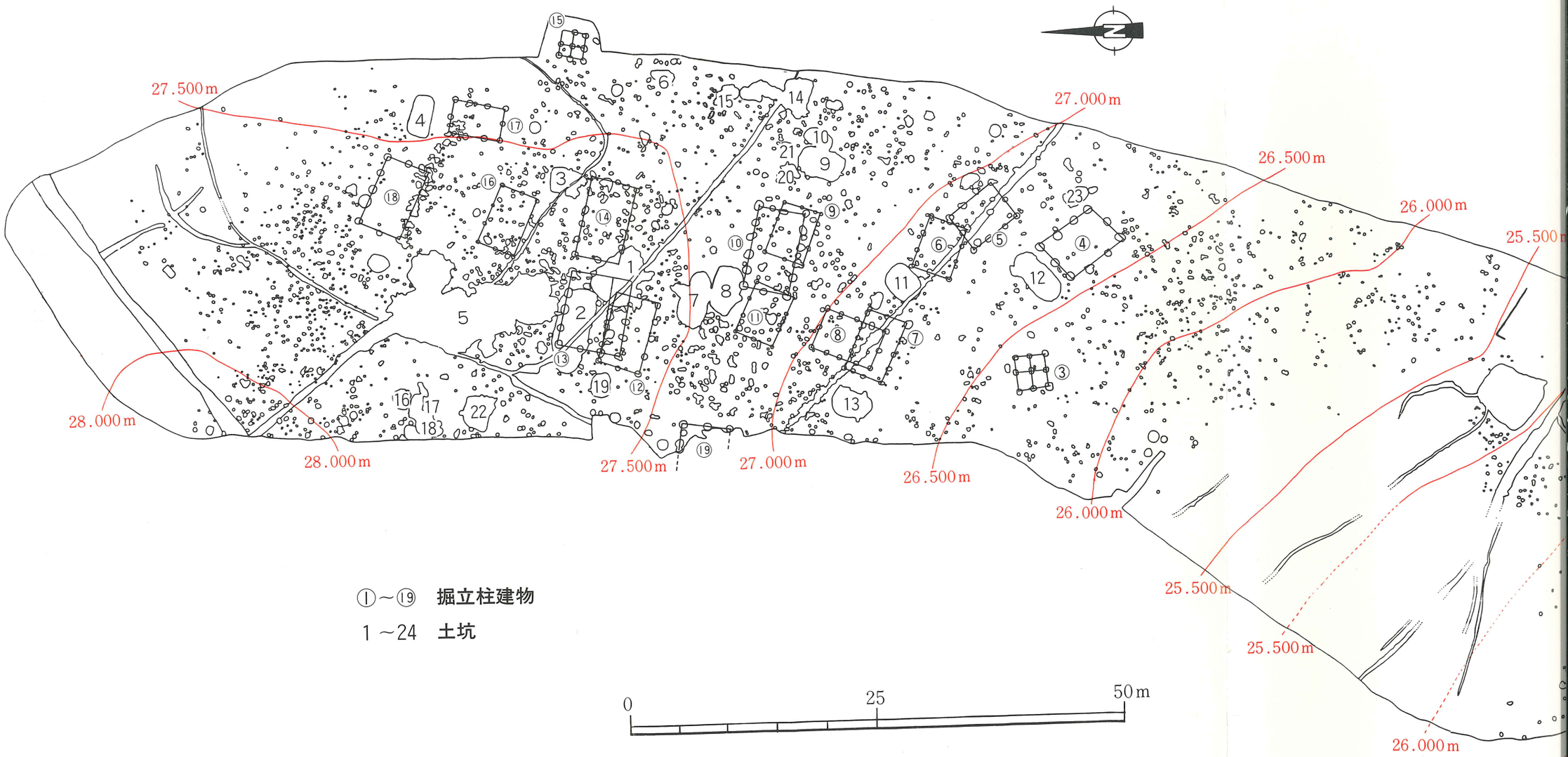
当該期以外の遺物では旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代の石鏃、中世の遺物等が若干出土しているが、遺構等もなく、会下遺跡は奈良時代末～平安時代の単純遺跡といっても過言ではない。



第２図　会下遺跡と周辺地形図（1/3000）



第３図　発掘調査区遺構配置図(1/500)



第3図　発掘調査区遺構配置図(1/500)

第Ⅳ章　検出遺構と遺物

会下遺跡より検出された遺構は掘立柱建物19棟と多数の柱穴群、及び楕円形～不定形を呈する土坑24基である。柱穴内や土坑群より出土した遺物は奈良時代末～平安時代にかけての須恵器や土師器等であり、この時代を主体とする単純遺跡と考えて良い。

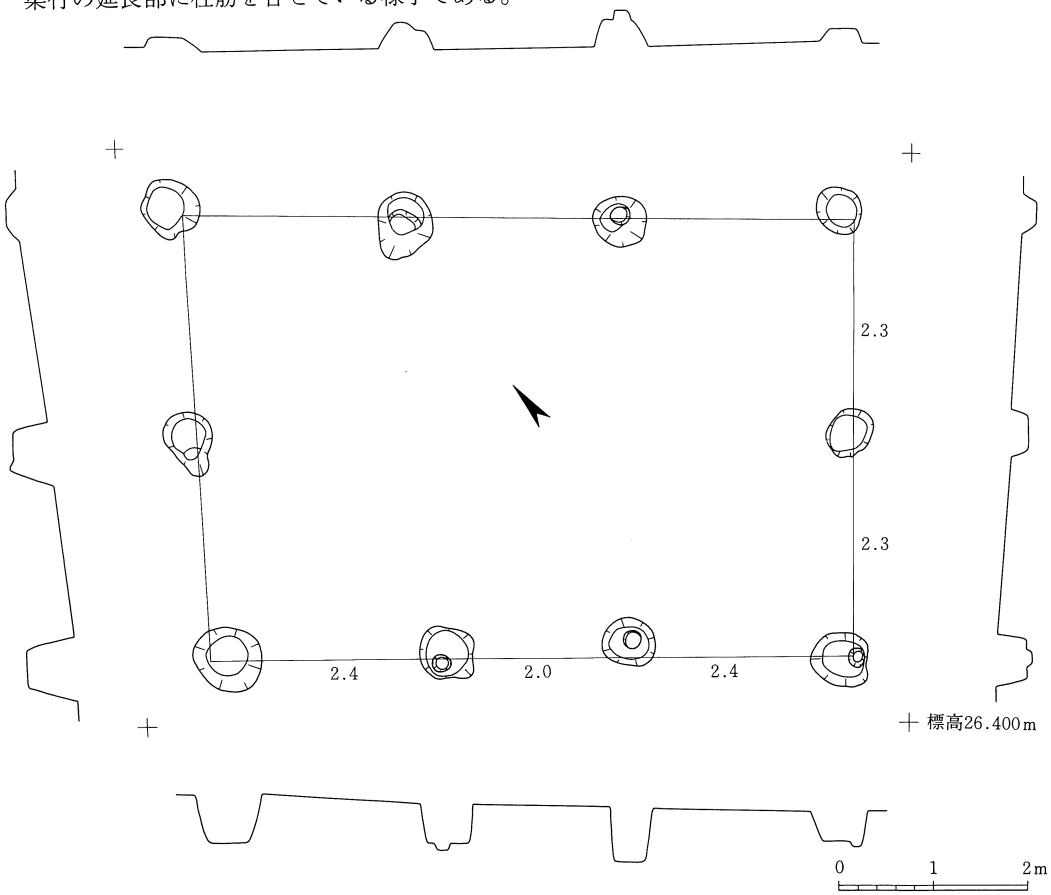
遺構の分布は標高26,000m～28,000mの北側微高平坦地を中心に密度を増し、調査区中央南寄りの標高25,500mの緩い谷部には柱穴等は希薄であり、遺構の展開はこの部分より北側微高地と南側の緩丘陵部斜面部とに２分される様子である。

また、調査区を斜断する数条の溝状遺構は切合関係が最も新しく、僅少な出土遺物から判断して、近世以降の所産と推量される。

１．掘立柱建物遺構

①号掘立柱建物（第４図）

調査区の南端斜面部に位置する掘立柱の建物であり、②号掘立柱建物とは方位を平行にとり、梁行の延長部に柱筋を合せている様子である。



第４図　①号掘立柱建物実測図(1/80)

建物の規模は桁行３間(6.9m)×梁間２間(4.6m)の東西棟である。建物面積は31.7㎡である。柱間寸法は柱痕跡の残りのいい桁行西列で、北より2.4～2.5m＋２m＋2.4mであり梁間は2.30mで２分割されている。柱穴の掘形径は50㎝～80㎝内に収まる。検出面から柱穴底までは、西側で約60㎝、東側斜面では約20㎝程度である。柱痕跡が残る柱穴が６本程度認められるが、直径は約20cm程で柱穴の中心に位置するとは限らない。

この建物の検出面の標高は26,000m～26,500mの間である。

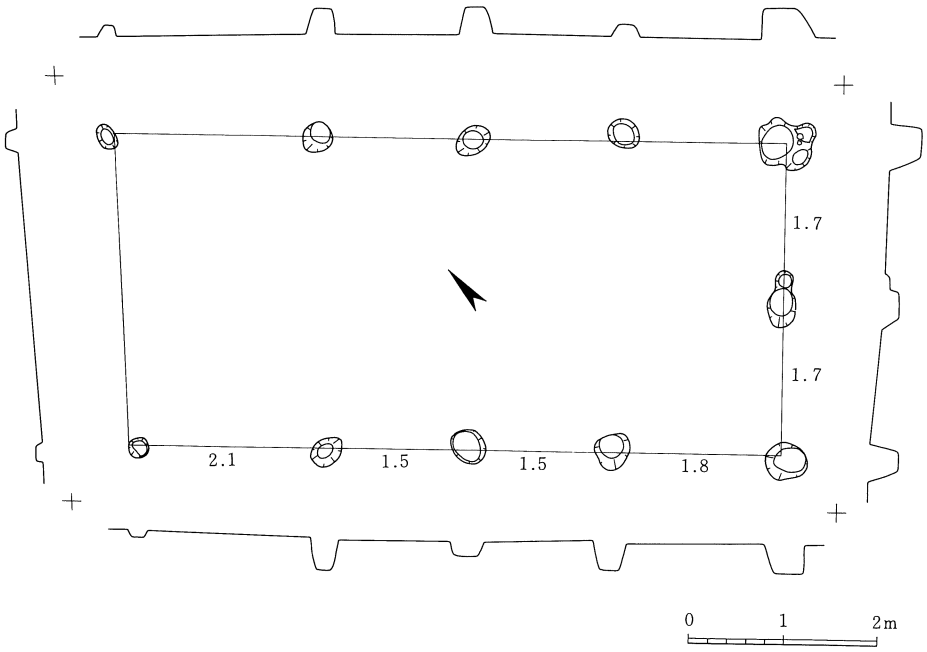
②号掘立柱建物(第５図)

①号建物の東側は梁行の柱筋をほぼそろえている。桁行４間(6.9m)×梁間２間(3.3m)の東西棟の建物である。建物面積は22.8㎡である。北側の梁間中央の柱穴は検出できなかった。

柱間寸法は桁行西列で、北側より2.1m＋1.5m＋1.5m＋1.8mとなり、南側の梁間は各1.7mと２分されている。

柱穴の掘形径は30㎝～45㎝、検出面から柱穴底部までは深さ15㎝～35㎝内に収まるが、北側梁部の２本は柱穴径が20㎝で深さも10㎝程度であり若干趣を異にする。あるいは、３間×２間の掘立柱建物である可能性もある。

この建物検出面の標高は26,000mである。



第５図　②号掘立柱建物実測図(1/80)

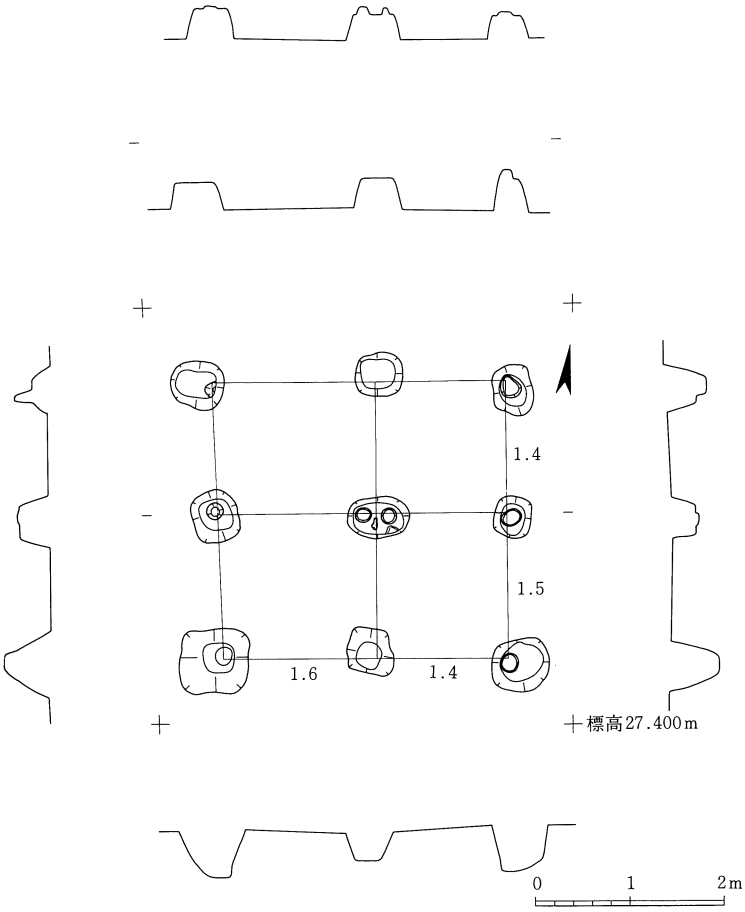
③号掘立柱建物(第６図)

調査区の中央部やや西寄りに位置する。東西２間(3.0m)×南北２間(2.9m)の総柱建物である。建物面積は8.7㎡である。ほぼ正方形を呈する。柱穴間の寸法は、柱痕跡を残す東側列で北より1.4mと1.5mであり、南側列では東より1.4mと1.6mである。

柱穴の掘形は隅丸方形から円形状を呈し、直径は40㎝～70㎝で、検出面からの深さは30㎝～50㎝である。柱痕跡を７柱に残しており、直径20㎝程度の柱を推測できる。

中央部の柱穴は楕円状を呈し、２本１対の柱痕跡を残している。

総柱の高床倉庫跡であろう。検出面の標高は26,500mである。



第６図　③号掘立柱建物実測図(1/80)

④号掘立柱建物(第７図)

調査区の中央部に位置する東西棟の歪な建物である。桁行３間(6.2m)×梁間２間(4.3m)であり、建物面積は26.7㎡である。

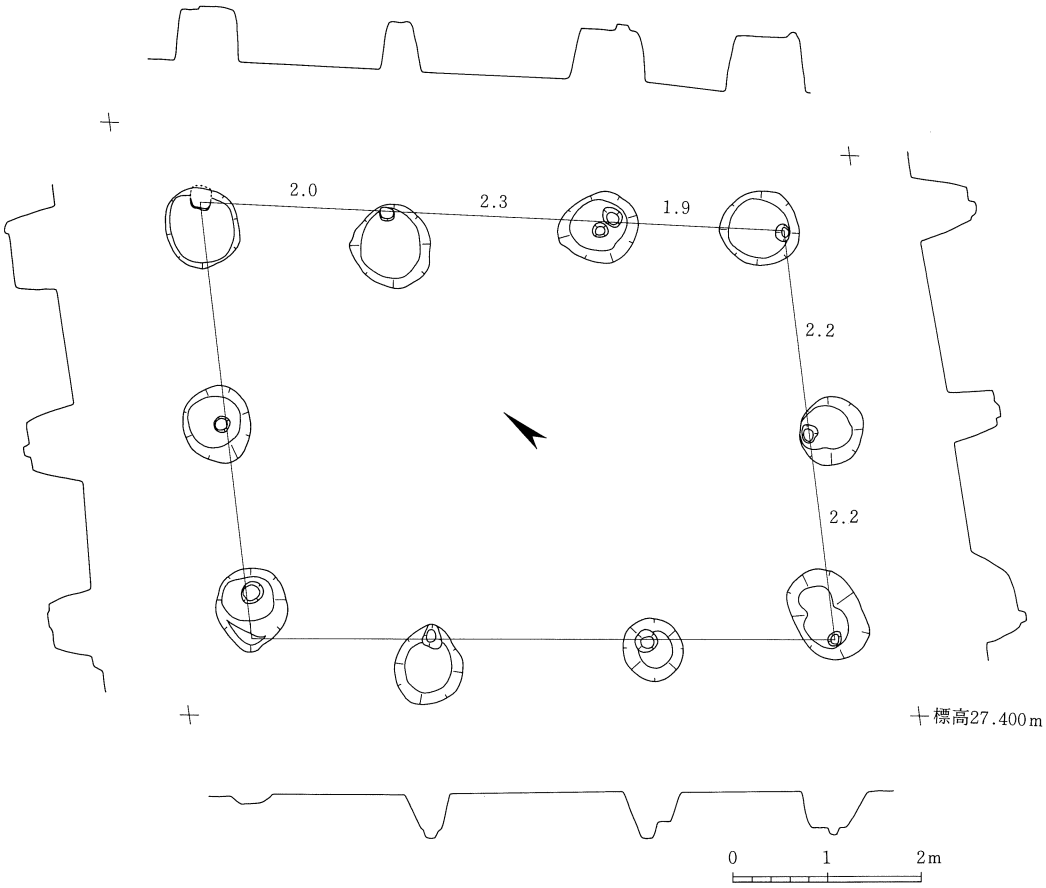
建物の西側梁間の延長線上は⑤号掘立柱の東側梁間と重なり、柱筋を合わせた配置をとっている。柱穴間寸法は桁行北側で西方から、２m＋2.3m＋1.9mであり、梁間は2.2mに２分されている。

柱穴の掘形径は70㎝～90㎝であり、検出面から柱穴底の深さは50㎝～60㎝である。全ての柱穴には柱痕跡を残しており、柱径は15㎝～20㎝程度である。

柱穴の掘形に比較して、実際の柱の復元径は小さく、柱穴中央部に位置する例は少ない。

つまり、柱穴位置は計画的な配置を示さず、あらかじめ掘った柱穴の中で、建物を建てようとした苦心の策である。したがって、掘立柱建物の平面形は平行四辺形である。

検出面の標高は26,800mである。



第７図　④号掘立柱建物実測図(1/80)

⑤号掘立柱建物(第８図)

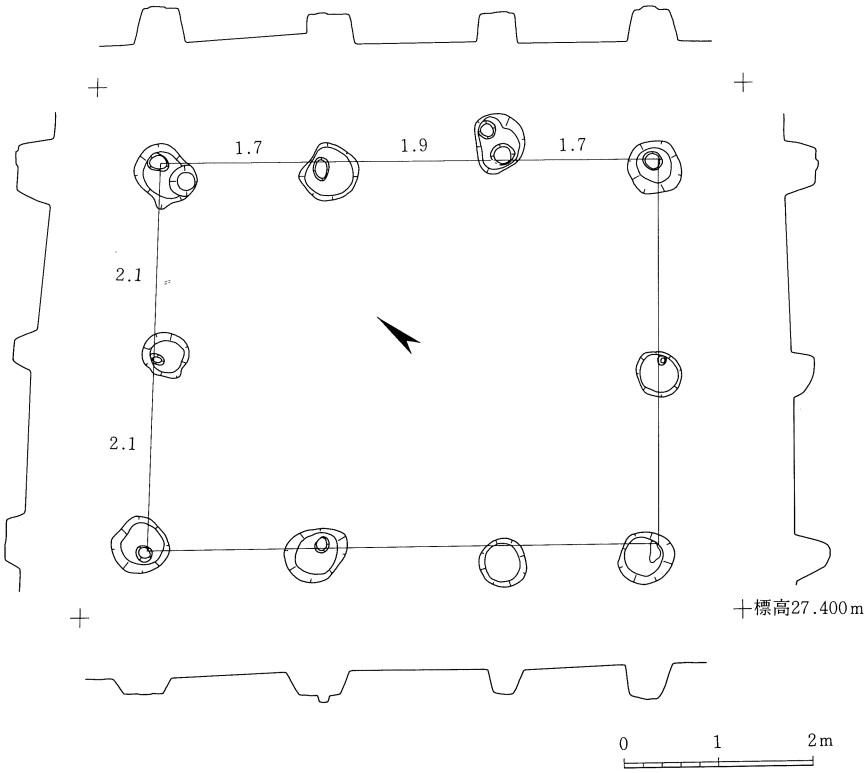
調査区の中央部に所在し、④号掘立柱建物とは長軸線を平行に配置しており、⑤号建物の東妻柱列と④号建物の西妻柱列とは一直線上になる。

桁行３間(5.3m)×梁間２間(4.1m)の東西棟建物である。建物面積は21.7㎡である。

柱間寸法は北側桁行の西側から1.7m＋1.9m＋1.7mであり、梁間は2.1mで２分されている。

柱穴の掘形は50㎝～60㎝であり、検出面からの深さは20㎝～40㎝である。柱穴には柱痕跡を残している。柱径を復元すると、10㎝～20㎝の小さなものである。

検出面の標高は26,800mである。



第８図　⑤号掘立柱建物実測図(1/80)

⑥号掘立柱建物(第９図)

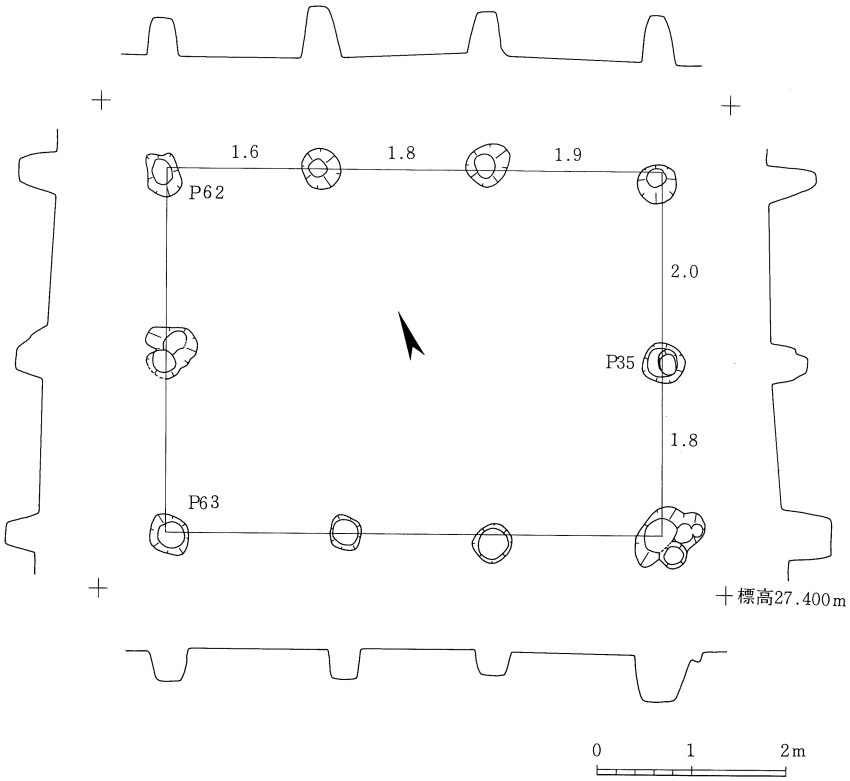
調査区の中央部に位置し、⑤号掘立柱建物とは一部重複しているが、先後関係は定かではない。

建物は桁行３間(5.3m)×梁間２間(3.8m)を呈す東西棟の掘立柱である。建物面積は20.1㎡である。柱穴間の寸法は北側桁行の西方から、1.6m＋1.8m＋1.9mを測り、東側の梁間は北方から２mと1.8mに２分されている。

柱穴の掘形径は30㎝～40㎝で、検出面から柱穴底面までは30㎝～50㎝を測る。

検出面の標高は26,800mである。

出土遺物(第10図)



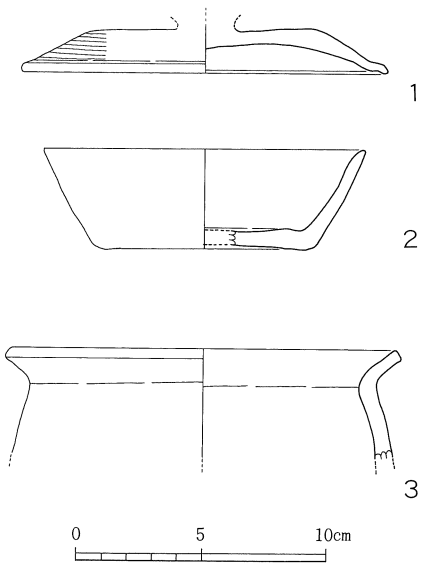
第９図　⑥号掘立柱建物実測図(1/80)

⑥号掘立柱建物のＰ-63、Ｐ-62、Ｐ-35の覆土中より土師器が出土している。

第10図１はＰ-63から出土した土師器の蓋である。撮み部は欠損し、器表は表裏とも回転篦削りである。口径14.8cmを測る。

第10図２はＰ-62出土の土師器の坏である。口径13cmを測り、器高４cmを呈する。底部は回転ヘラ切りで底径8.9cm。

第10図３はＰ-35出土の甕の口縁部である。表裏はナデ調整され、口径は16cmを測る。



第10図　⑥号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(1/3)

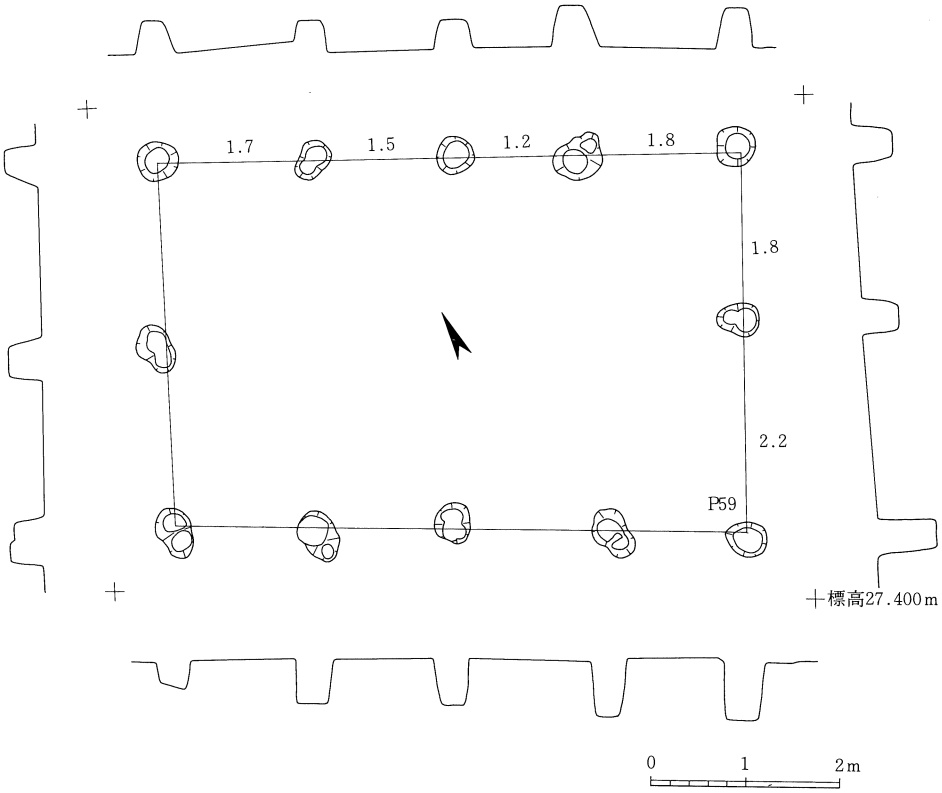
⑦号掘立柱建物(第11図)

調査区の中央西寄りに位置する東西棟の建物である。南北棟の⑧号掘立柱建物と主軸を直角にして重なり合っている。

桁行4間(6.2m)×梁間2間(4m)を測り、建物面積は24.8m²である。柱穴間の寸法は北側桁行で西から1.7m+1.5m+1.2m+1.8mを測り、梁間は東側で1.8mと2.2mに2分されている。建物の南側には1間の庇(第3図参照)が想定されそうであるがここでは保留しておく。

柱穴の掘形径は平均40cmで、検出面からの深さは30cm～70cmまでを測る。

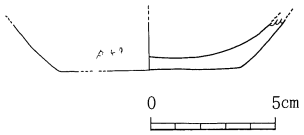
検出面の標高は26,800mである。



第11図　⑦号掘立柱建物実測図(1/80)

出土遺物(第12図)

第12図はP-59の覆土より出土した土師器の坏の底部である。底部は回転ヘラ切りで、径7.4cmを測る。



第12図　⑦号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(1/3)

⑧号掘立柱建物(第13図)

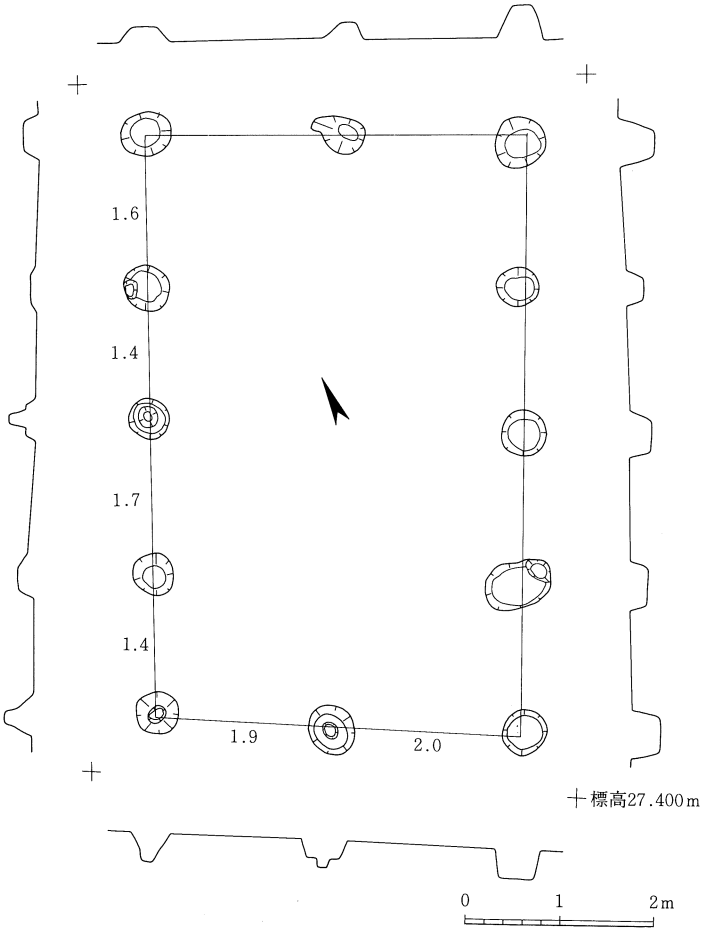
調査区中央の西寄りに位置し、⑦号掘立柱建物と主軸を直角に重複する南北棟の建物である。

桁行は4間(6.1m)で梁間は2間(3.9m)を測り、面積は23.8m²である。

桁行西列の柱間寸法は、北から1.6m+1.4m+1.7m+1.4mで、南側梁間は1.9m+2mに2分されている。

柱穴掘形は約40cm～70cmであり、検出面から柱穴底までは10cm～40cmと幅を持つ。柱痕跡は5本の柱穴に残っており、柱の復元径は10cm～20cmに収まる。

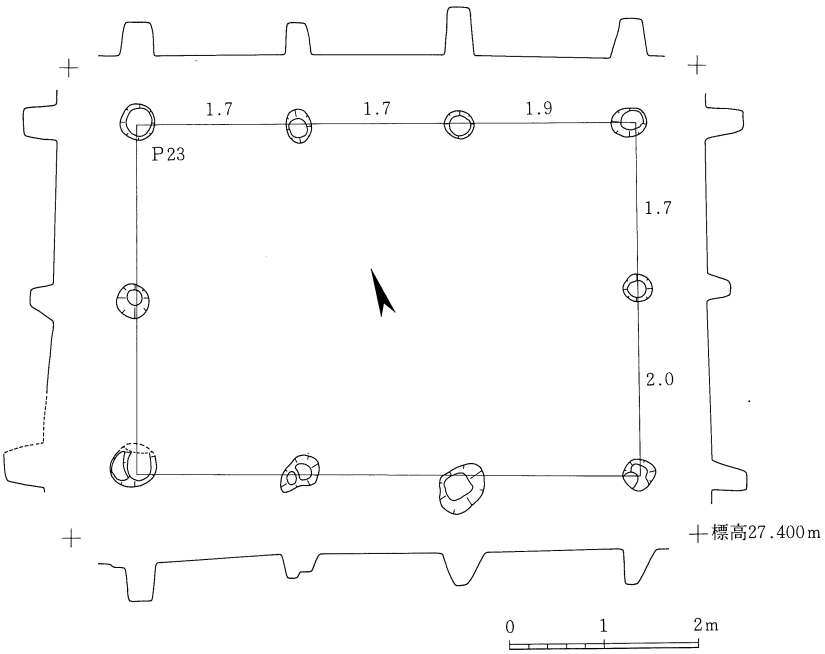
検出面の標高は26,800mである。



第13図　⑧号掘立柱建物実測図(1/80)

⑨号掘立柱建物(第14図)

調査区中央部のやや北寄りに位置する東西棟の建物である。10号掘立柱建物と斜めに重なり、西側の12号掘立柱建物とは並列する位置関係にあり長軸を共有する様相を呈する。



第14図　⑨号掘立柱建物実測図(1/80)

建物は桁行3間(5.3m)で梁間2間(3.7m)であり、面積は19.6m²である。

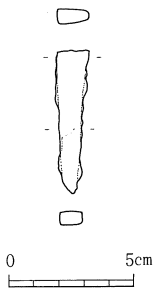
北側桁行の柱穴間の寸法は西方から、1.7m+1.7m+1.9mであり、東側梁間は1.7mと2mとに2分されている。

柱穴の掘形は30cm～50cmと比較的小さい。検出面から柱穴底部までは25cm～50cmである。

検出面の標高は27,300mである。

出土遺物(第15図)

第15図はP-23の覆土から出土した鉄器である。鉄錆が著しく器種は判然としないが、刀子の基部と推察される。



第15図　⑨号掘立柱建物柱穴出土遺物実測図(1/3)

⑩号掘立柱建物(第17図)

調査区の北寄り中央部に位置する東西棟の建物である。会下遺跡では中心的な規模の建物である。8号土坑との切り合い関係では土坑よりも新しい。

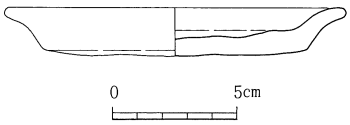
建物の桁行は５間（８ｍ）で梁間は２間（4.6m）であり、建物柱穴内の面積は36.8㎡である。南側桁行の柱穴間の寸法は、西側より1.7m＋1.4m＋1.6m＋1.7m＋1.6mであり、東側の梁間は2.3mで２分されている。

柱穴の掘形は直径が60㎝～100㎝であり、規模の大きな柱を想像させる。しかし、実際の柱穴内に残る柱根痕跡の直径は15㎝～25㎝程度であり、掘形の割には小振りである。

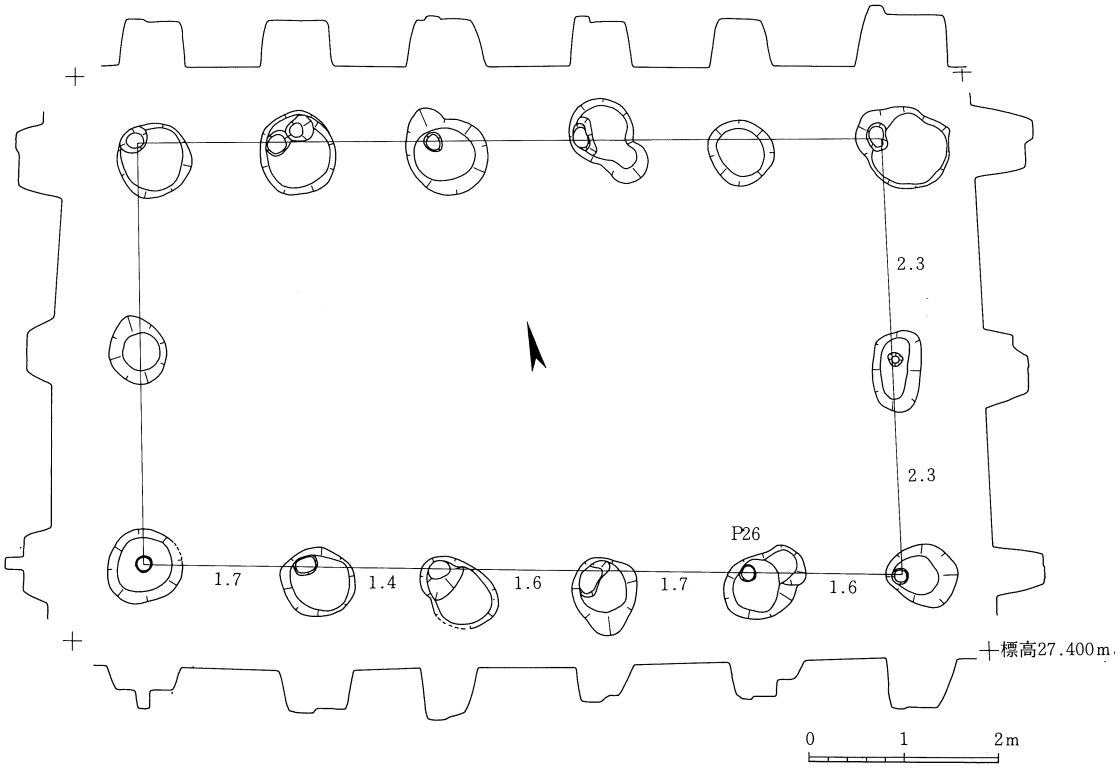
柱穴の深さは検出面より40㎝～60㎝を測り、検出面の標高は27,300mである。

出土遺物（第16図）

第16図はＰ-26の覆土より出土した土師器の皿である。口径は13.8㎝、器高は1.9㎝、底径は10.7㎝を測る。底部は回転ヘラ切りである。



第16図　⑩号掘立柱建物
柱穴出土遺物実測図



第17図　⑩号掘立柱建物実測図（1/80）

⑪号掘立柱建物(第18図)

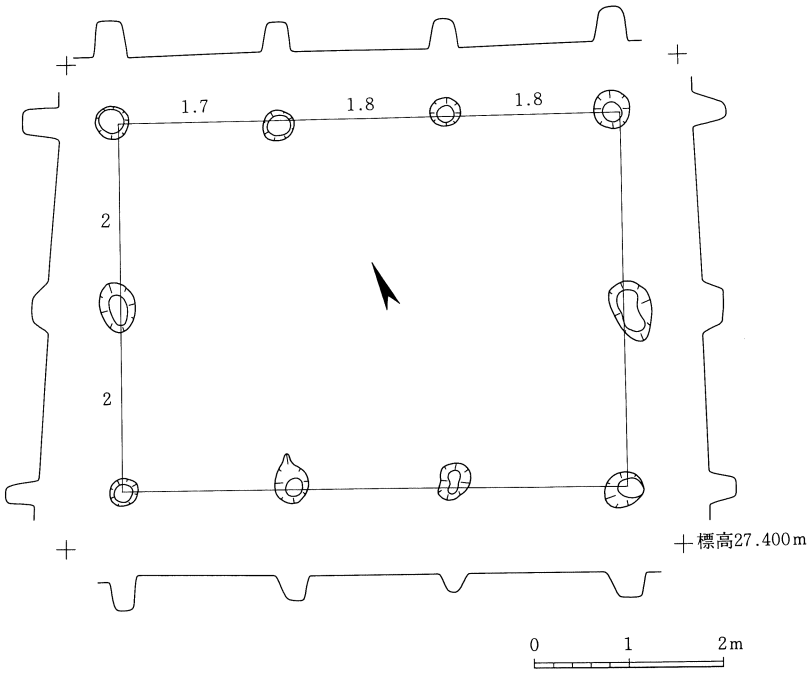
10号掘立柱建物とは一部重複関係にある。規模や建物方位等は9号掘立柱建物を西へ平行移動させた様相を呈する。

桁行3間(5.3m)、梁間2間(3.9m)の東西棟建物であり、面積は20.7㎡を測る。

北側桁行の柱穴間寸法は西方から1.7m+1.8m+1.8mであり、西側梁間は2mで2分される。

柱穴の掘形は直径30cm～40cmを測り、検出面から柱穴底部までは20cm～40cmである。

検出面の標高は27,100mである。



第18図　⑪号掘立柱建物実測図(1/80)

⑫号掘立柱建物(第19図)

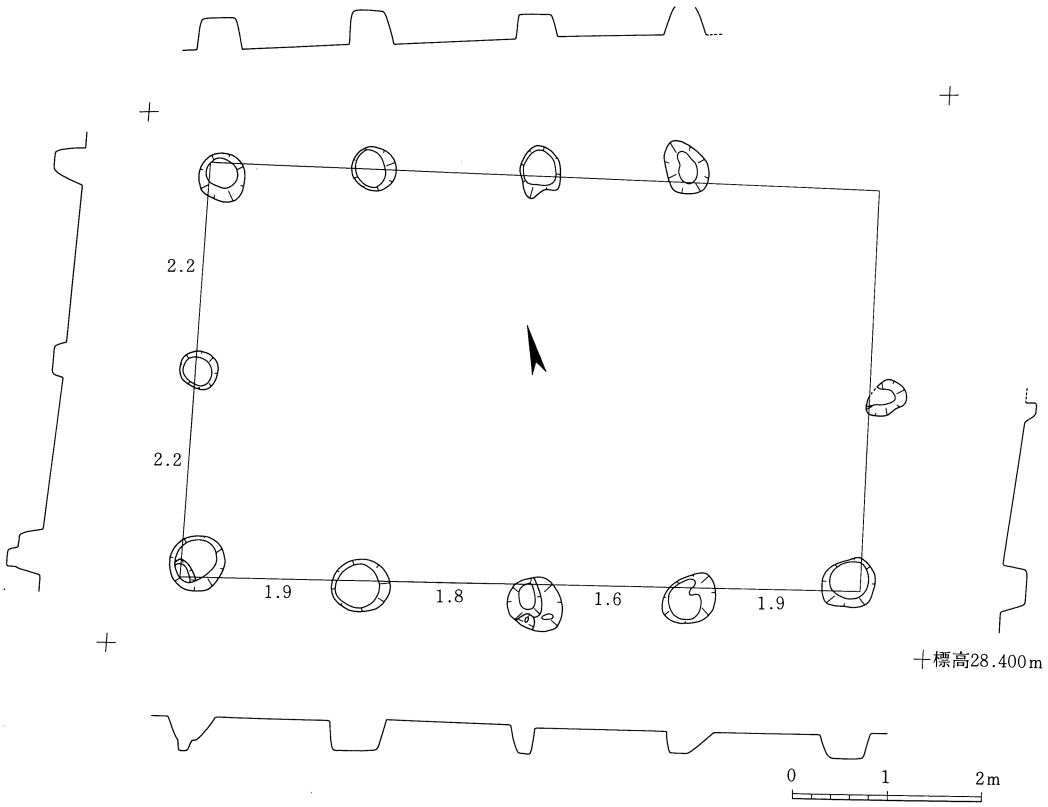
調査区北西部に位置する4間×2間の東西棟建物である。建物の北東隅部の柱穴は1号土坑によって切られている。また、北側の桁行筋は13号掘立柱の南桁行と重複する。

建物の規模は桁行4間(7.2m)で梁間2間(4.4m)であり、建物面積は31.7㎡となる。

南桁行の柱穴間寸法は、西方から1.9m+1.8m+1.6m+1.9mとなり、西側梁間は2.2mで2分割されている。

柱穴の掘形は径40cm～60cmであり、深さは10cm～30cmである。

検出面の標高は27,600mである。



第19図　⑫号掘立柱建物実測図(1/80)

⑬号掘立柱建物(第20図)

調査区の北東部に位置する4間×2間で南側に庇を持つ東西棟建物である。

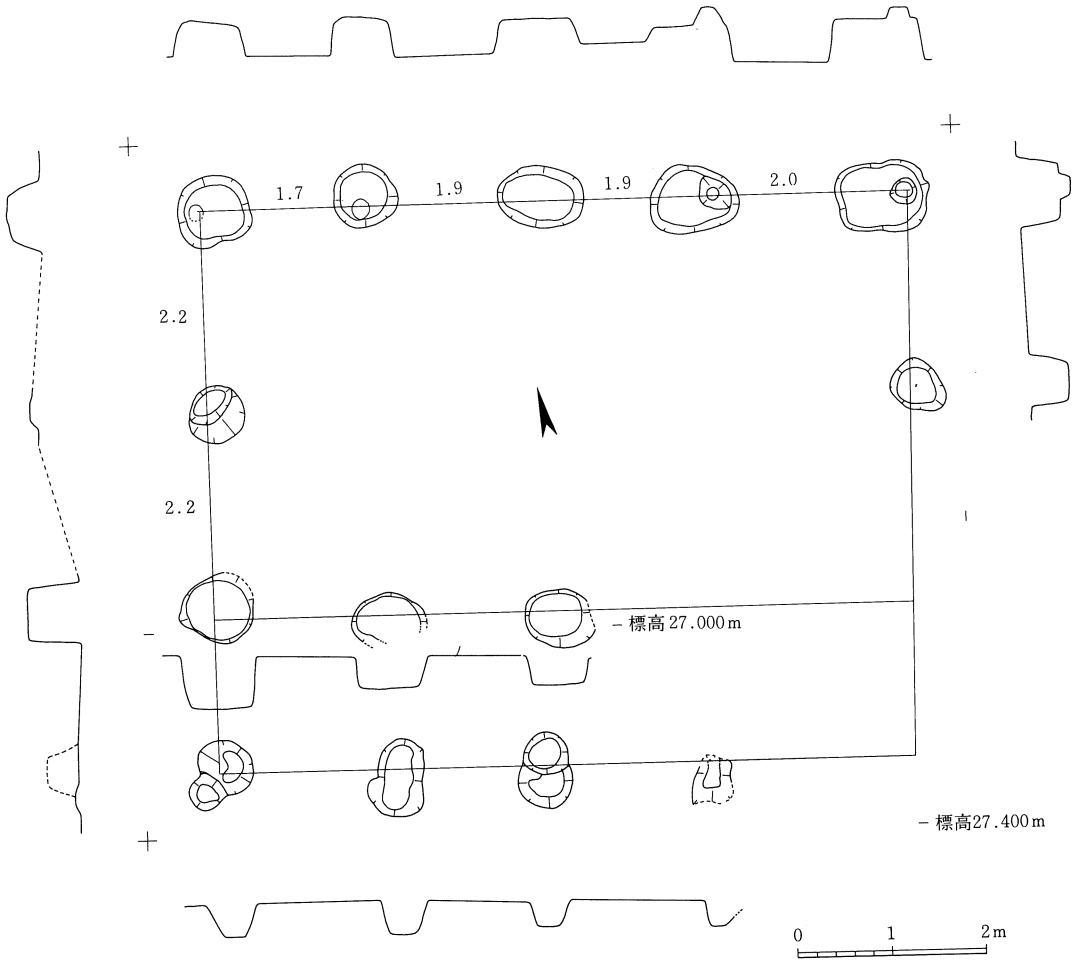
建物の南東隅部は1号土坑に切られており柱穴は残らない。一方、2号土坑の覆土内で建物の柱穴を検出できることから、2号土坑より新しい時期の所産である。また、建物の南側桁筋は⑫号掘立柱建物と共有しているが、その先後関係は判らない。つまり、古い方から、2号土坑→⑫、⑬号掘立柱建物→1号土坑という関係が成り立つ。

⑬号建物は桁行4間(7.5m)、梁間2間(4.3m)であり、面積は32.3m²である。

北側桁行の柱穴間寸法は、西方より1.7m＋1.9m＋1.9m＋2mとなり、西側梁間は2.2mで2分されている。建物の南側には1間(1.6m)の庇が付設されている。

柱穴の掘形は60cm～100cmと比較的大きいが、4本の柱穴内に残る柱痕跡の直径は18cm～25cm程度である。柱穴が楕円状を呈したり、やや歪なもの等は建て替えの際に柱を抜き取った痕跡なのかもしれない。

検出面から柱穴底部までは20cm～50cmである。検出面の標高は26,700mである。



第20図　⑬号掘立柱建物実測図(1/80)

⑭号掘立柱建物(第22図)

調査区の北寄り中央部に位置する東西棟建物である。⑬号掘立柱建物の桁筋の東側への延長部にあたる。建物の東西隅部の柱穴は1号土坑に切られており残っていない。

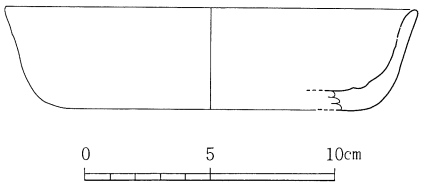
桁行5間(7.6m)で梁間2間(4.5m)であり、面積は34.2㎡である。

北側桁行の柱穴間寸法は西から1.4m＋1.6m＋1.5m＋1.5m＋1.6mとなり、東側梁間は2.3mと2.2mで2分されている。

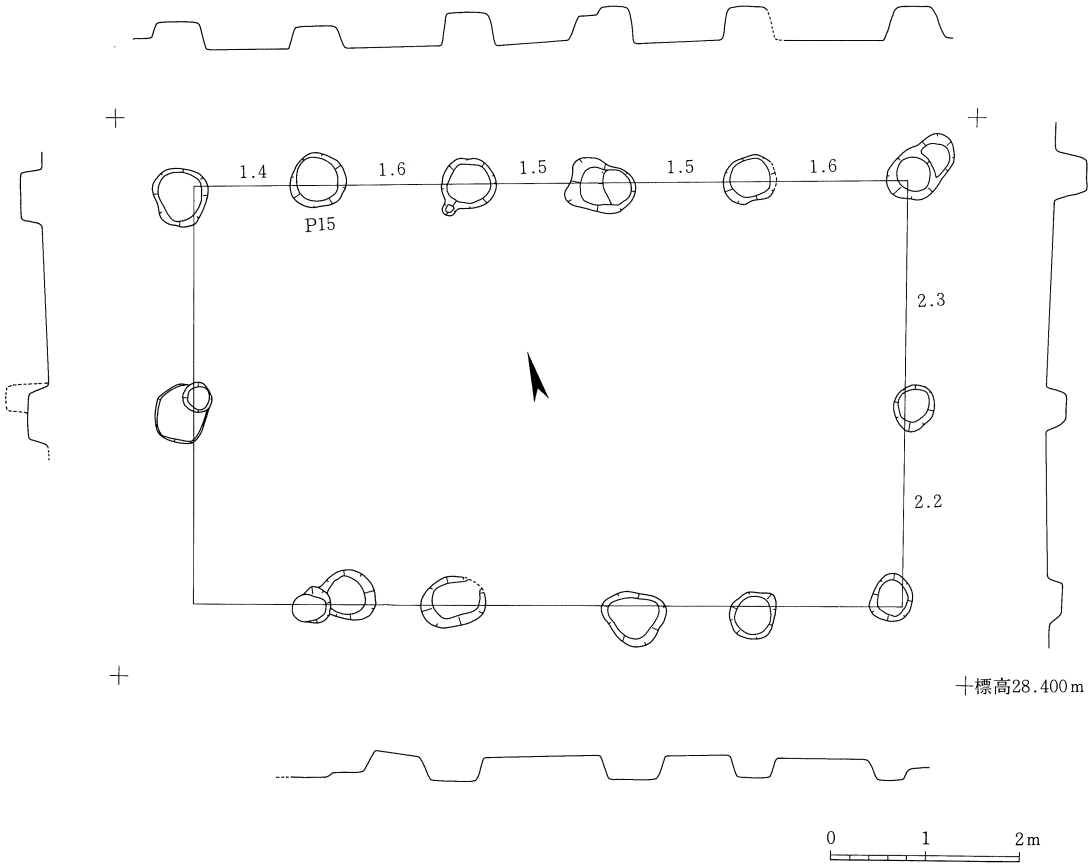
柱穴の掘形は40㎝～70㎝であり、深さは20㎝～40㎝である。検出面の標高は27,600mである。

出土遺物(第21図)

第21図はＰ-15の覆土から出土した土師器の坏である。口径16.6㎝、底径13.7㎝で器高は4.1㎝と推測できる。



第21図　⑭号掘立柱建物
柱穴出土遺物実測図(1/3)



第22図　⑭号掘立柱建物実測図(1/80)

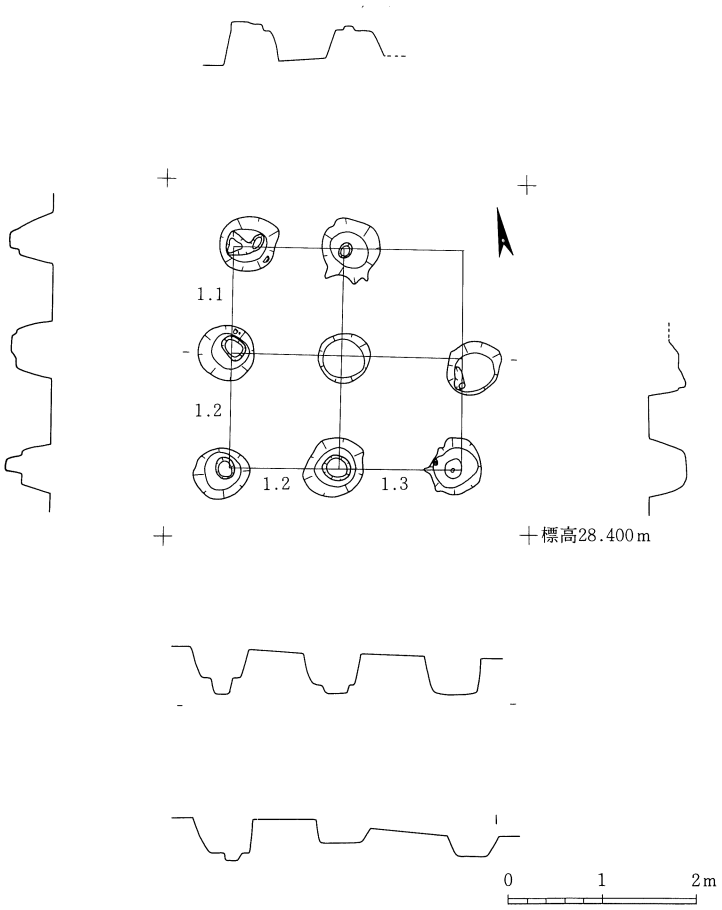
⑮号掘立柱建物(第23図)

調査区の北東隅部で検出された総柱の建物である。建物の北東隅の柱穴は後世の撹乱で削平されている。

建物は南北２間(2.3m)で東西２間(2.5m)であり、面積は5.8m²である。

柱穴の掘形は径60cm前後であり、７本の柱穴内には柱痕跡が残存していた。柱径は10cm～30cm程である。

検出面から柱穴底部までは20cm～50cmであり、検出面の標高は27,200mである。



第23図　⑮号掘立柱建物実測図(1/80)

⑯号掘立柱建物(第24図)

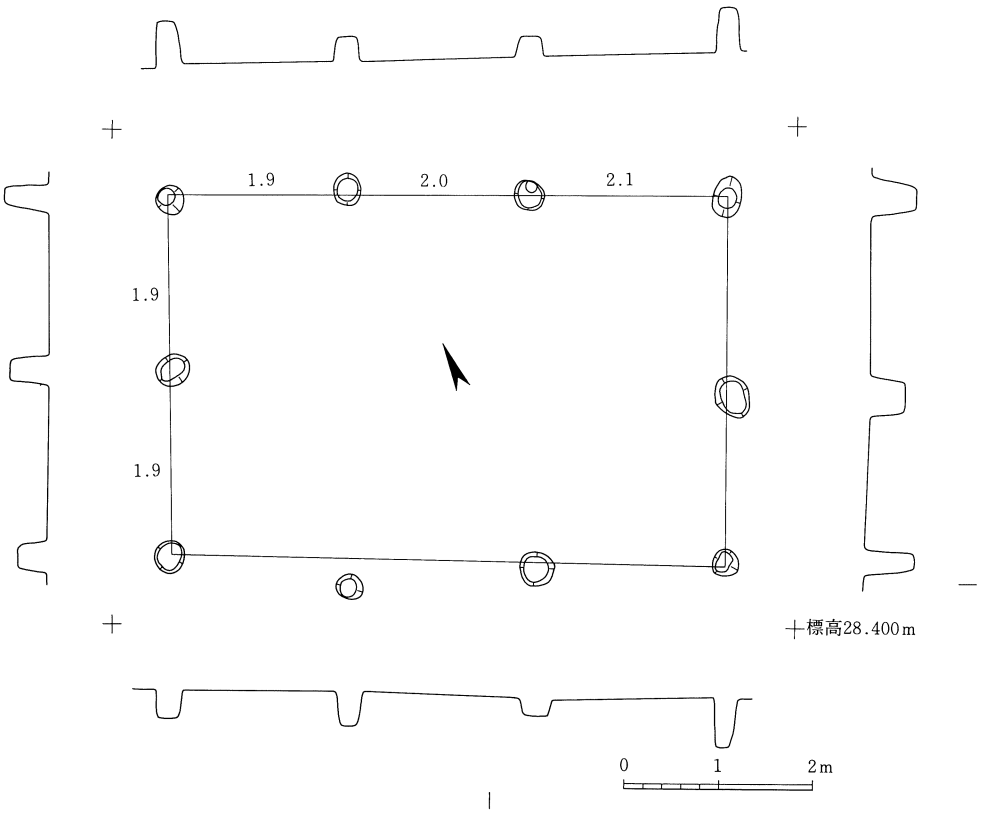
調査区の北側中央部に位置する東西棟の建物である。

建物規模は桁行３間(６m)で梁間２間(3.8m)であり、面積は22.8m²である。

北側桁行の柱穴間寸法は、西方から1.9m＋２m＋2.1mとなり、西側梁間は1.9mで２分されている。

柱穴の掘形は他に比してやや小さく、30cm前後であり、深さは20cm～50cm程度である。

検出面の標高は27,700mである。



第24図　⑯号掘立柱建物実測図(1/80)

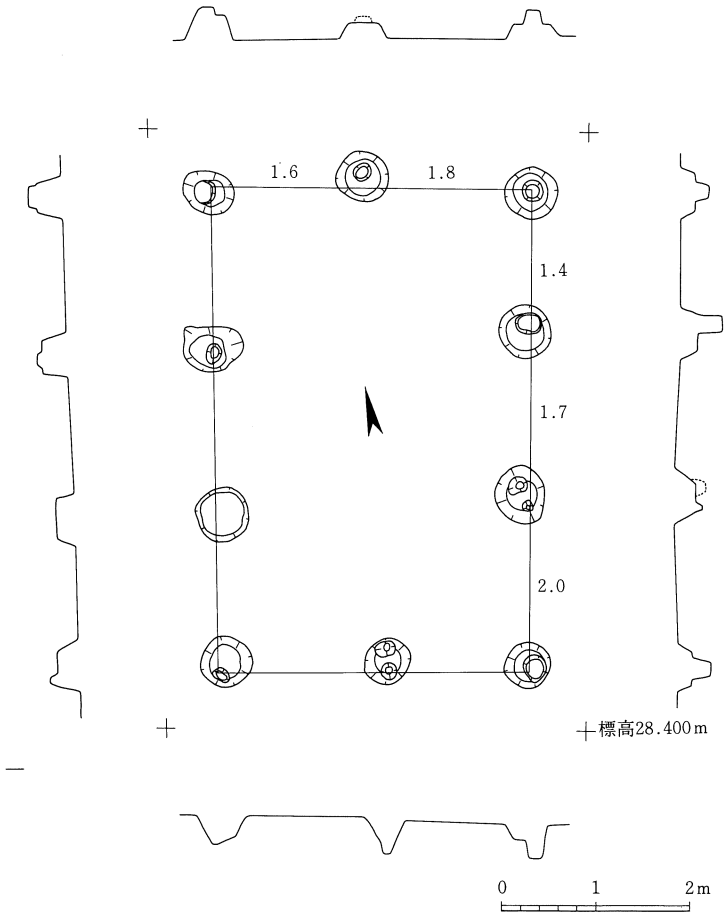
⑰号掘立柱建物(第25図)

調査区の北東部に位置する南北棟の建物である。建物の北方には4号土坑が隣接している。建物の規模は桁行3間(5.2m)、梁間2間(3.4m)であり、面積は17.7m²である。

建物の東側桁行の柱間寸法は、北から1.4m＋1.7m＋2.0mとなり、北側の梁間は1.8mと1.6mとに2分されている。

柱穴の掘形は径50cm～60cmであり、深さは30cm～40cmである。大部分の柱穴内には柱痕跡を残している。柱の復元径は約10cm～20cmと小さい。

検出面の標高は27,500mである。



第25図　⑰号掘立柱建物実測図(1/80)

⑱号掘立柱建物(第26図)

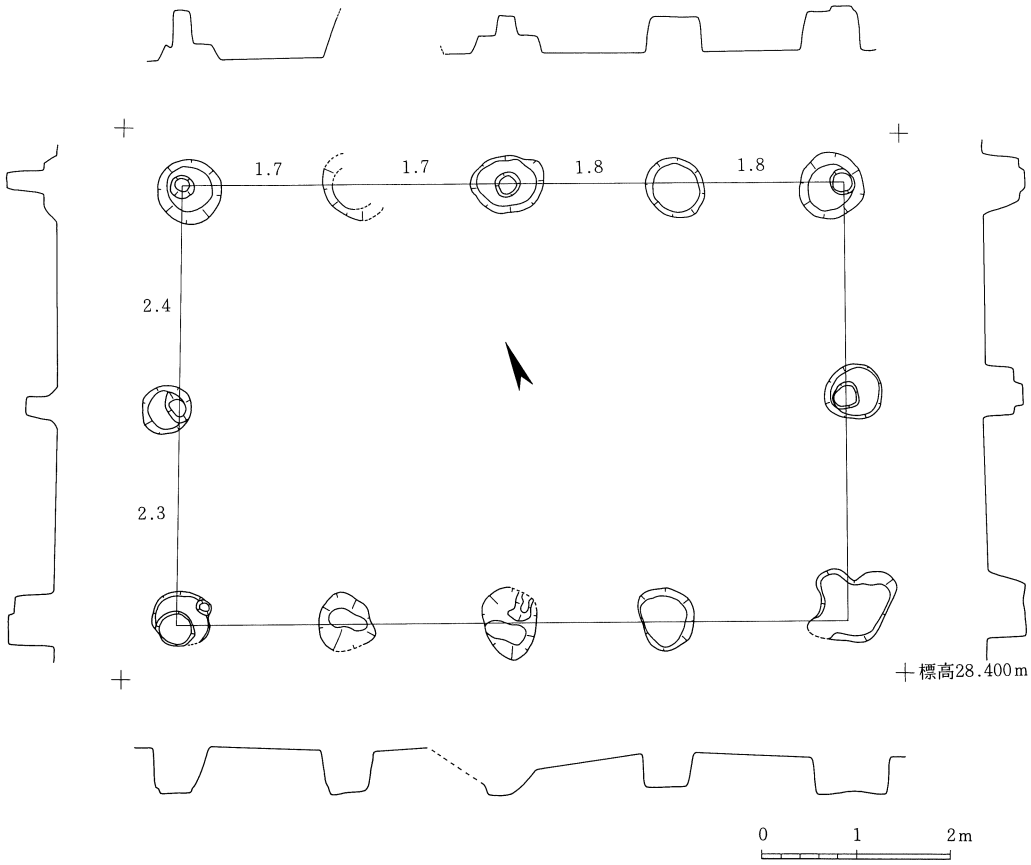
調査区の北端中央部に位置する東西棟の建物である。

建物の規模は桁行４間(７m)で梁間２間(4.7m)であり、面積は32.9㎡となる。

建物の北側桁行は西から1.7m＋1.7m＋1.8m＋1.8mとなり、西側梁間は2.4mと2.3mに２分されている。

柱穴の掘形は50㎝～60㎝であり、深さは40㎝～50㎝を測る。５本の柱穴内には柱痕跡を残しており、その径は平均25㎝前後である。

検出面の標高は27,500ｍである。



第26図　⑱号掘立柱建物実測図(1/80)

⑲号掘立柱建物(第27図)

調査区北西壁面に位置し、大部分が調査区外に所在している。桁行は不明であるが、梁間は2間(約4.8m)である。柱穴の深さは約60cm程度である。

以上、1号掘立柱建物から19号掘立柱建物までを現地で把握したが、調査区には無数の柱穴群が存在し、これ等が全て柱穴とは限らないが、この他にも当然多数の建物群が建つであろうことは推察できる。例えば、19号掘立柱建物の東側、つまり11号掘立柱建物の西側には3～4回の切合関係(建て替え)を持つ柱穴群が位置し、図上

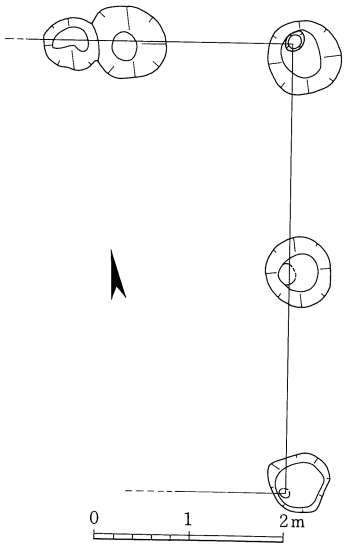


図27図　⑲号掘立柱建物実測図
(1/80)

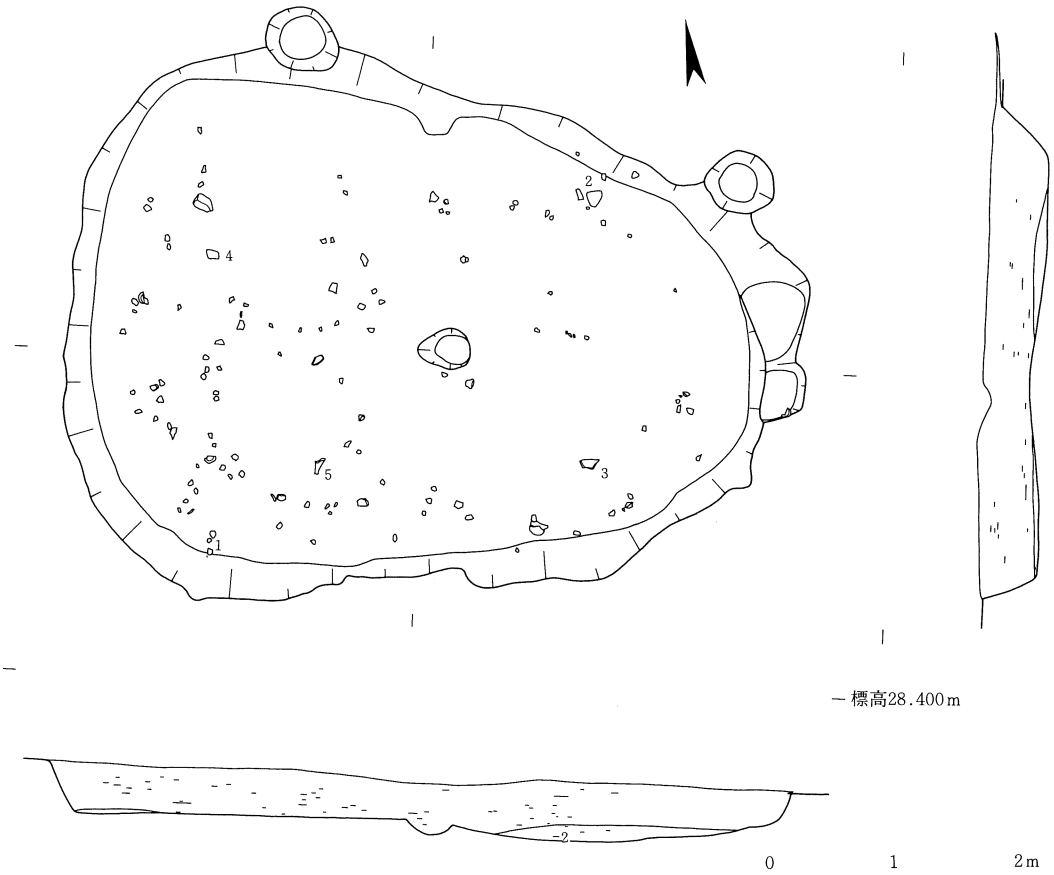
の見方によれば2間×2間の総柱建物か2間×4間の建物が建つことは想像に難くない。また、調査区の南西隅部にも柱穴の集中地区があり、総柱の建物が推測できそうである。一方、5号土坑内にも2間×3間の建物が推測できるが、一応、現地で明瞭に確認できたものや矛盾なく図上で復元できた建物群に限って図示し説明を加えた。

2．検出土坑

1号土坑(第28図)

調査区の北寄り中央部にある大型の土坑である。12号掘立柱建物、13号掘立柱建物、14号掘立柱建物を切る関係にあり、これ等より時間的に新しい。

形態は一方のやや尖った楕円状を呈し、検出面での長径は約6m、最大短径は4.4mを測る。土坑の深さは平均約40cm程度であり、床面は平坦で壁面の立ち上がりは丸味を持つ。土坑中央部の柱穴は浅く、他の掘立柱の建物群のものであろう。



第28図　1号土坑実測図(1/60)

土坑内の覆土には遺物の細片が散在しているが、断面で確認できるように全てが浮いた状態にある。

出土遺物(第29図)

1号土坑内より出土した遺物で図示できるものは次の数点である。

土師器　第29図1は土師器の蓋である。口縁部はいわゆる嘴状を呈し、内面はヘラ磨きされ、表面天井部は回転ヘラ削り痕を残す。撮みは欠損している。口径15cmである。

2は土師器の坏である。口縁部はゆるやかな外反状を呈す。底部は回転ヘラ切りであり体部は表裏ともナデ調整されている。口径14cmで器高3.2cmを測る。

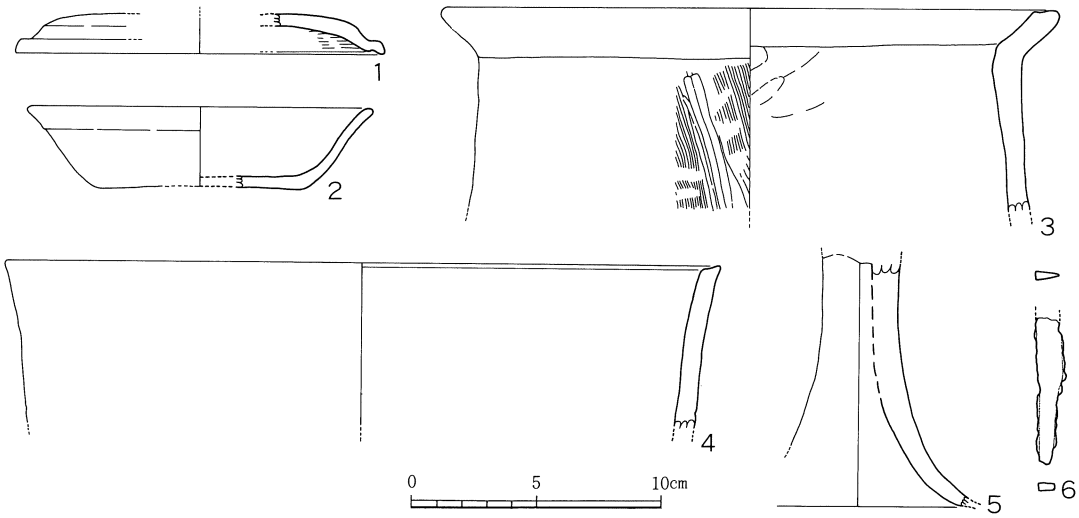
3は粗製甕である。口縁部が内側へ内湾しつつ屈折する。内面はヘラ削りで表面は刷毛目痕を残す。口径25cmを測る。

4は口径28.9cmを測るが脚部の可能性もある。

5は高坏の脚部である。坏部は欠損する。

鉄器　6は鉄器である。刀子の基部から刃部にかけてのものである。

粘土塊　この様な遺物の他に、苫状のつなぎを入れた粘土塊が検出されている。壁土の存在を示す証拠であり極めて注目されるものである。(第92図)

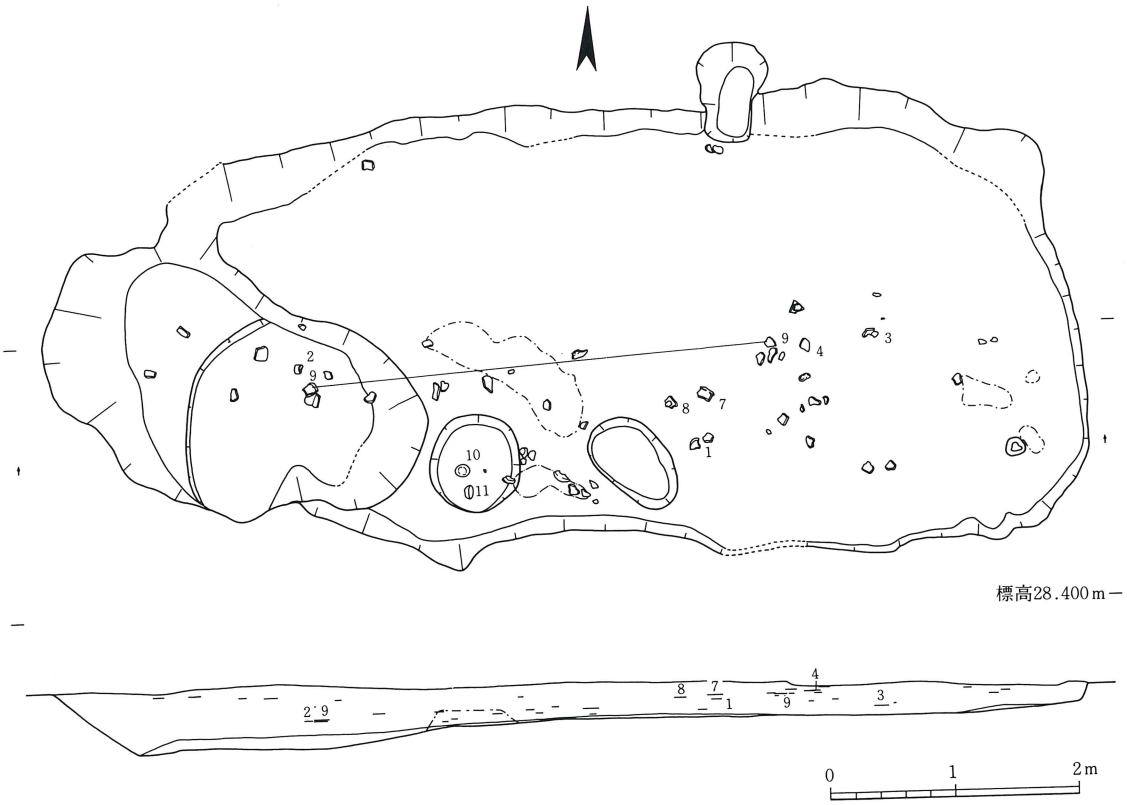


第29図　1号土坑出土遺物実測図(1/3)

2号土坑(第30図)

調査区北西寄り、1号土坑の西側に接して位置している。土坑内の覆土には⑬号掘立柱建物の柱穴がくっきりと遺存しており、⑬号建物より古い時期の所産であることが判る。したがって、⑬号建物を切る関係にある1号土坑よりもより古く位置付けられる。

土坑の平面形態は間延びした楕円状を呈し、中央長軸で8.3m、中央短軸で3.4m、深さは東端部で20cm、中央部で30cm、西端部で50cmを測る。土坑の断面をみると、壁高の立ち上がりは丸味を帯びている。土坑の中央部やや南寄りと東側隅部には赤い焼土が遺存していた。また南壁中央部付近には2つの柱穴状の穴が遺存し、中から坏の略完形品が出土しているが、土坑よりは新しく、時間的な先後関係で把握できそうである。



第30図　2号土坑実測図(1/60)

出土遺物(第31図)

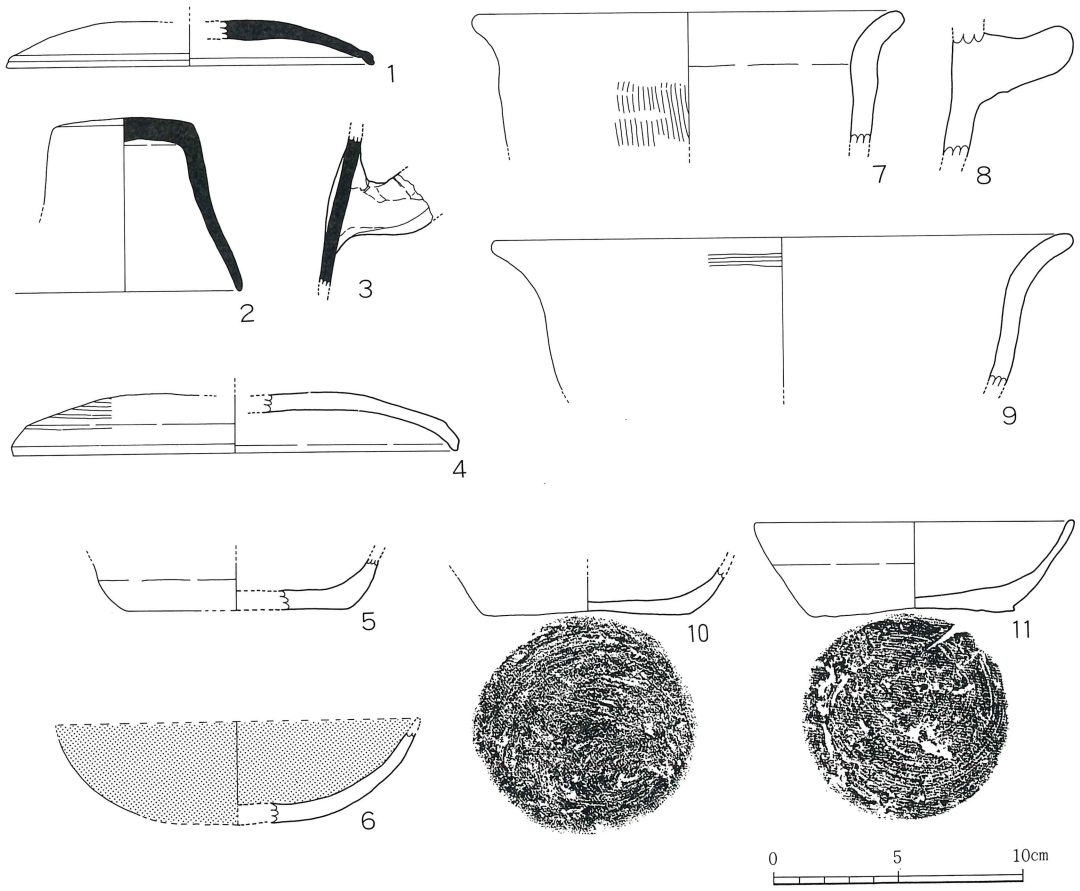
2号土坑の覆土内から出土した遺物は下記のとおりである。

須恵器　第31図1～3は須恵器である。1は撮みを欠損した蓋である。口縁部は短く折れ、端部は丸く仕上げている。口径は15cmである。2は乳鉢とも考えられるが、天井部は丸く仕上げており、一応、蓋に分類した。口径9cm、天井径5.7cm、器高7cmを測る。3は甑の把手部である。

土師器　4は土師器の蓋である。撮部を欠損し、口縁部は小さく折れてやや尖り気味である。内面は篦磨きで、天井部には部分的に回転篦磨き痕を残す。口径18.1cm。

5は坏底部である。底径9.1cm。6は丸底を呈し、表裏に赤色顔料が施されている。口径14.6cmで器高4.2cm。

7は甕の外反口縁部であり、表面には刷毛目痕を残す。口径17.6cm。8は把手部。9は鉢か甕の外反口縁部である。口径23.6cm。

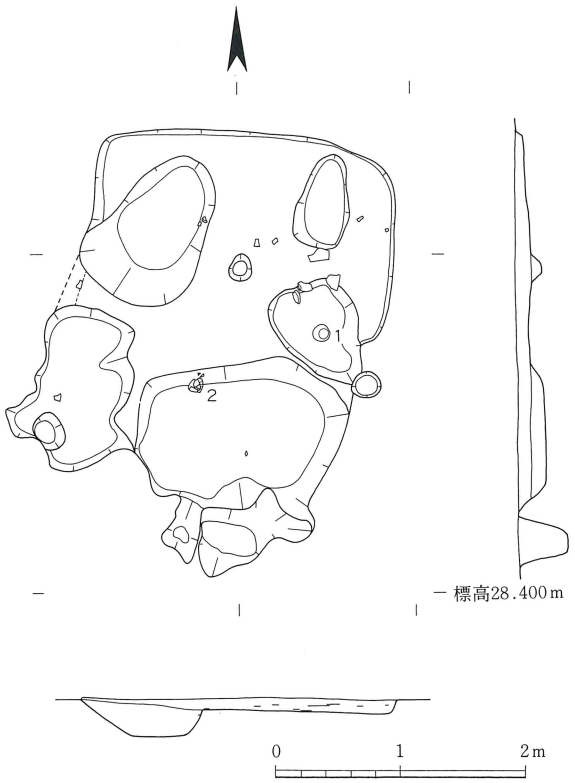


第31図　2号土坑出土遺物実測図(1/3)

10、11は２号土坑の南壁中央部の柱穴内から出土した土師器である。10は底径8.4cm。11は口径13cm、器高3.5cm、底径8.3cm。10、11とも底部は回転糸切り痕を残す。

３号土坑(第32図)

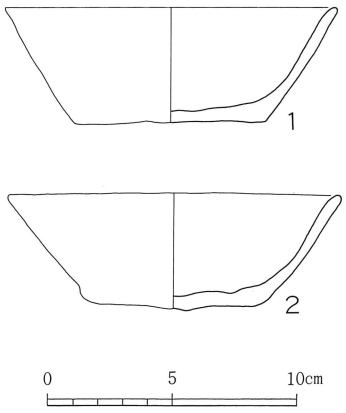
調査区の北寄り中央部に位置する。土坑の形態は隅丸方形を呈し、西・東の長さは2.4mを測る。しかし、土坑内には幾つかの楕円状や不定形の土坑が重なっており、南側の形態は不明である。土坑の深さは10cm前後であるが、楕円状土坑等は20cm～30cmの深さである。



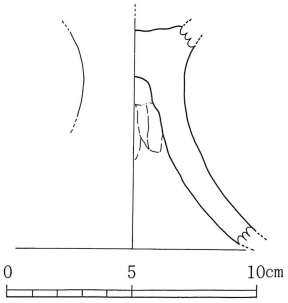
第32図　３号土坑実測図(1/60)

出土遺物(第33図)

土師器　３号土坑からは完形の坏が２点出土している。図１、２は共に口径13.5cm、底径7.7cm、器高4.6cmを測る。器壁は薄く体部は直線的であり、口縁付近で心持ち外反する。底部は両方とも回転篦切りである。



第33図　３号土坑出土遺物実測図(1/3)



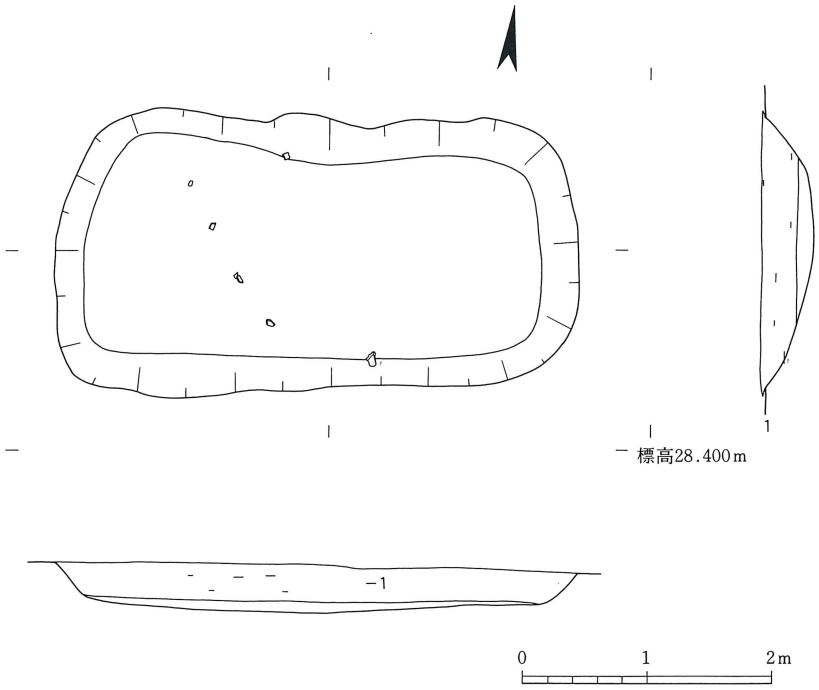
第34図　４号土坑出土遺物実測図(1/3)

4号土坑(第35図)

調査区北東端に位置する隅丸長方形の土坑である。17号掘立柱建物の北側に付随するように位置している。土坑の規模は中央長軸で4.2m、中央短軸で2.2mを測り、深さ約40cmである。土坑の床面は皿状であり、壁高はゆるく丸味を持つ立ち上がりを呈する。

出土遺物(第34図)

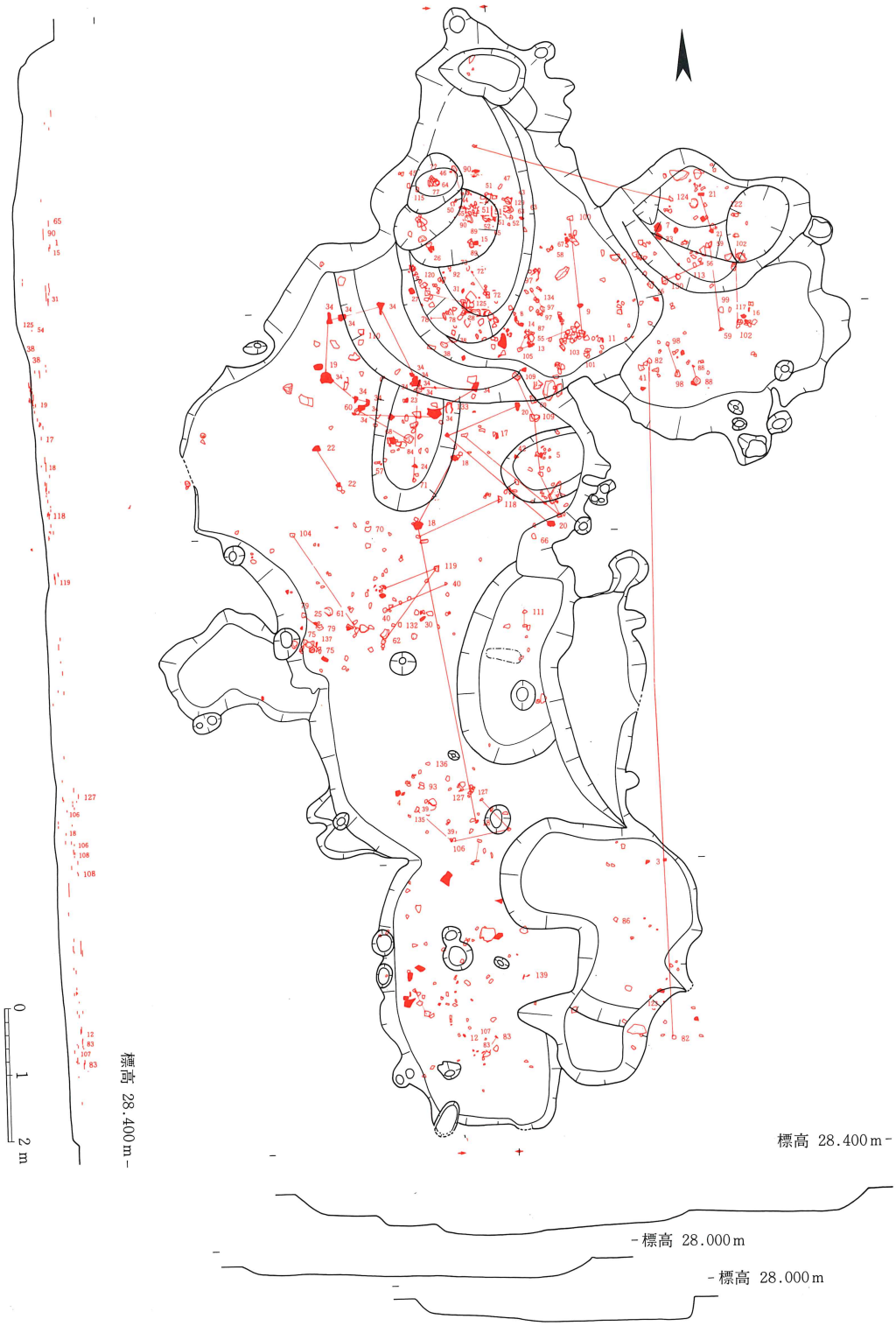
4号土坑から出土した高坏の脚部である。



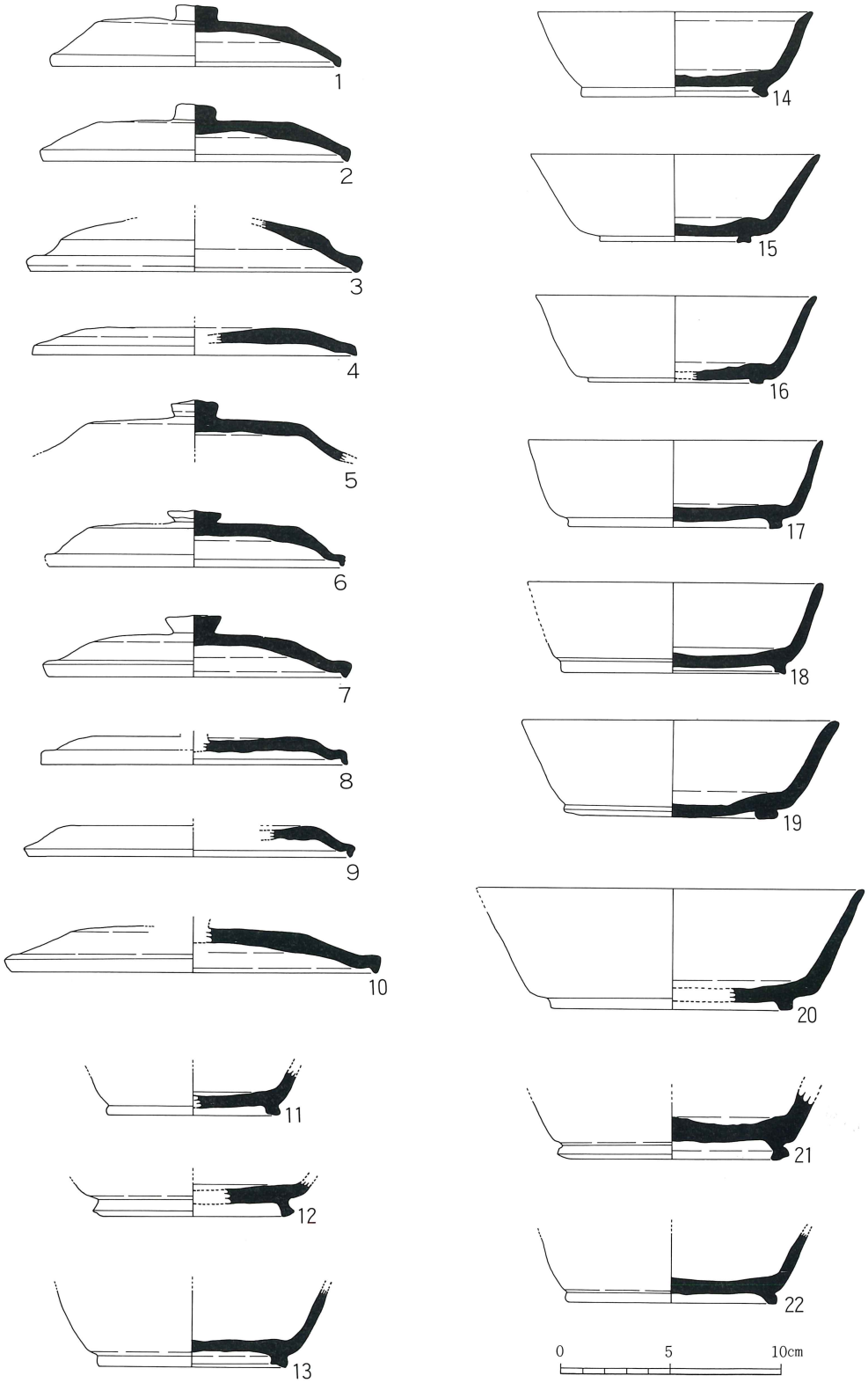
第35図　4号土坑実測図(1/60)

5号土坑(第36図)

調査区の北西端近くに所在する大型の不定形土坑である。この土坑の規模は長軸を北・南にとり、長径約16.8m、短径は土坑の北側で約8.8m、南側で約5mである。土坑はこの様な規模や形態を意図して造られたものではなく、幾つかの円形土坑や楕円形土坑等が切り合ってできた結果の所産であるとみなされる。つまり、土坑は直径約5cm前後の円形及び楕円形土坑が縦に4～5個重複しながら連なった状態を基本とし、これに小さな不定形土坑が重なっている様相として把握できる。したがって、土坑の深さも色々であり、浅い所で約10cm、深い所で約60cm



第36図　5号土坑実測図(1/100)



第37図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)

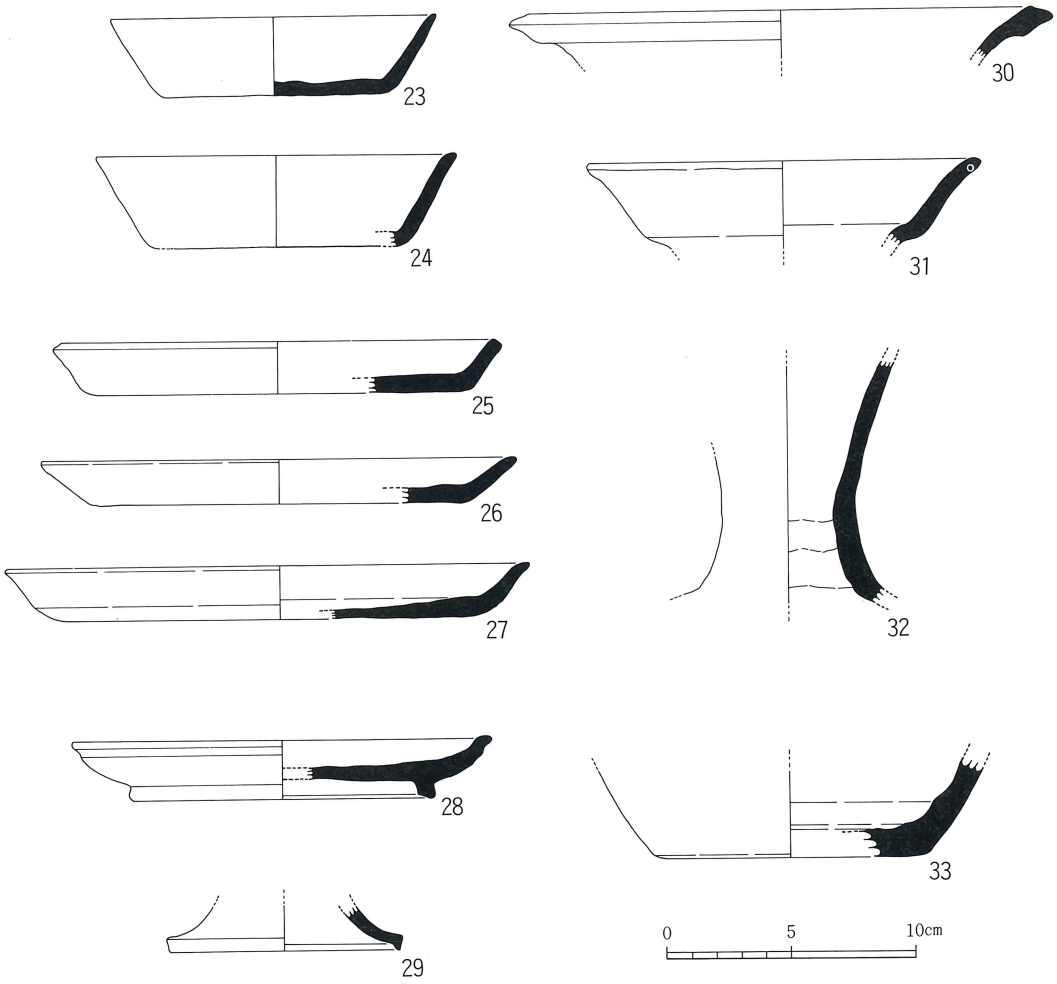
～80cmである。

5号土坑の覆土内からは多量の遺物が出土している。これ等は幾つかのブロックに分かれている様相を呈するが、遺物相互の異いを弁別し、先後関係で把えるのは至難である。

出土遺物(第37図～48図)

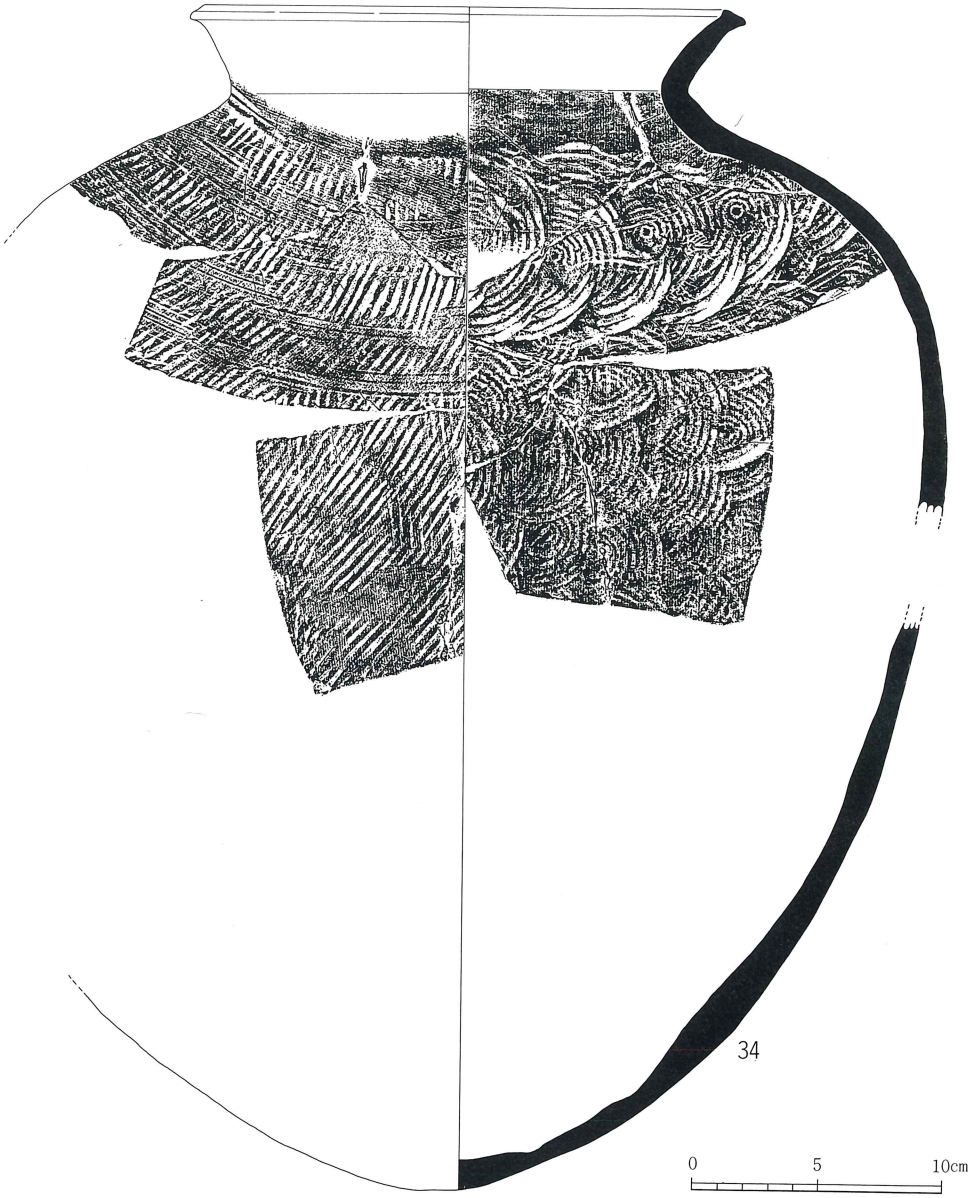
須恵器　第37図1～10は須恵器の蓋である。1～4の口縁部は短く折れ、やや尖り気味である。4～10はいわゆる鳥の嘴状に屈曲する口縁部を持つ。これ等にはいずれも低い円柱状やボタン状の撮みが付くものである。口径は13.3cm～16.6cmであり、器高は2.6cm～2.8cm内に収まる。表裏面は撫で調整が行なわれているが、4の天井部は篦削り痕を残している。

11～22は高台付きの須恵器の坏である。体部は直線的に開くものが多いが、14、16の尖り気



第38図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)

味の口唇近くは心持ち外反している。11～14、21、22の高台は外側に斜めに張り出し、高台断面の形態もバリエーションに富む。高台の貼付け位置は、11、18、22が底部と体部との接点近くにあり、15～17、20は断面四角形の低い高台が底部のやや内側に付けられている。口径はいずれも12.6cm～14.6cmで器高は3.9cm～4.4cm内に収まるが、20は口径17.7cm、器高は5.5cmと他に比して大きな坏である。表裏面はいずれも横撫で調整されているが、14、16の底部外面は回転篦切りの様子が残っている。また13の表面体部は灰釉の光沢を保つ。



第39図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)

23、24は須恵器の坏である。平坦底部から直線的に開く体部を持つ。23は口径13.2㎝、器高3.2㎝。24は口径14.7㎝、器高3.7㎝である。

25～27は須恵器の皿である。平坦底部から斜めに短い体部がつく。27は緩い外反口縁部である。口径は18.1㎝～21.2㎝で器高は1.8㎝～2.2㎝である。

28は高台付きの須恵器の皿である。口縁下には凹線状の界線が廻る。口径17㎝、器高2.4㎝。

29は須恵器の高坏の脚部、30は甕の肥厚口縁部、31、32は広口壷の口縁部及び頸部である。33は平底部である。第39図34は須恵器甕の考古学的完形品である。口縁部は「く」の字に外反し、口唇部は内外に張り出し、跳ね上がり気味である。甕の最大径は肩部近くにあり、表面は平行タタキ文、内面は同心円文タタキが施されている。口径は22.5㎝である。

土師器　第40図35～39は撮み付きの土師器の蓋である。35は宝珠撮みの付く丸味を帯びた天井部から直角に折れ曲る口縁部を持つ特徴的なものである。短頸壷の蓋である。口径13.5㎝、器高５㎝。36～38は平坦天井部から斜めに延びた先端部はゆるく屈曲して小さく折れ、いわゆる嘴状を呈する。36は口径14.2㎝、器高2.9㎝。37は口径13.7㎝、38は口径14.6㎝。39は丸味を持つ天井部からそのまま口縁部に至るものである。口径15.3㎝。

40～42は高台付きの土師器の坏である。40の体部下半は丸味を持つ。41、42は底部から斜めに直線上に延びる体部であり、高台は底部と体部の境界付近に付けられている。40は口径12.1㎝、器高4.6㎝。41は口径12.7㎝、器高4.2㎝。42は口径13.5㎝、器高4.6㎝。

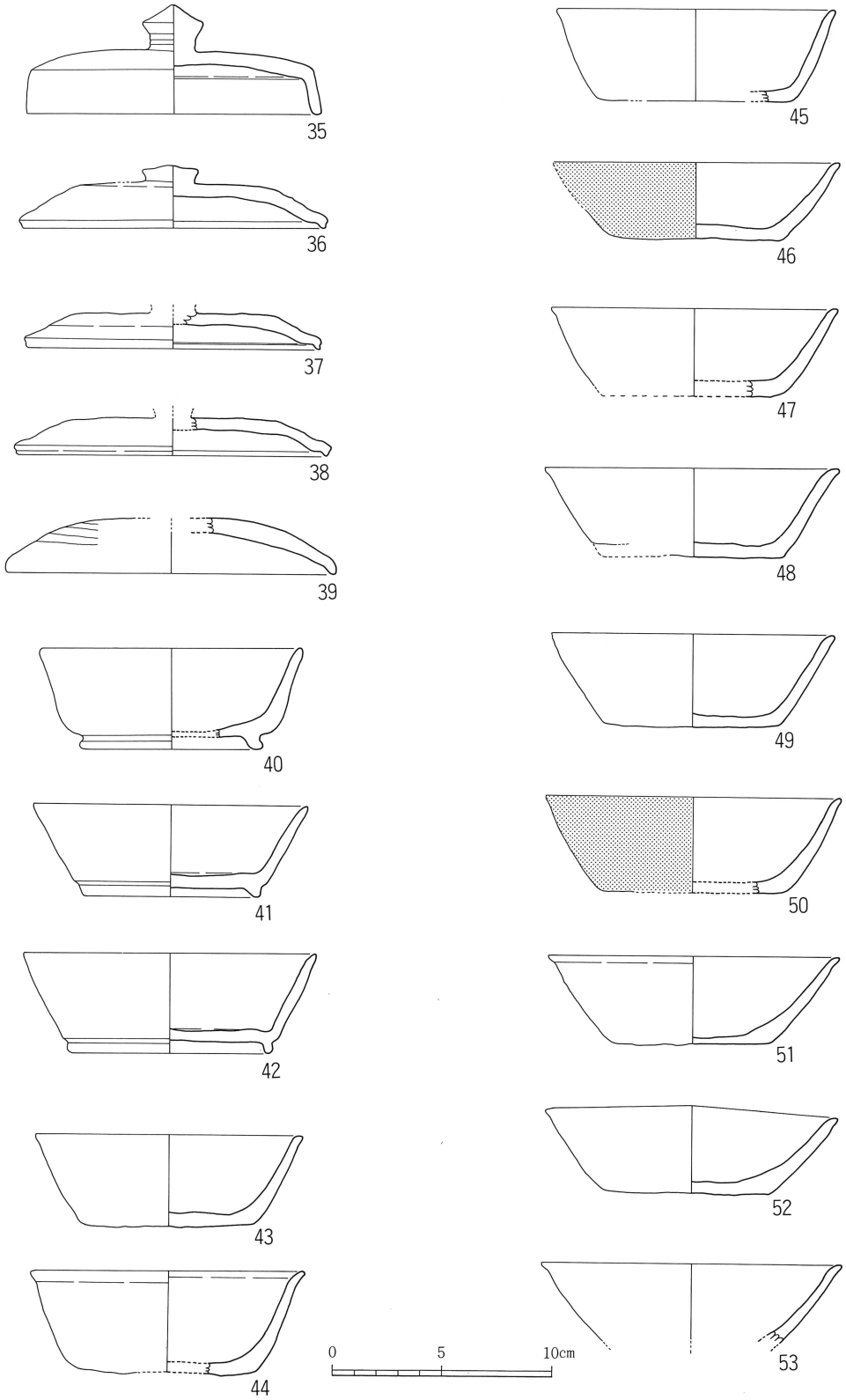
43～75は土師器の坏である。これ等は底部から斜め直線上に延びた体部を持つ。43～54の口縁部は心持ち外反する。坏の底部は回転篦切りであり、表裏は撫で調整されている。46、50、57の表面は赤色顔料が施されている。口径は12.4㎝～16.6㎝、器高は3.1～4.6㎝の間に収まる。

76～86は土師器の丸底椀である。体部は丸味を持ち、底部との境は不明瞭である。84、86は口縁部が心持ち外反する。81は表面に刷毛目痕が残るが、他は表裏撫で調整が施される。78、79、81、85、86の表裏には赤色顔料が施されている。口径12㎝～17.3㎝、器高3.5㎝～5.3㎝とやや幅を持つ。

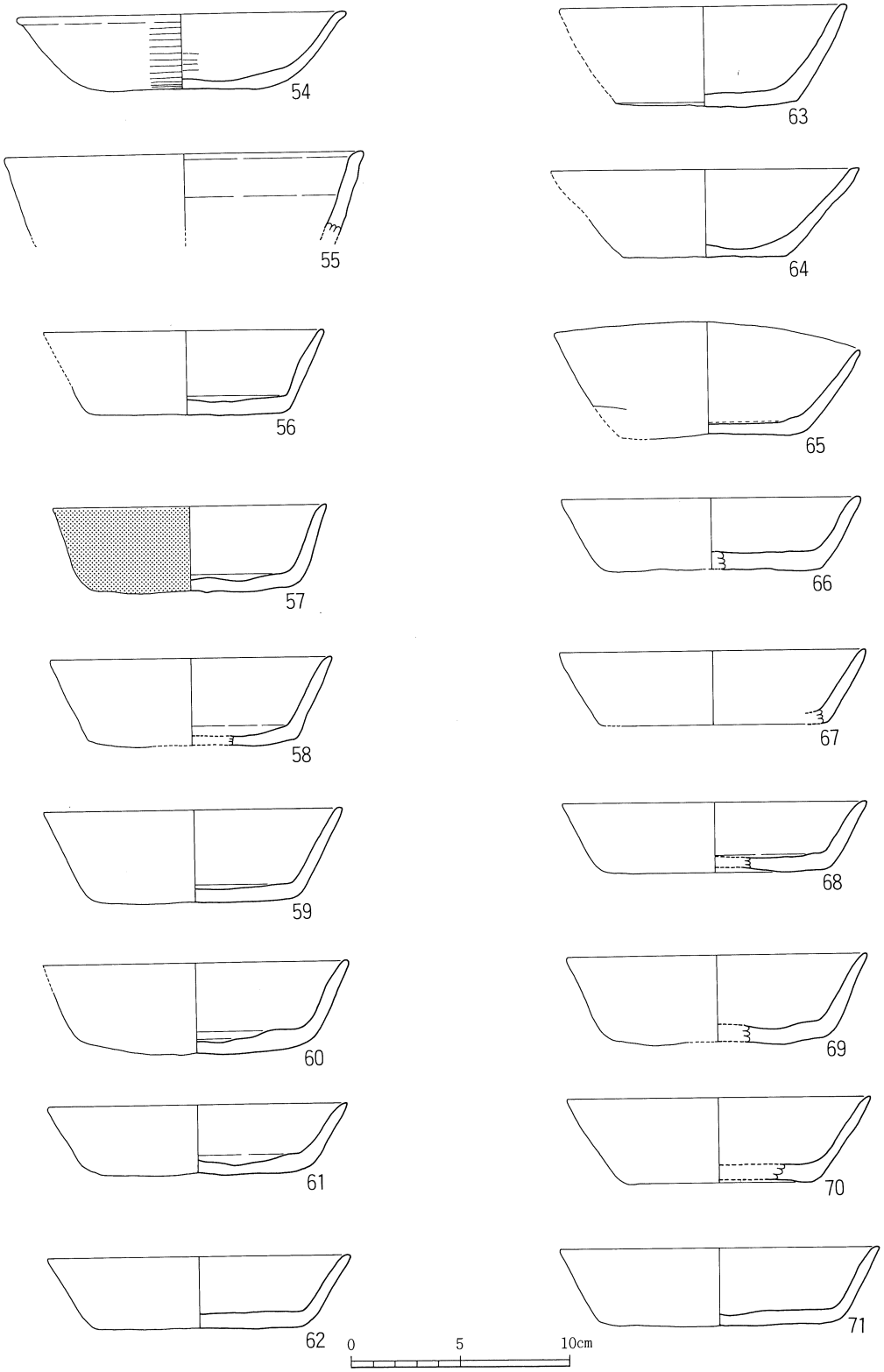
87～91は土師器の皿である。87の底部から体部へかけては丸味を持ち、口縁部は緩く外反する。蓋の可能性も大きい。口径13.4㎝、器高2.5㎝。88は斜めの体部、89～91は緩い外反口縁を呈する。底部はいずれも回転ヘラ切りであり、器表裏は撫で調整を施す。90の表面には赤色顔料が施されている。口径は15.4㎝～17.6㎝、器高は1.6～2.5㎝である。

92～94は高坏である。92の坏部は口径25.9㎝を測り、坏の形態は同時期の蓋の形態の特徴と同じである。93の脚部は焼成、胎土、色調、形態等が他と異なり、若干、時代の遡る所産であろう。

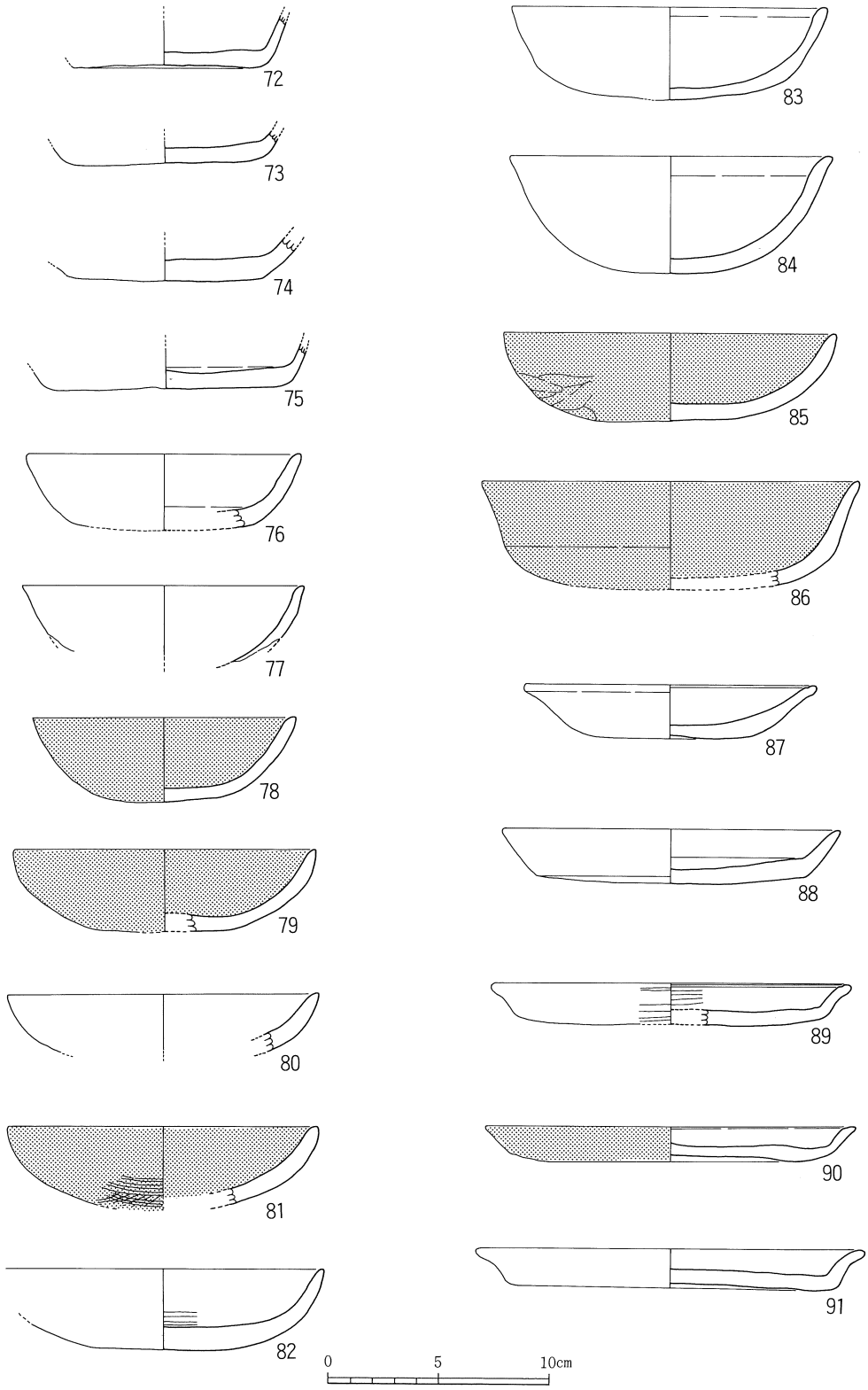
95～97は鉢の口縁部である。95の体部は直線的で96・97は丸味を持つ形態である。表裏撫調整を施すが、96内面はヘラ削り痕を残す。95の口径は18.5㎝、96の口径は20.4㎝、97の口径は



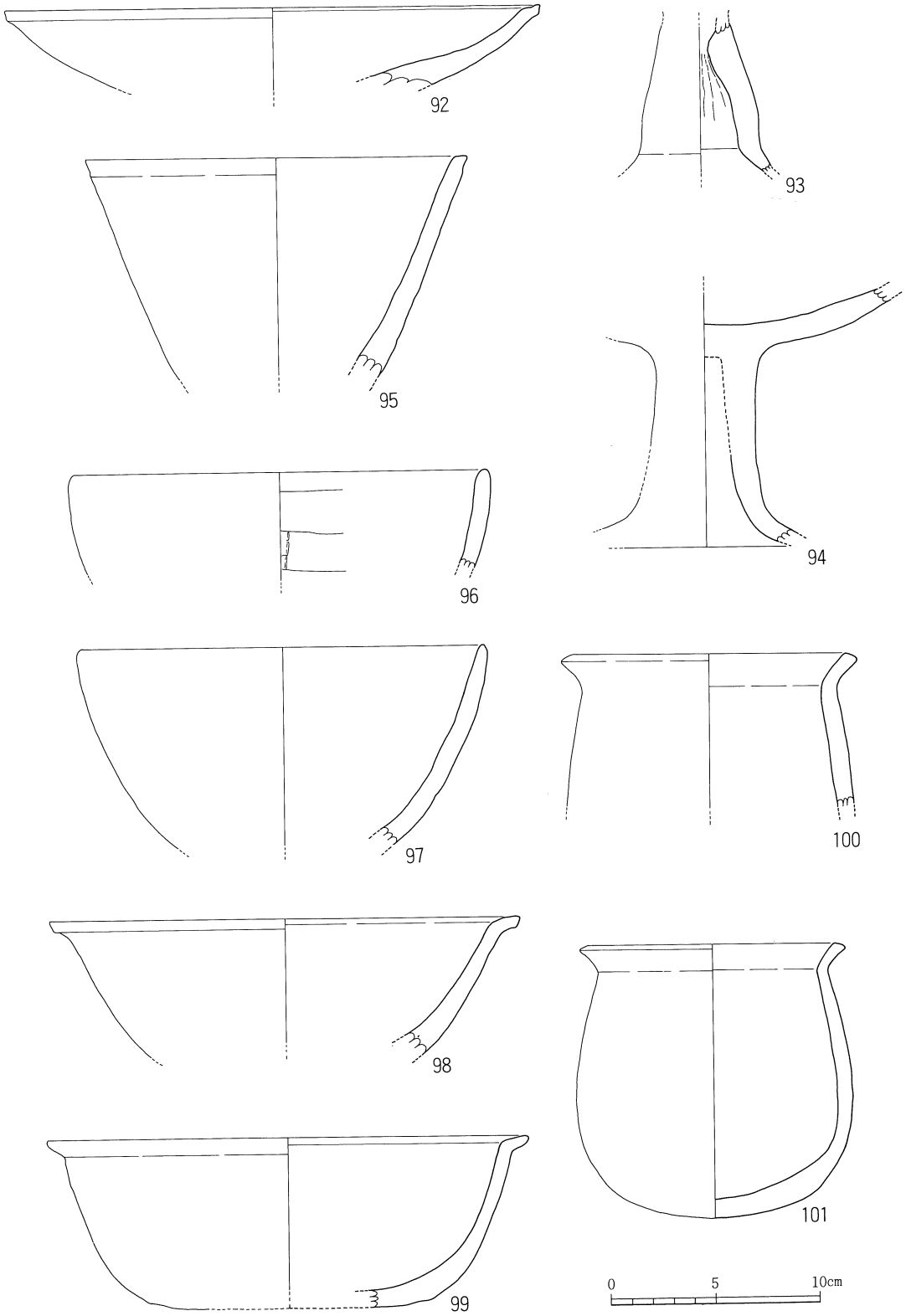
第40図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)



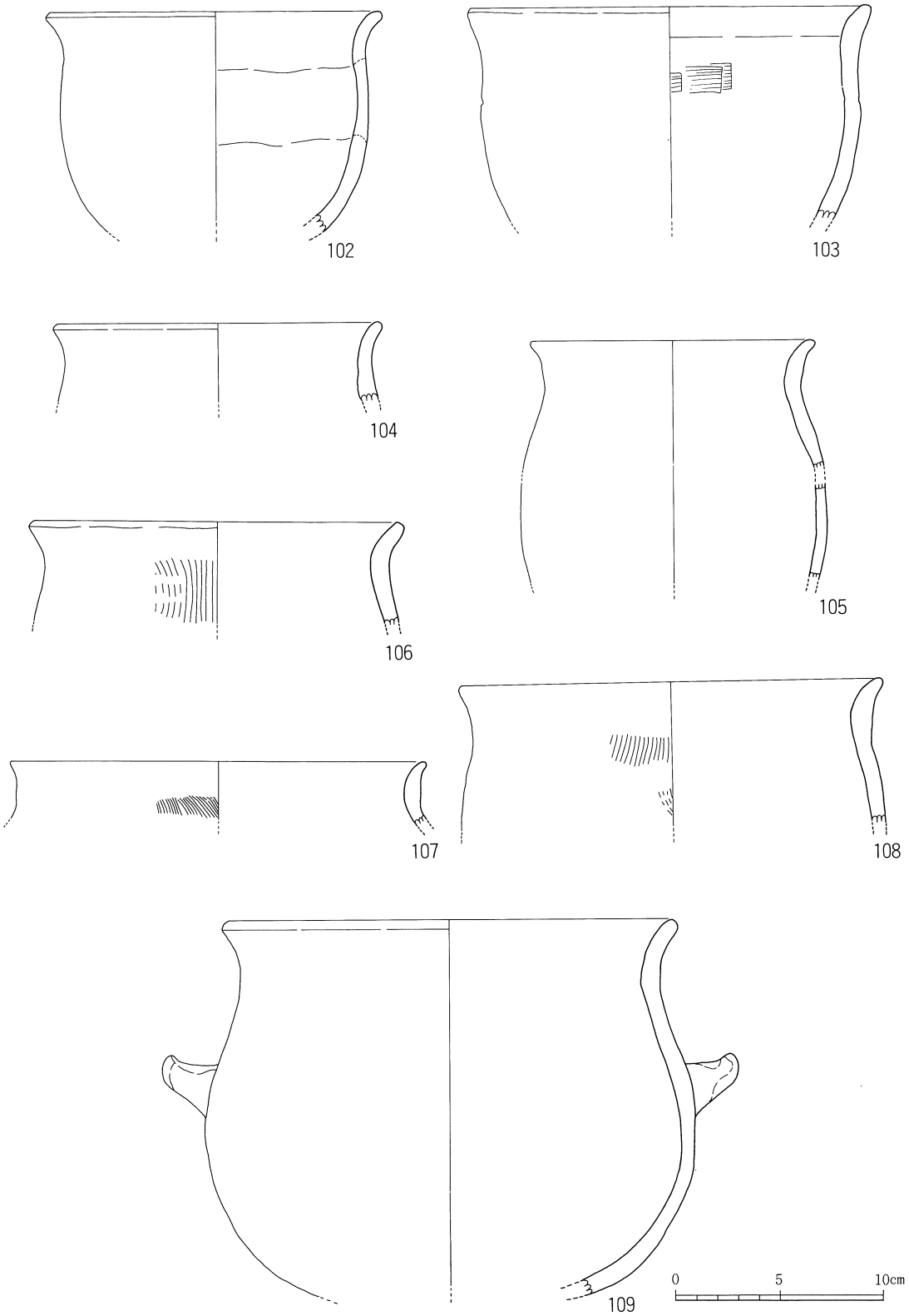
第41図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)



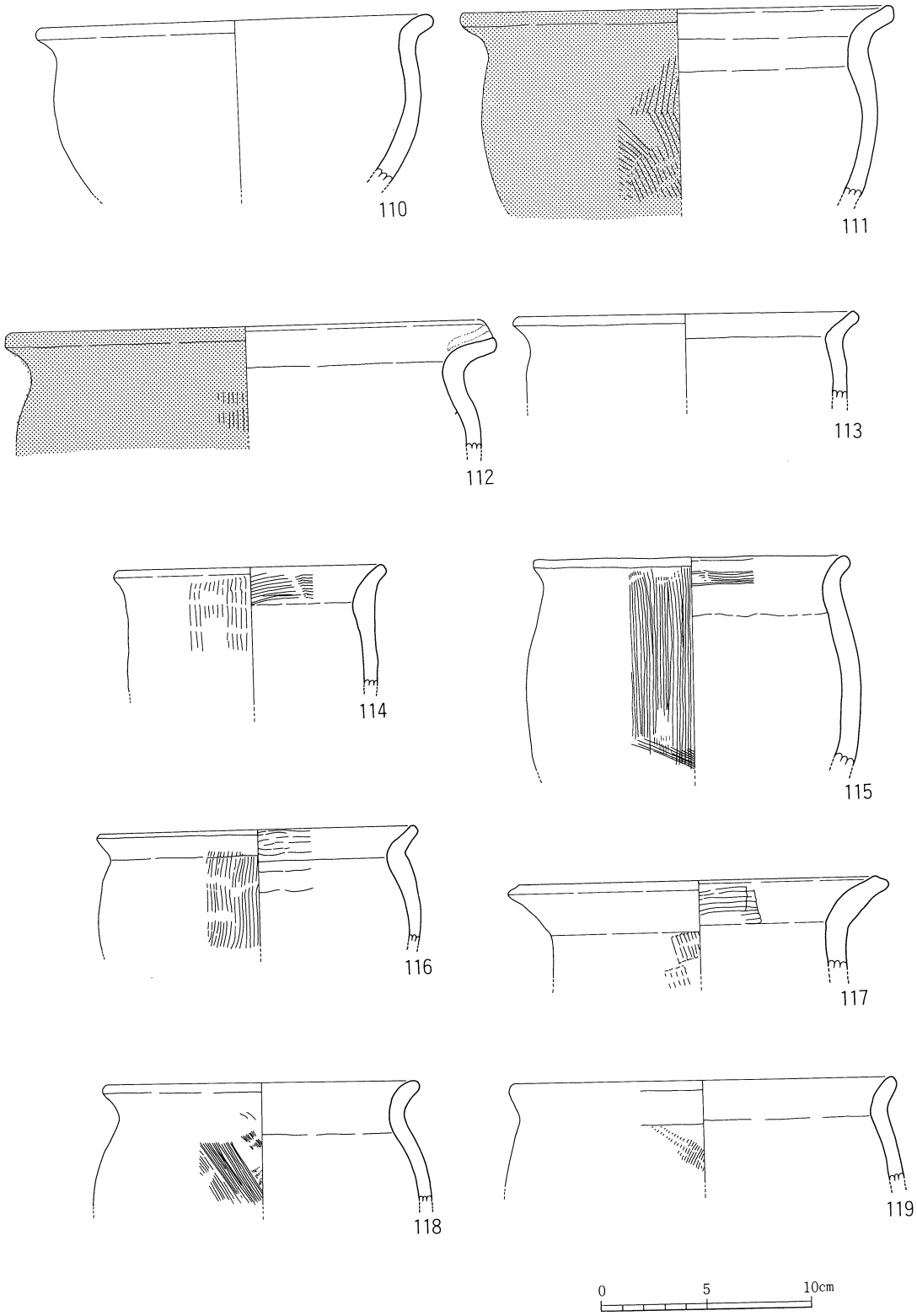
第42図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)



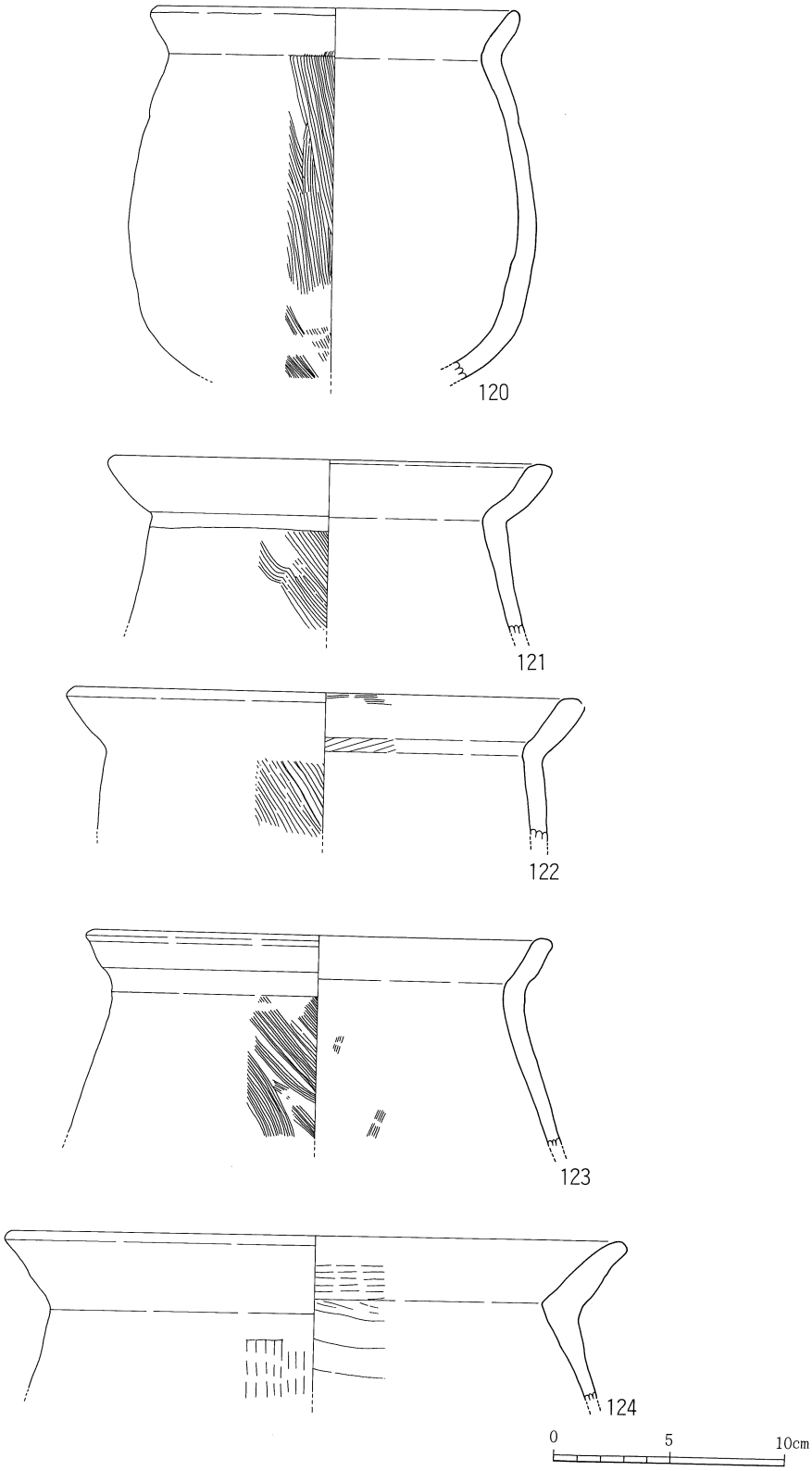
第43図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)



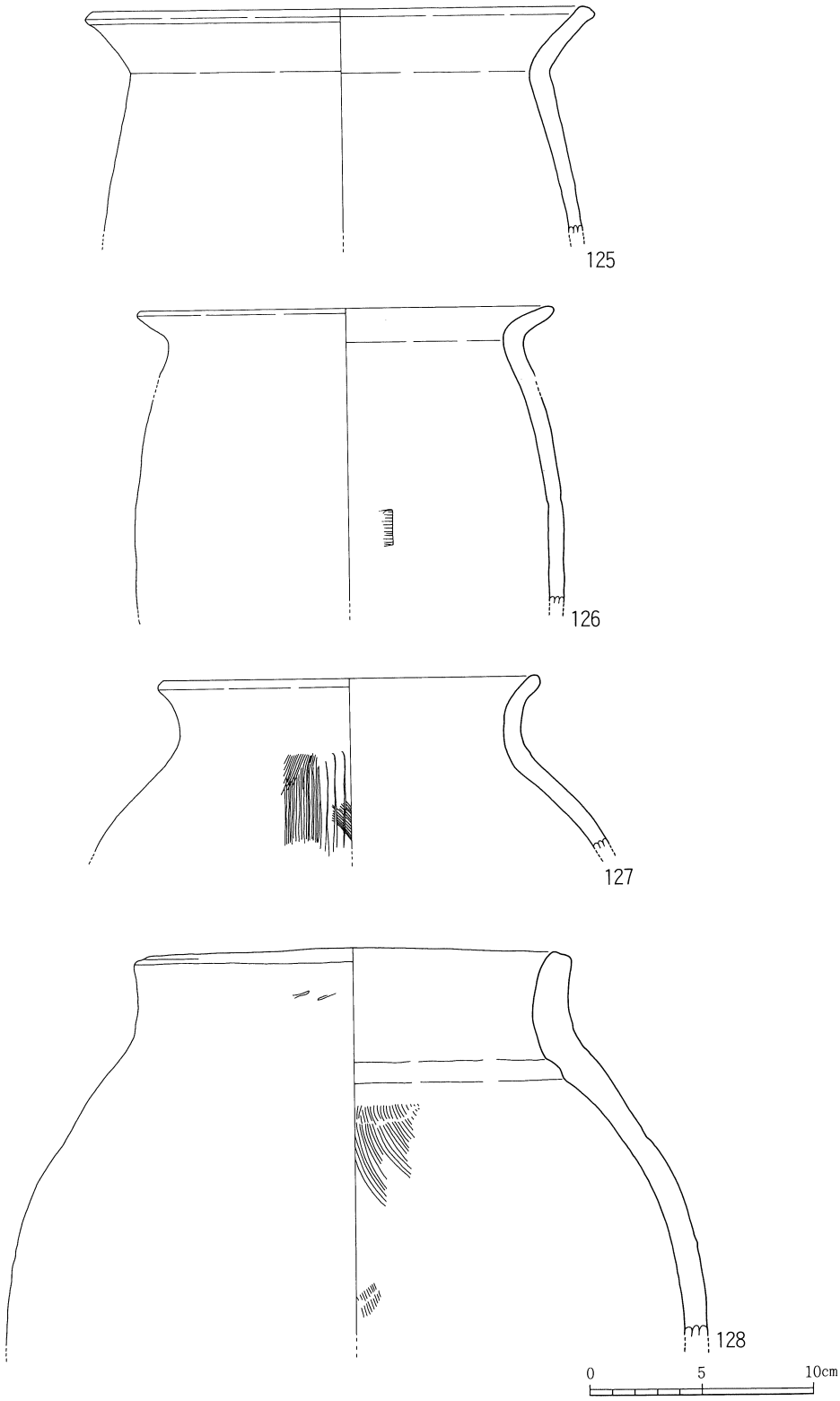
第44図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)



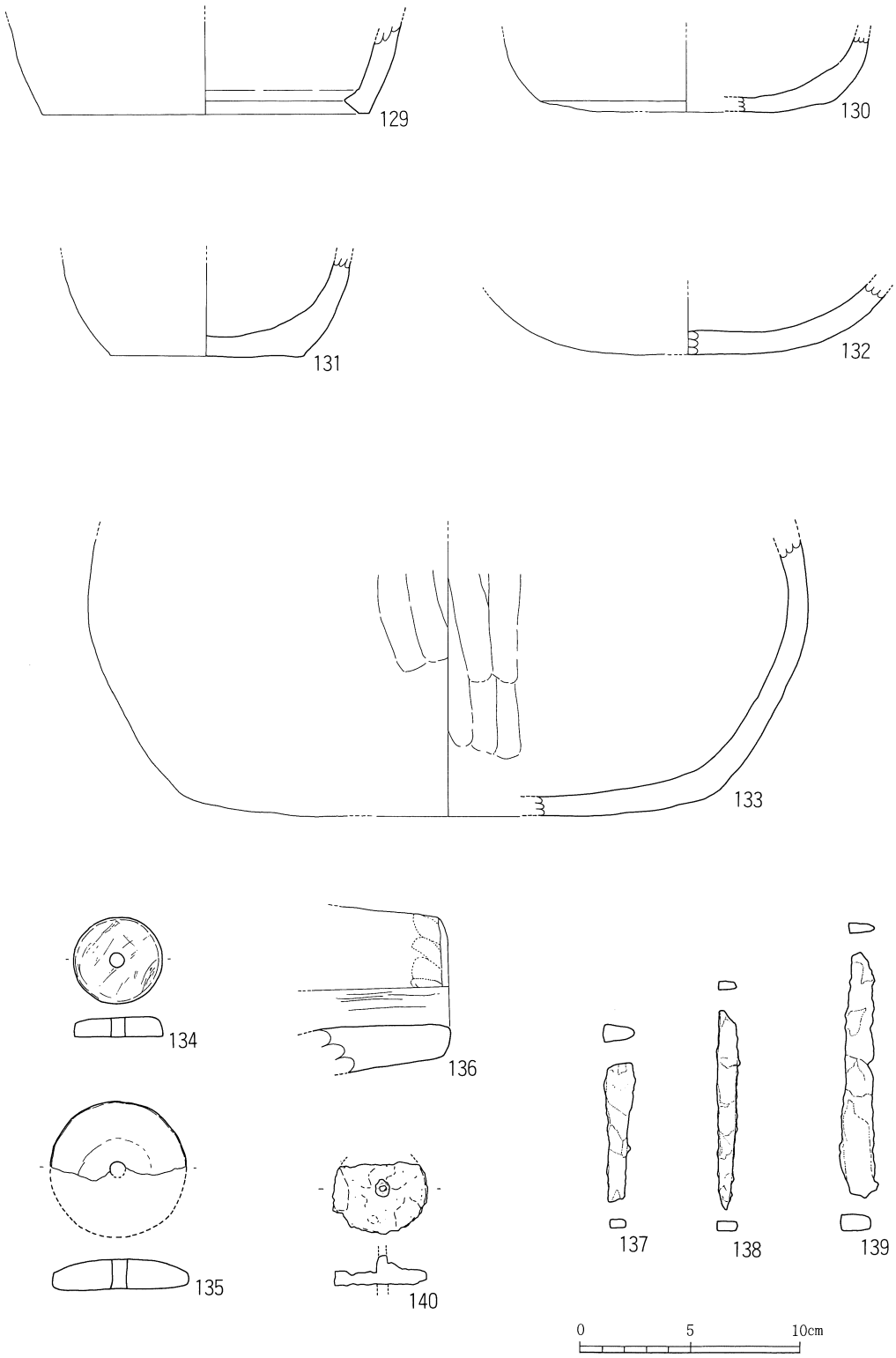
第45図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)



第46図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)



第47図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)



第48図　5号土坑出土遺物実測図(1/3)

19.8cmである。

98・99は平底から丸味を持つ体部に至り、口縁部は外側へ短く屈折させる、特徴的な鉢である。98は口径22.7cm。99は口径23.2cmで器高8.2cmを測る。

100～128は甕形土器として一括したが、口縁部の形態や器形等にバリエーションがある。

100・101の口縁部は「く」の字に折れて外反し、直線的に延びた体部の最大径は下半にあり、下脹れの形態をとる。表裏は撫で調整を施す。100は口径14.4cm。101は口径12.8cm、器高13.1cmである。

102・103は緩く外反する口縁部を持ち、胴部の張りの弱いものであり、最大径は口縁部にある。一方、104～109は同様な口縁部であるが、胴部が球形に張り、最大径が胴部下半にある一群である。109は把手を持つ。口径は13.8cm～21.5cmを測り、部分的にハケメが残るが、表裏は撫で調整が施されているものが多い。

110～112は丸味を持って外反する口縁部であり、胴部の張りが弱く、最大径が口縁部にある。111、112の表面には赤色顔料が施されている。112は片口を持つ。口径18.5cm～22.4cmを測る。113～120は外反口縁部を持つ一群であるが、口縁形態はバリエーションに富む。表面は縦走・斜走するハケ目痕を残し、内面は撫で調整を施す。口径は12.5cm～18.2cmに収まる。

121～123の外反口縁部はは肥厚し、やや内湾気味である。外面は斜めの刷毛目痕を残し、内面は撫で調整を施す。口径19.2cm～20cm。124～126は外傾口縁、127は外反し、128は器壁の厚い外反口縁部の立ち上がりは弱い。口径は17.3cm～26.5cmである。

129は甑の底部である。端部の径は15cmであり、内側に尖り気味の段を持つ。

130～133は底部である。いずれも丸平底を呈し、133は大型品であり表面・内面ともヘラ削り痕を残す。

紡錘車　134は直径4.1cmの滑石製の紡錘車である。表面及び側面は研磨されている。中央に径7mmの穿孔があり、厚さは9mmである。重さ25g。

135は半分欠損した安山岩製の紡錘車である。直径が6.2cm、中央部の厚さは1.3cmであり、周縁部へとやや薄くなる。中央孔は径7mmであり、重さは27＋αgである。

ふいごの羽口　136はふいごの羽口である。縁辺部の直径は6.5cmを測る。表面には指押え痕を残し、色調は桃赤褐色を呈する。

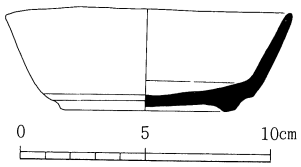
鉄器　137～140は鉄器類である。鉄錆が顕著であり本来の形が判然としないが、137～139は刀子類であろう。140は鉄製の紡錘車である。直径4.3cmを測り、重さは約14gである。

6号土坑(第49図)

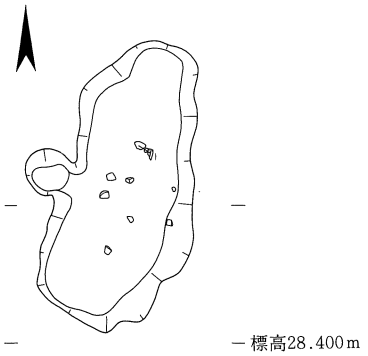
調査区の北東隅部の小さな土坑である。土坑は長軸を北・南にとり、長さ2.4m、幅1.1mの不定形の楕円状を呈する。検出面から床面までは深さ20cmで、床面からの立ち上がりは緩やかである。覆土内には数片の土師器、須恵器が出土しているが、図示できるのは僅か1点である。

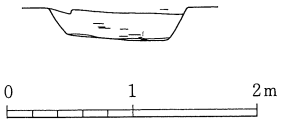
出土遺物(第50図)

高台付きの須恵器の坏である。高台は低く外側に付く。口径11.6cm、器高4.5cm、底部径7.5cmを測る。



第50図　6号土坑出土遺物実測図(1/3)





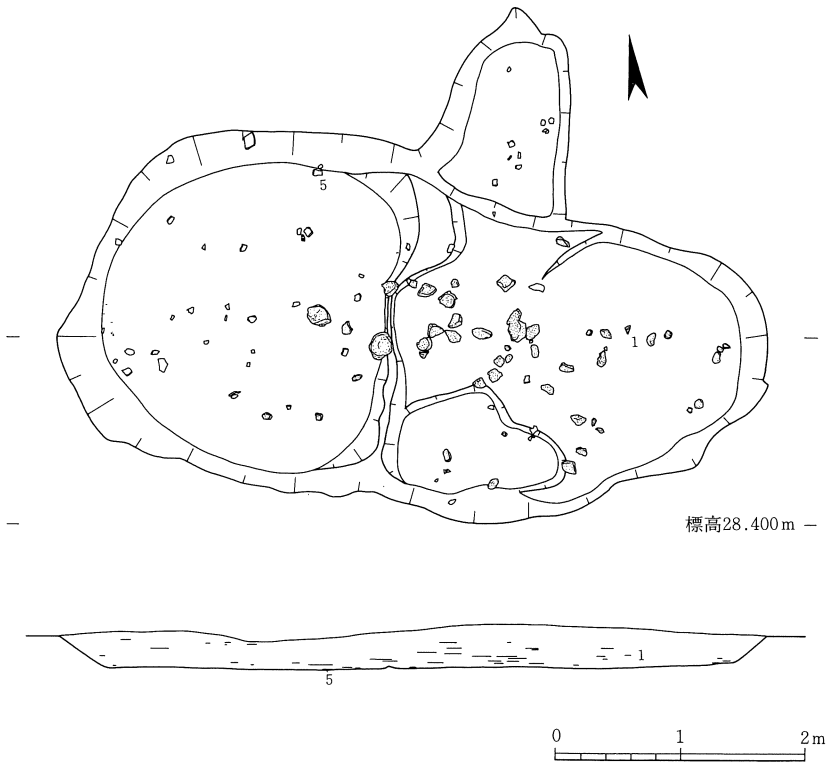
第49図　6号土坑実測図(1/60)

7号土坑(第51図)

調査区中央よりやや北寄りに位置する長楕円を基本とする土坑である。南側には8号土坑が主軸を平行にして並列し、境界を接している。7号土坑は床面に浅い起伏があり、北側には張り出し部が存在しており、幾つかの土坑の集合の結果か漸次的な拡張を示唆している。

長楕円状の土坑は長軸を西・東にとり、長さ5.7m、幅は2.8m、深さは30cm～35cmである。

土坑の立ち上がりはゆるく傾斜している。土坑の覆土には土師器、須恵器の細片と拳大の角礫が包含されていた。いずれも流れ込みの様相を呈する。

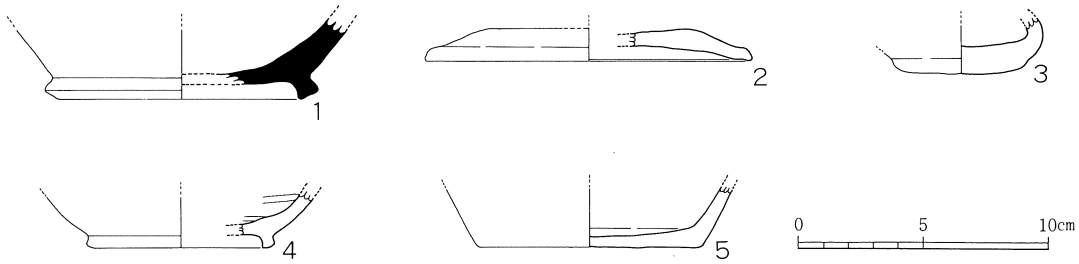


第51図　7号土坑実測図(1/60)

出土遺物(第52図)

須恵器　1は須恵器の底部である。「コ」の字の高台は外側方向に斜めに付けられている。

土師器　2は土師器の蓋である。撮み部を欠損する。口径13.2cm。3は土師器の耳皿である。4は高台付きの土師器の碗底部である。高台は外側に取り付けられている。底径7.6cm。5は坏底部である。底径9.1cm。



第52図　7号土坑出土遺物実測図(1/3)

8号土坑(第53図)

7号土坑の南に主軸を平行して接する長楕円状の土坑である。長径は4.8m、短径は2.9mで深さは30cm～40cm程度である。土坑の南西部には不定形の土坑が重複し、南東端の床面には心持ち低い部分が存在している。土坑の壁面の立ち上がりは緩く、丸味を持った傾斜面よりなり、土坑床面はゆるい起伏を保っている。8号土坑の南壁中央部には、⑩号掘立柱建物の北西隅部の柱穴が位置しており、土坑が切られる関係にある。

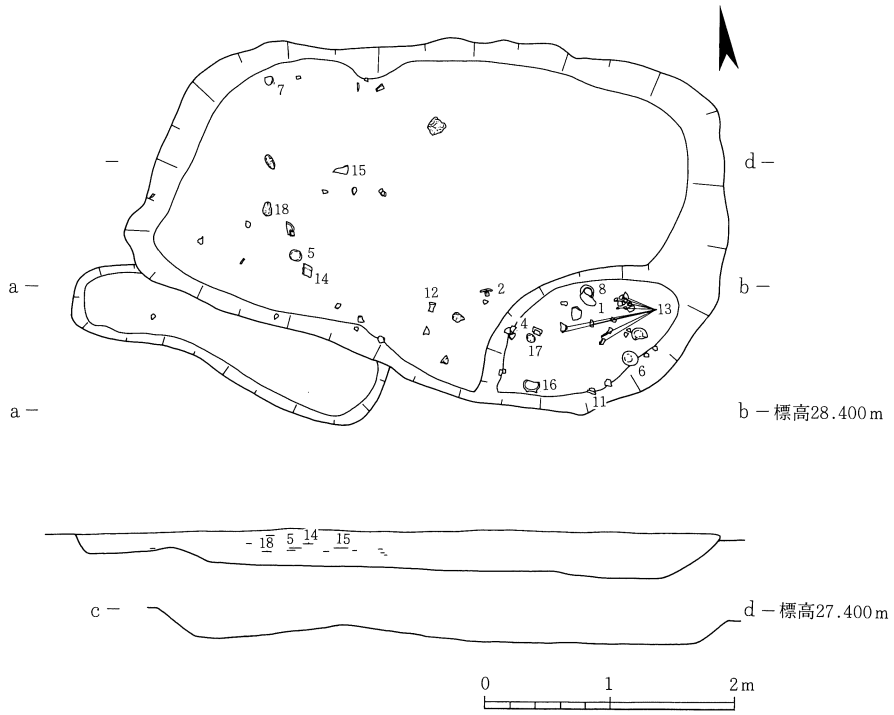
出土遺物(第54、55図)

8号土坑覆土内から出土した遺物は土師器類と石器である。

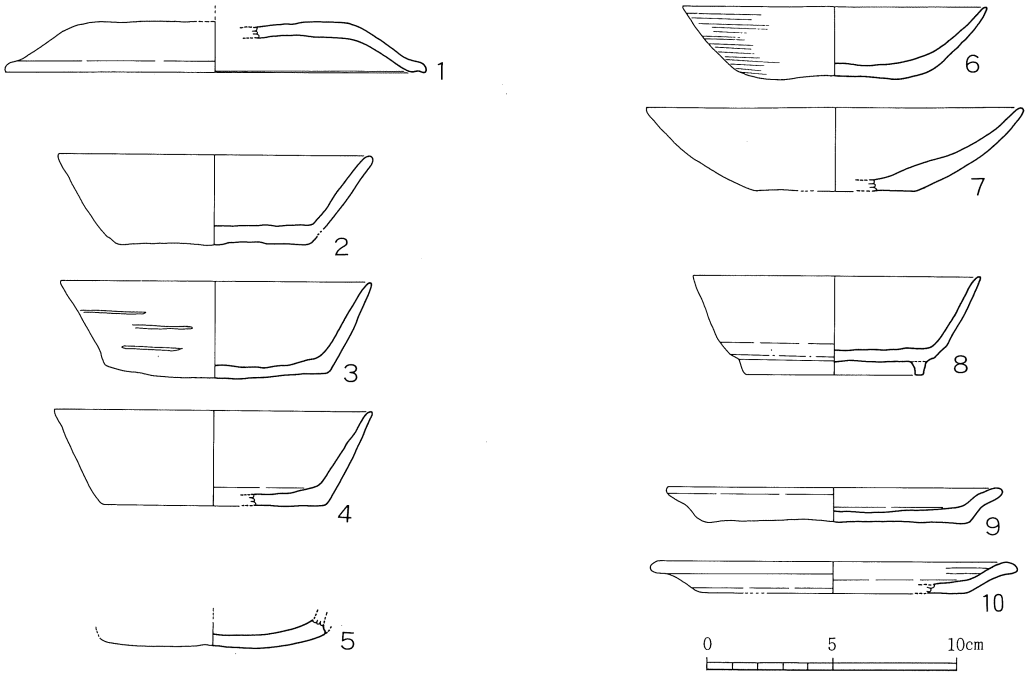
土師器　第54図1は蓋である。撮み部分は欠損し、ゆるい嘴状の先端は丸味を持つ。口径17.1cm。2～4は坏である。体部の表裏は撫で調整され、立ち上がりは斜め直線である。口径12.6～12.8cm、器高3.6～3.9cm、底部は回転ヘラ切りであり、底径は2が7.9cm、3・4が9.2cmを測る。5は蓋の可能性もあるが、調整が荒く、底部に分類した。底径9cmである。

6・7は底部から体部へかけて丸味を持つ坏である。6は表面ヘラ磨き痕を残し、7は表裏撫で調整を施す。6の口径は12.3cm、器高は2.8cm。7は口径15.2cm、器高3.4cm。

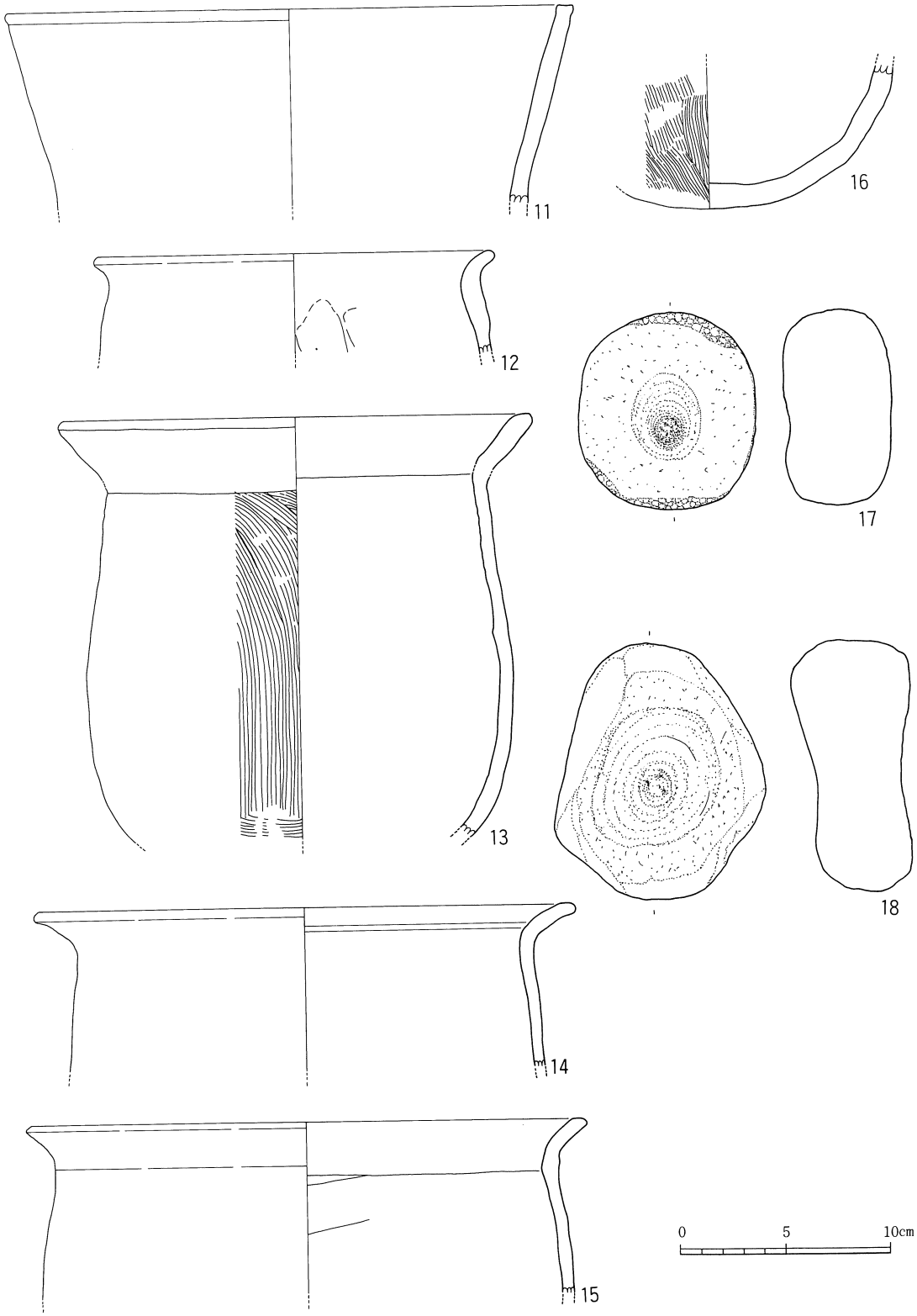
8は高台付きの坏である。「コ」の字高台は底部縁に位置する。内外面とも研磨痕を残し、外面の高台付近は篦削り痕、底面はヘラ切り痕を残す。口径11.6cm、器高4cm、底径7.2cmを測る。



第53図　8号土坑実測図(1/60)



第54図　8号土坑出土遺物実測図(1/3)



第55図　8号土坑出土遺物実測図(1/3)

9・10は皿である。体部は短く、ゆるく外反する。表裏は撫で調整され、底部は箆切り後、撫で調整されている。9は口径13.6cm、器高1.3cm、底径10.8cm。10は内面ヘラ磨きで、口径14.8cm、器高1.3cm、底径10.8cm。

11は斜めに広く鉢の口縁部に分類したが、脚部の可能性もある。表裏撫で調整で口径27.3cm。

12～15は粗製甕の口縁部である。12は短く外反し、13の屈折口縁部は内湾気味である。体部は下膨れで、表面は刷毛目調整を施す。12は口径19.3cm、13は口径22.8cm。

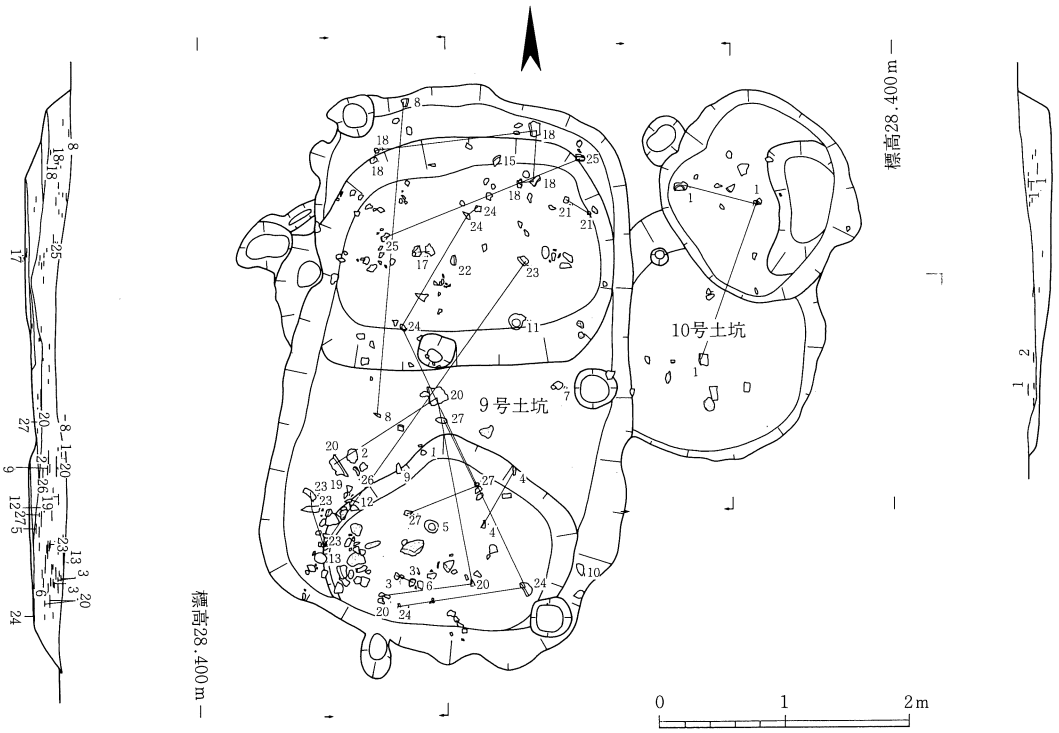
14・15は口縁部大きく外反する甕形土器であり、14の口縁内側にはゆるい凹線が廻る。表面は両方とも撫で調整され、15の内面は箆削り痕を残す。14の口径は26.1cm、15の口径は26.9cmである。

16は丸底の底部である。表面は刷毛目調整。

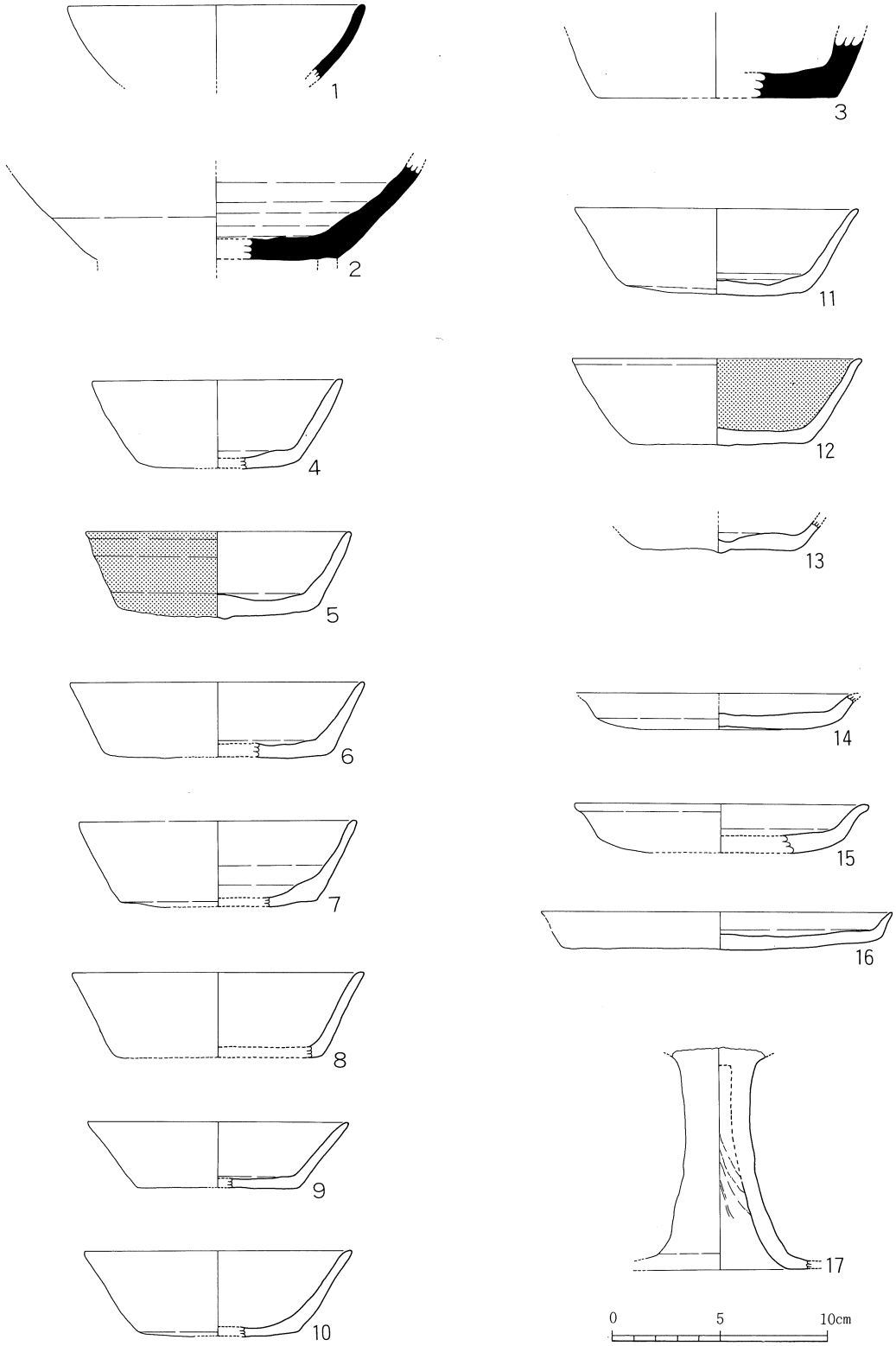
石器　17・18は拳大の安山岩円礫を使用した敲石・凹石である。17の周縁部は敲打痕を残し、平坦面は凹み部を持つ。18は表裏とも凹み部を持つ。

9・10号土坑(第56図)

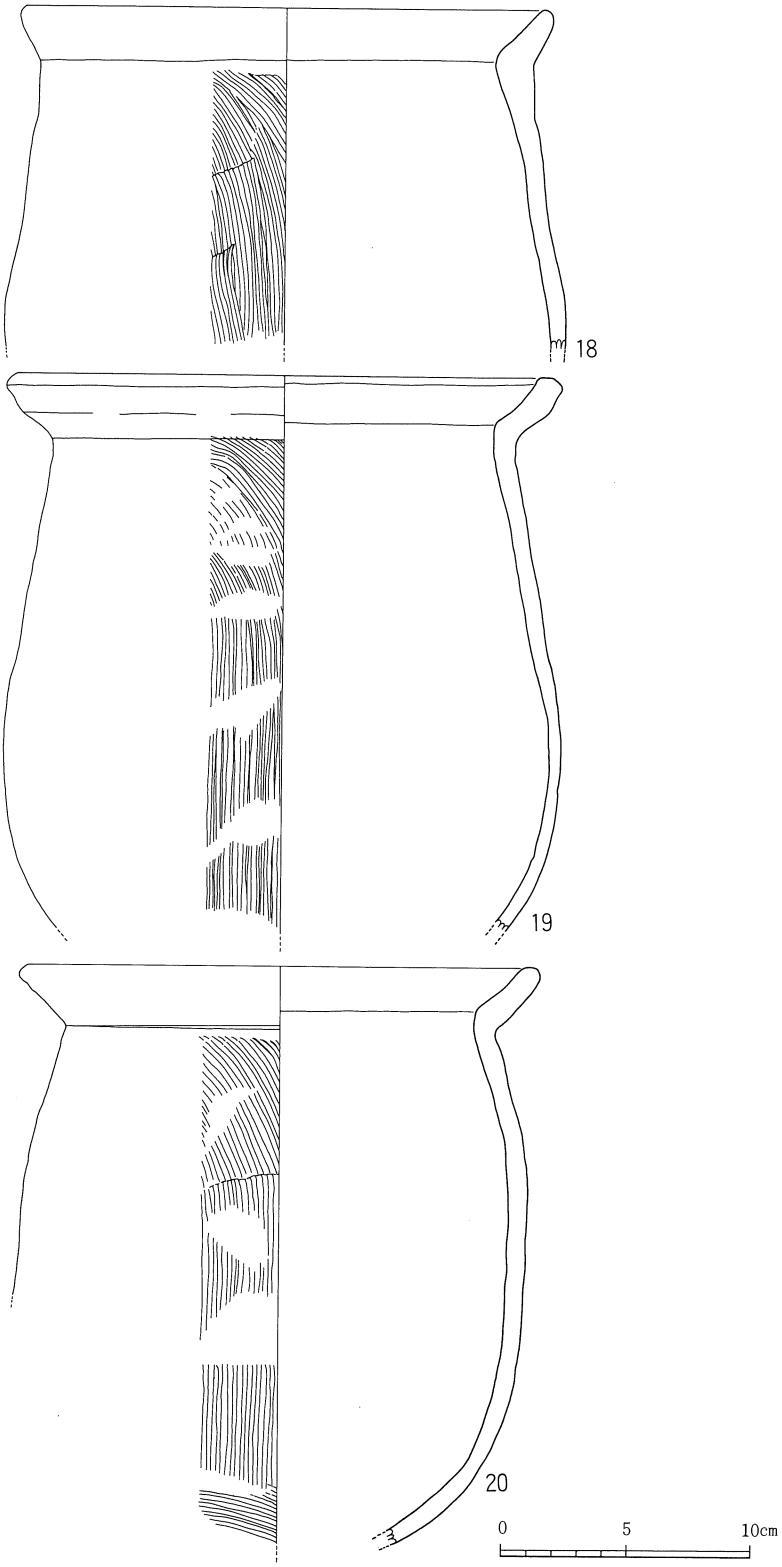
調査区中央部のやや東寄りに位置する楕円状の土坑であり、9号土坑の東に10号土坑が隣接している。これ等の西側には⑨・⑩号掘立柱建物が位置し、北側には21号、20号、14号土坑が



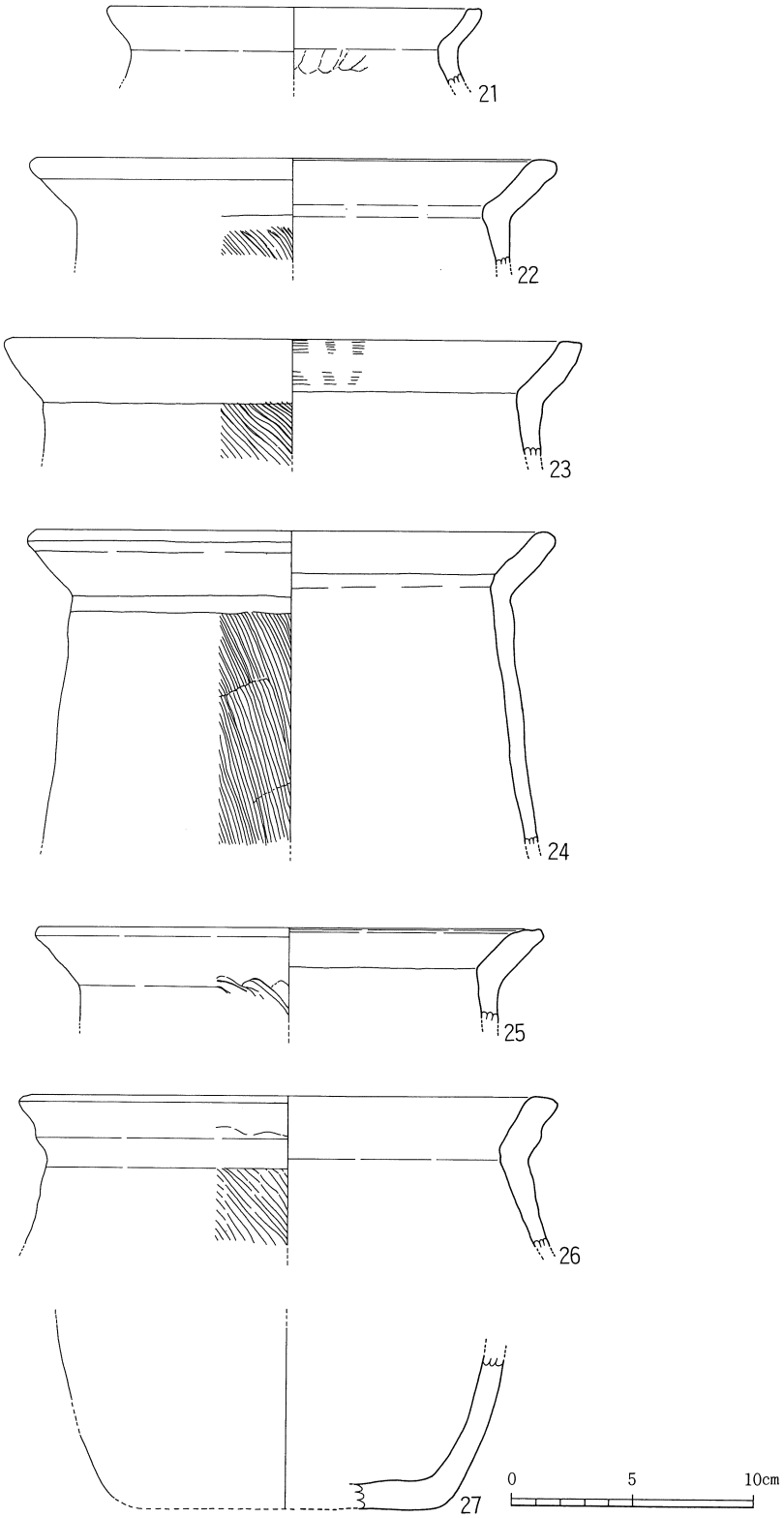
第56図　9号、10号土坑実測図(1/60)



第57図　9号土坑出土遺物実測図(1/3)



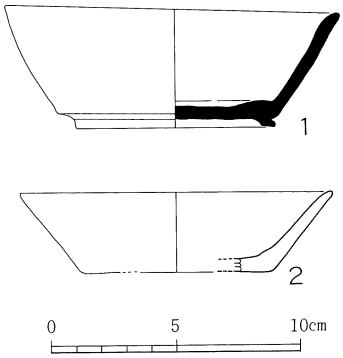
第58図　9号土坑出土遺物実測図(1/3)



第59図　9号土坑出土遺物実測図(1/3)

所在している。9号土坑は長軸を北・南にとり、長径4.6m、短径2.7mの歪な楕円状を呈する。9号土坑の中央部は深さ20cm程であるが、土坑内の北側の半分と南側には横長の楕円状土坑が二段掘りにされており、北側は深さ40cm、南側は深さ30cmである。9号土坑の壁面の立ち上がりはゆるやかな斜面を呈する。

10号土坑は9号土坑の東に接している。平面形態は北と南の円形状の土坑が中央で一部重複している様相を呈する。長径は北・南にとり約3mであり、短径は重複部で1.4mである。10号土坑の北側では深さ25cm、南側では約10cmを測る。



第60図　10号土坑出土遺物実測図(1/3)

9・10号土坑の覆土には多数の遺物が包含されていた。検出面の標高は27,400mである。

出土遺物(第57～60図)

第57図は9号土坑の出土遺物であるが、14は9・10号土坑の一括遺物である。

須恵器　第57図1～3は須恵器である。1は体部が内反した椀の形態であり口径14cmである。2・3は厚い底部であり、2の底部の外縁には高台の剝落した痕跡を残している。

土師器　4～13は土師器の坏である。体部は斜めに直線的に延びる。12の口縁部は心持ち外反する。いずれも底部は回転篦切りであり、体部表裏は撫で調整を施す。5の表面と12の内面には赤色顔料が施されている。口径は11.8cm～13.8cmであり、器高は3cm～4cm内に収まる。

14～16は土師器の皿である。口縁部はゆるく外反する。15の口径は13.8cm、器高2.3cm。16の口径は16.4cm、器高は1.7cmである。

18～24は甕形土器である。口縁形態は「く」の字に外斜しつつ、やや内湾する肥厚口縁である。体部は斜め直線的に延びて下脹れ状の丸味を持ち胴部下半が最大径となるものが多い。21はやや小型の甕であり、口径15.6cmを測る。18～20、22～24の口径は21cm～24cm内に収まる。表面は縦・斜めの刷毛目を顕著に残し、内面は撫で調整されている。

25・26は外傾口縁を呈し、上記の器形と同一の形態である。

17は高坏の脚部である。脚高は約9.5cmである。

27は分厚い平底部である。底径は13.9cmを測る。

第60図は10号土坑出土の遺物である。

須恵器　1は須恵器の高台付きの坏である。体部は斜めに延び、外傾する高台は底部と体部の境界近くに取付けられている。口径13.5cmで器高は4.8cmを測る。

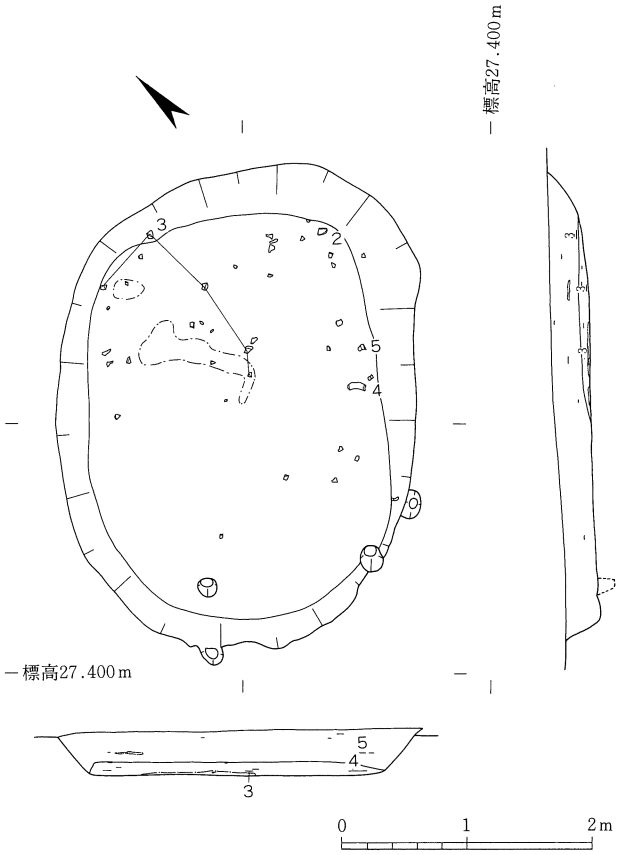
土師器　2は土師器の坏である。体部は斜め直線的に延び、口径12.6cm、器高3.2cmを測る。

1・2とも底部は回転篦切りである。

11号土坑(第61図)

調査区の中央部に位置する楕円状の土坑である。土坑は、西側を7号掘立柱建物の東妻部、東側を6号掘立柱建物の西妻部に狭まれた状態で遺存している。

土坑は主軸を大略北・南にとり、検出面での長さは3.8m、幅は2.9m、深さは30cm～35cm程度である。土坑の壁面の立ち上がりは緩く丸味を帯びる傾斜面である。床面はやや平坦で北西隅部に焼土が確認されている。覆土内には少量の遺物が包含されるが、大部分は浮いた状態であった。検出面の標高は26,900m。

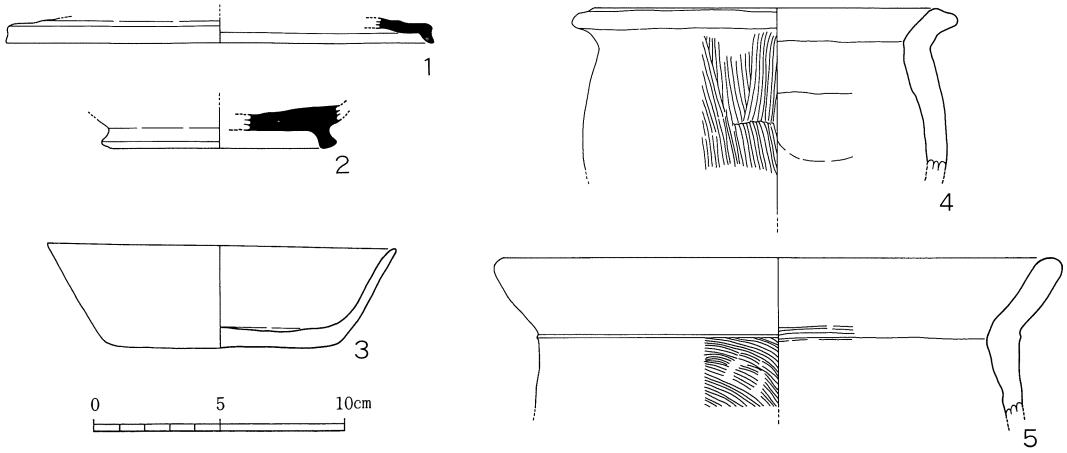


第61図　11号土坑実測図(1/60)

出土遺物(第62図)

須恵器　第62図1は須恵器の蓋である。天井部を大きく欠損する。口縁部は短く折れ、やや尖り気味である。口径17.3cm。2は須恵器の底部である。斜めに張り出した高台は底部端に位置する。底径10cm。

土師器　3は土師器の坏である。体部は斜め直線的で、表面は撫で調整、底部は回転ヘラ切りである。口径14.1cm、器高4.1cm、底径9.4cmを測る。



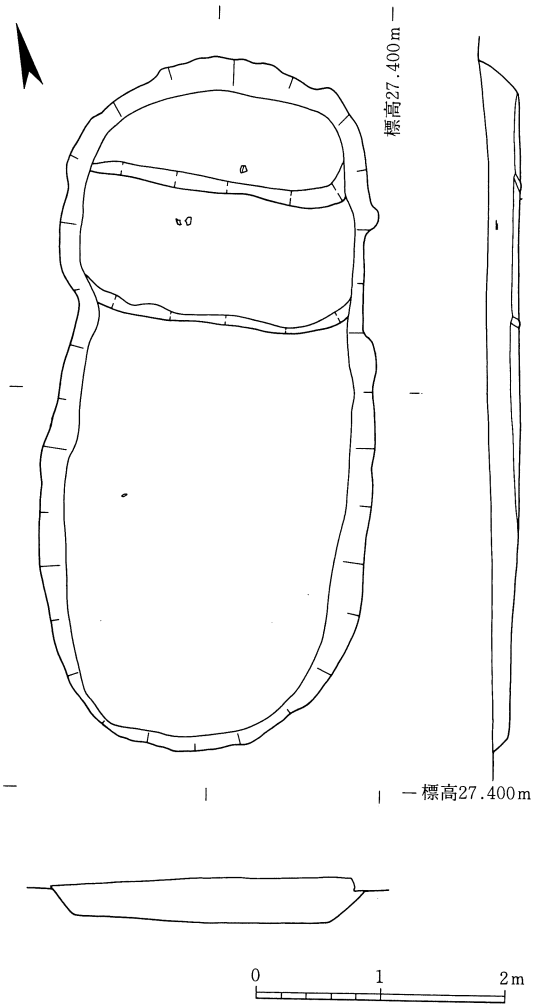
第62図　11号土坑出土遺物実測図(1/3)

4は口径15.6cmを測る小型の甕である。口縁部は短く外反し、口唇部は凹線上に仕上げられている。表面は刷毛目調整で内面は箆切り痕を残す。5の屈折口縁部は内湾気味であり、口唇部を丸く仕上げている。表面は刷毛目痕を顕著に残し、内面は撫で調整を施す。口径は22.9cmである。

12号土坑(第63図)

調査区の中央部に位置する長楕円状の土坑である。④号掘立柱建物の西側妻部に隣接する。土坑は長軸を北・南にとり、検出面での長さは5.6m、幅は2.7mを測る。土坑の深さは北側で30cm、南側で15cmである。土坑壁面の立ち上がりはゆるい傾斜面である。

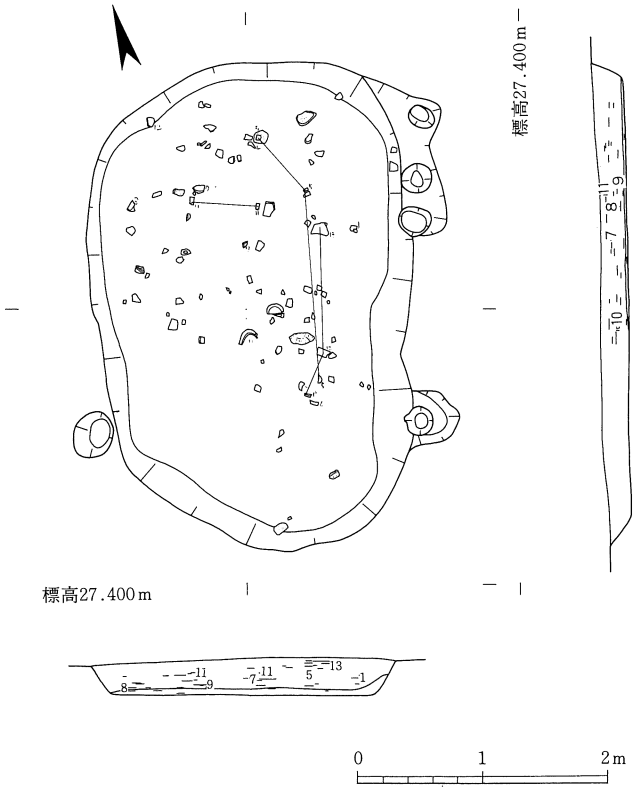
土坑の床面は貼り床状を呈し、北側には2本の間仕切り状の溝が遺存している。土坑内覆土には遺物等は極めて少ない。検出面の標高は26,700mである。



第63図　12号土坑実測図(1/60)

13号土坑(第64図)

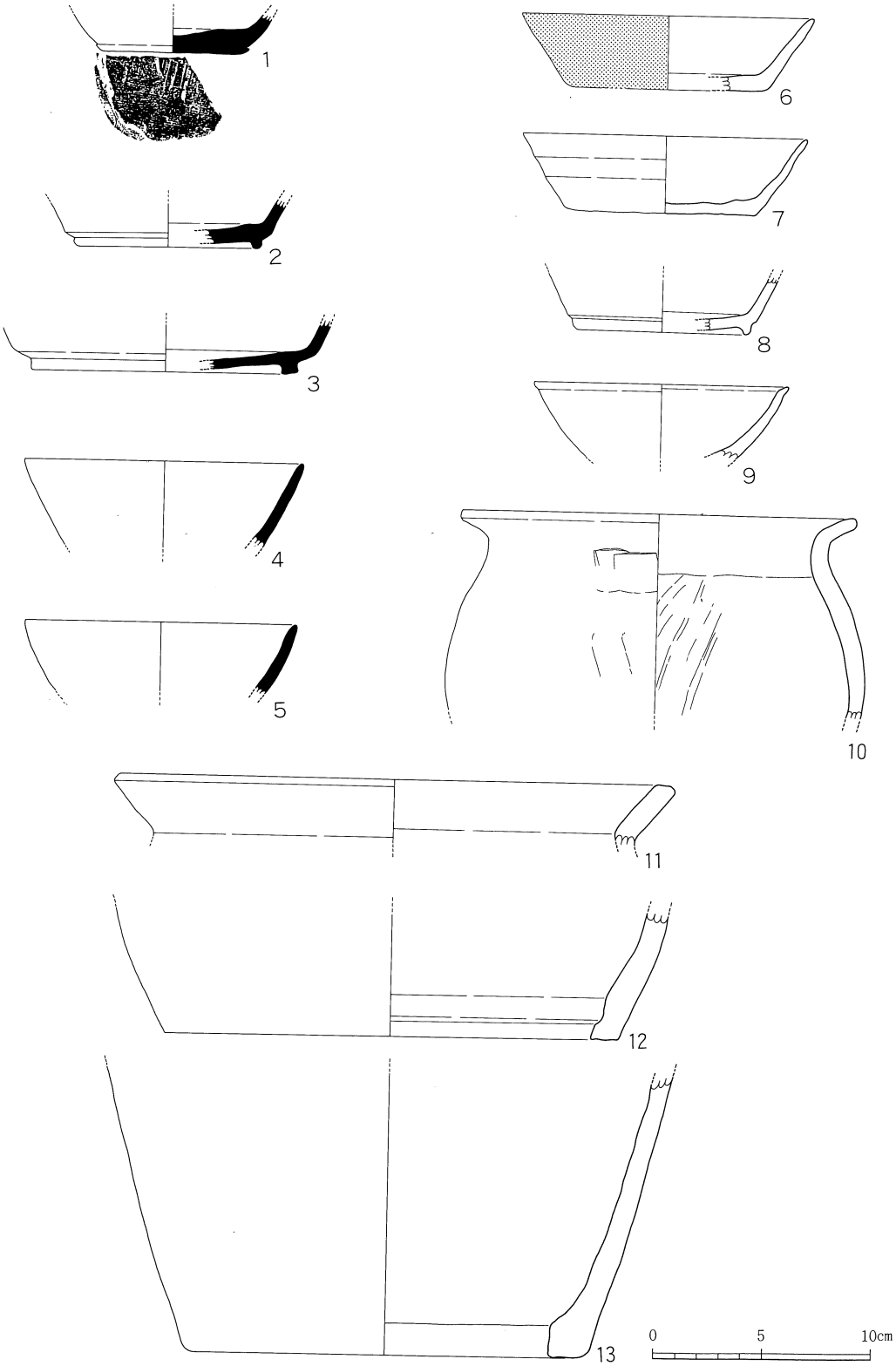
調査区の中央西端に位置する歪な楕円状の土坑である。土坑の東側には7・8号掘立柱建物が位置している。土坑は長軸を北・南にとり、7号掘立柱建物の西側妻部に並列させている様相を呈する。土坑の規模は、長径3.9m、短径2.6m、深さ25cm～30cmである。床面は比較的平坦であり、壁の立ち上がりは緩い角度で丸味を持つ。土坑の縁辺には柱穴が遺存するが、土坑に伴うものではなさそうである。土坑の覆土には須恵器や土師器の破片が多数包含されていた。



第64図　13号土坑実測図(1/60)

出土遺物(第65図)

須恵器　第65図1～5は須恵器の坏である。いずれも器壁表裏は撫で調整がされている。1は平坦な底部であり、板状圧痕を残す。底径7.1cm。2・3は高台付きの底部である。2の高台断面は丸味を帯び体部との境い近くに付けられている。底径8.7cm。3は断面四角の高台であり外側に若干傾斜する。底径12.4cm。4・5は坏の口縁部片である。4は斜めに直線的に延び、



第65図　13号土坑出土遺物実測図(1/3)

5はやや内湾気味である。4の口径は12.9cm。5の口径は12.6cmである。

土師器　6～9は土師器の坏である。いずれも器壁表裏は撫で調整が施されている。6の体部は斜め直線的に延び、7は若干波打つ様子である。器壁表裏はいずれも撫で調整され、7の底部は回転篦切り後に撫で調整されている。6の表面には赤色顔料が施され、口径は13.7cm、器高は3.4cm、底径は9.4cm。7の口径は13.3cm、器高は3.6cm、底径は9cm。

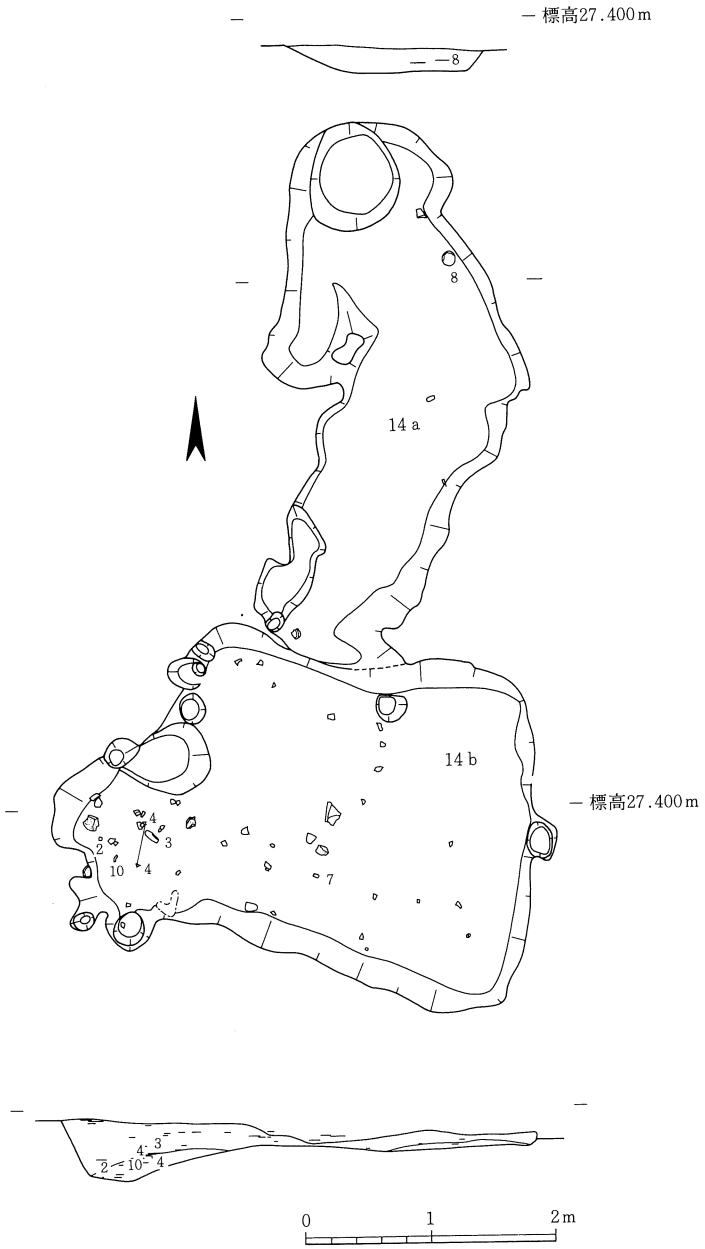
8は高台付きの坏底部である。高台断面は丸味を持ち、底部と体部の境近くに付けられている。底径8.3cm。9の体部は心持ち内湾気味で、口縁部で緩く外反する特徴を持つ。口径11.8cm。

10・11は粗製の甕の口縁部である。10の口縁部は丸味を持って外反し、口径18.4cmを測る。表裏とも篦削りが施されているが、表面は撫で調整で整える。11も表裏撫で調整された口縁部であり、口径は26cmを測る。

12・13は甑片である。斜め直線的に延びた体部は撫で調整が施されている。底は大きな空洞であり、先端部に段を設ける。12の底径は21cm、13は18.8cmである。

14号土坑（第66図）

調査区中央部の東隅部の境界線近くに接する不定形で歪な土坑である。北に15号土坑、西に9号土坑が位置している。仮に土坑の北側を14a、南側を14bとすると、14aの土坑は不定形



第66図　14号土坑実測図(1/60)

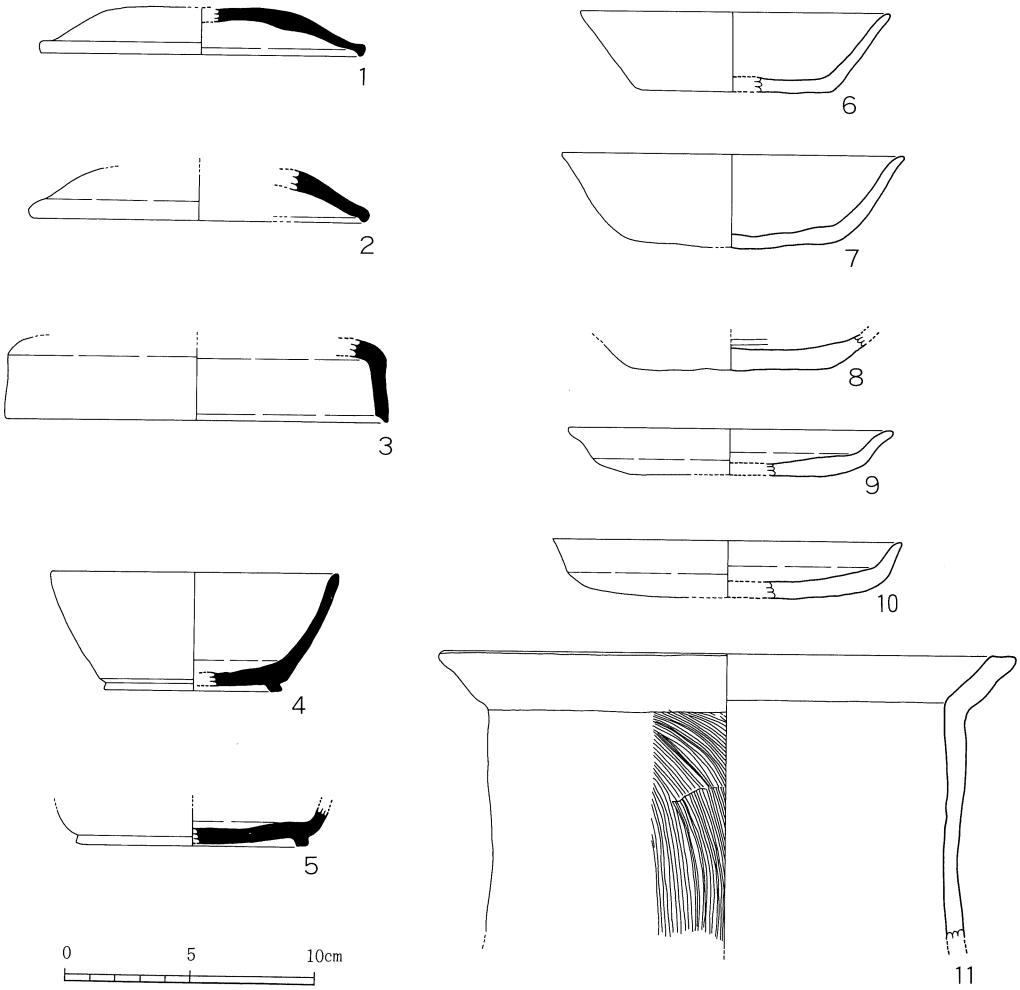
で主軸を北・南にとる。長軸4.3m、短軸最大径は2.1m、最小径は1.2mを測り、深さは20cmである。一方、14b土坑は歪な4角形状を呈し、長軸を西・東にとり、長径3.9m、短径2.3mである。14bの土坑の深さは西端で50cmと深く、東端で10cmと浅い。

14号土坑の検出面の標高は27,300mである。

出土遺物(第67図)

出土遺物は14b土坑を中心に検出されている。

須恵器　第67図1～3は須恵器の蓋である。1・2は弧状の天井部からそのまま延びた口縁部は短く折れ、端部はやや丸く整えられている。3の口縁部は平坦な天井部から大きく屈折し、口唇内側は面取りされ鋭い。いずれも撮み部を欠損するが表裏とも撫で調整されている。1は口径13.2cm、2は口径13.8cm、3は口径15.5cmである。

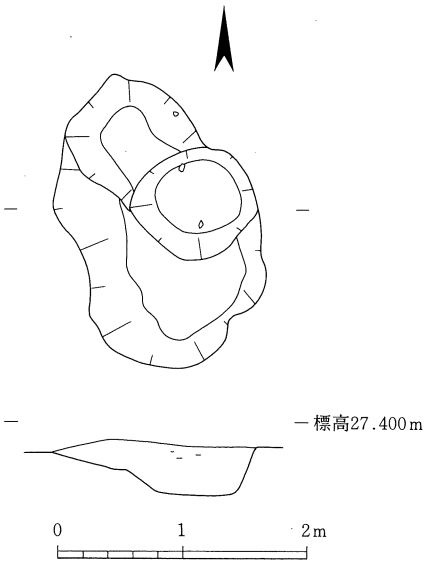


第67図　14号土坑出土遺物実測図(1/3)

4・5は須恵器の高台付きの坏である。断面四角形の高台は底部と体部の境目近くに位置し、やや外に張り出す。4の体部は心持ち内湾し、口径11.6cm、器高4.8cm、底径7.2cmを測る。5の底径は9.4cmである。

土師器　6～8は土師器の坏である。6の体部は直線的に延び、7の丸味を持つ体部は口縁部で心持ち外反する。いずれも底部は回転篦切り痕を残し、表裏は横撫で調整を施す。8の底部内面は回転篦磨きである。6は口径12.6cm、器高3.2cm、底径8.1cm。7は口径13.9cm、器高3.8cm、底径8.5cm。8の底径は8.1cmである。

9・10は土師器の皿である。9の低い体部はやや外反し、10の丸味を持つ底部から、斜めに屈曲した口縁部は口唇をやや尖す。9は口径13.2cmで器高は1.9cm。10は口径14.1cmで器高は2.3cmを測る。



第68図　15号土坑実測図(1/60)

11は粗製の甕である。「く」の字に屈折する口縁部はやや肥厚し波打つ。表面は顕著な刷毛目痕を残し、内面は撫で調整を施す。口径は23.3cmである。

15号土坑(第68図)

調査区の北東部の境界近くに位置し、南側には14号土坑が続いている。小型の不定形土坑であり、長軸を北・南にとる。長径2.2m、短径1.6mで中央部の深さは約40cmである。

出土遺物は数点あるが図示できない細片である。検出面の標高は27,200mである。

16、17、18号土坑(第69図)

調査区北西の境界付近に所在する土坑群である。小さな楕円状の土坑が切り合いながら密集している。

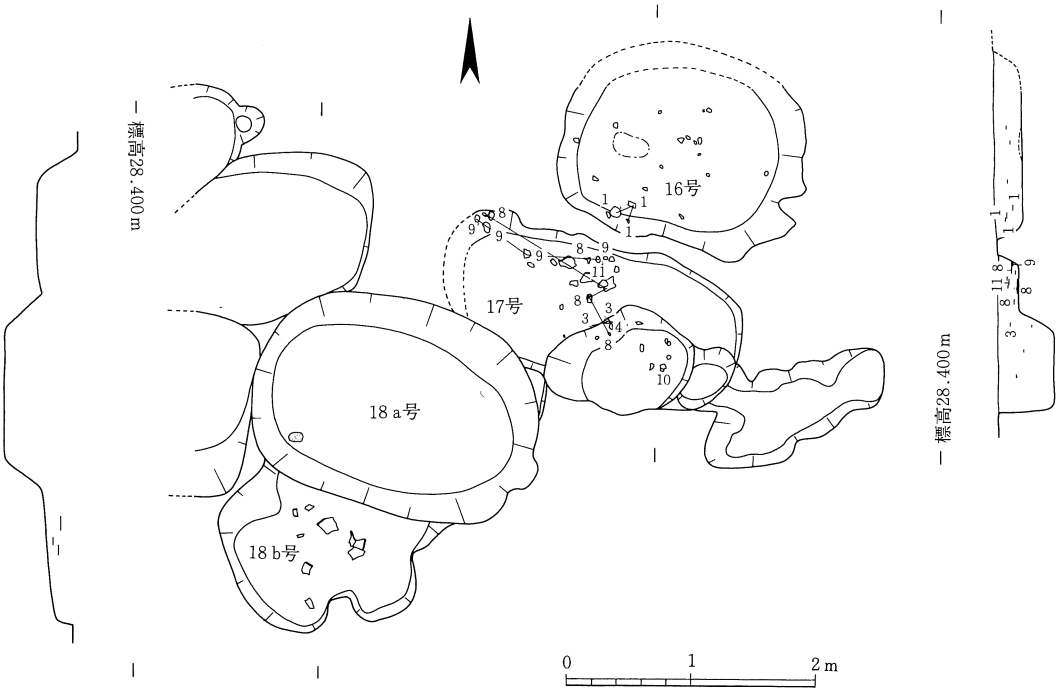
16号土坑は楕円状を呈し、長径2m、短径1.8m、深さ25cmである。床面は平坦で壁高は緩い丸味を持つ。床面中央西端には焼土が確認できる。

17号土坑は16号土坑の南に接する。長軸を西・東にとる長楕円状の土坑であり、長径2.4m、短径1.2mで深さ約20cmを測る。土坑の南端には深さ45cmの不整形土坑が重複している。

18a号土坑は主軸を西・東にとり、長径2.3m、短径1.7m、深さ55cmを呈する楕円状の土坑である。18a号の南側には深さ15cmの18b号土坑が切り合っている。

この土坑群の西側の境界線には幾つもの土坑が切り合って遺存するが実体は不明である。

土坑検出面の標高は27,900mである。



第69図　16号、17号、18号土坑実測図(1/60)

出土遺物(第70・71図)

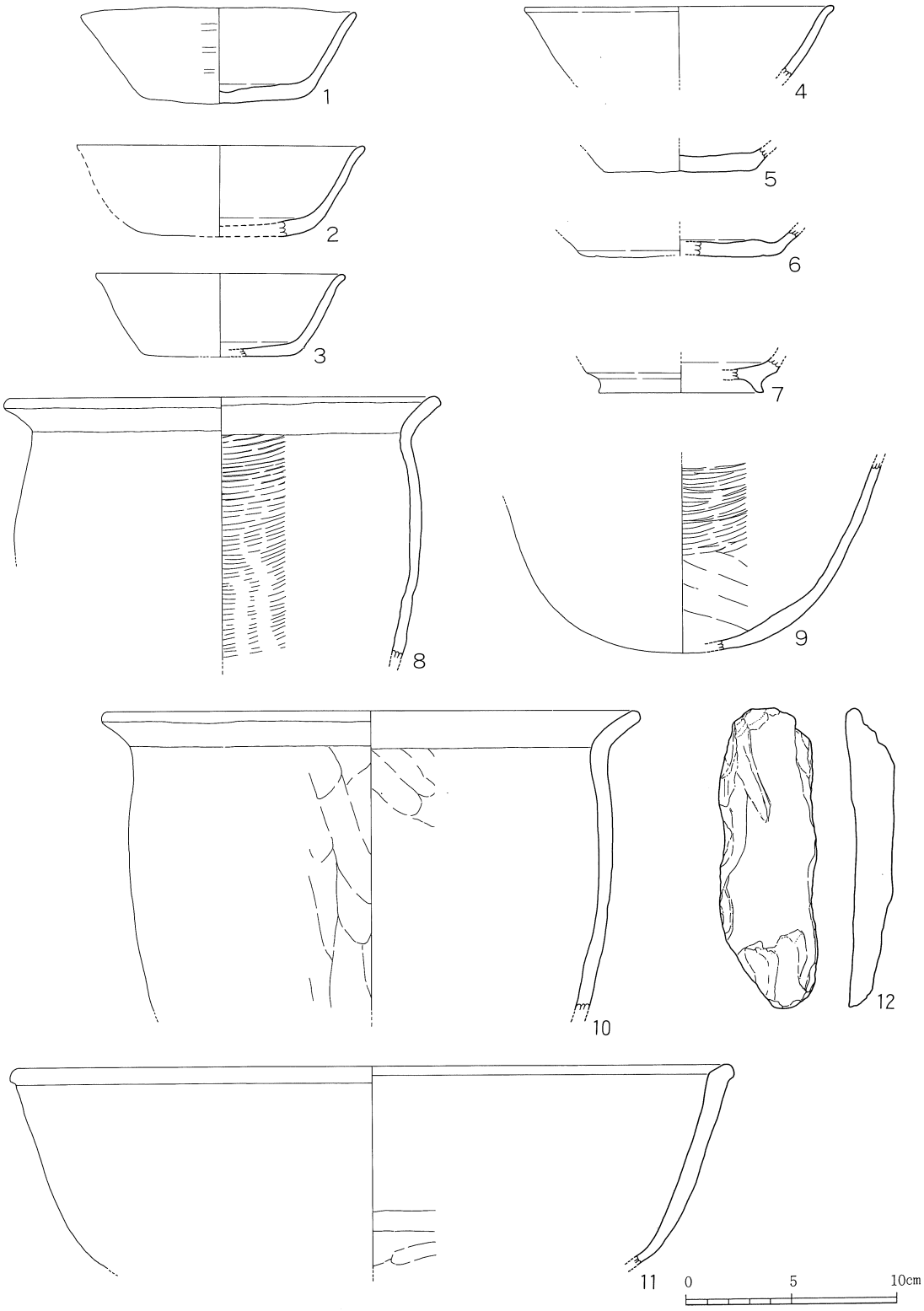
土師器　第70図1・2は16号土坑より出土した土師器の坏である。1の底部は回転篦切り後撫で調整され、体部は直線的に斜めに開く。2の口縁部は心持ち外反する。いずれも表裏は撫で調整されている。1は口径13.2cm、器高4.6cm、底径8cm。2は口径13.8cm、器高4.4cm、底径8.9cmを測る。

3・4は17号土坑出土の土師器の坏である。両方とも口縁部は心持ち外反する。3は口径12cm、器高4cm、回転篦切りの底径は7.5cm。4の口径は14.8cmである。

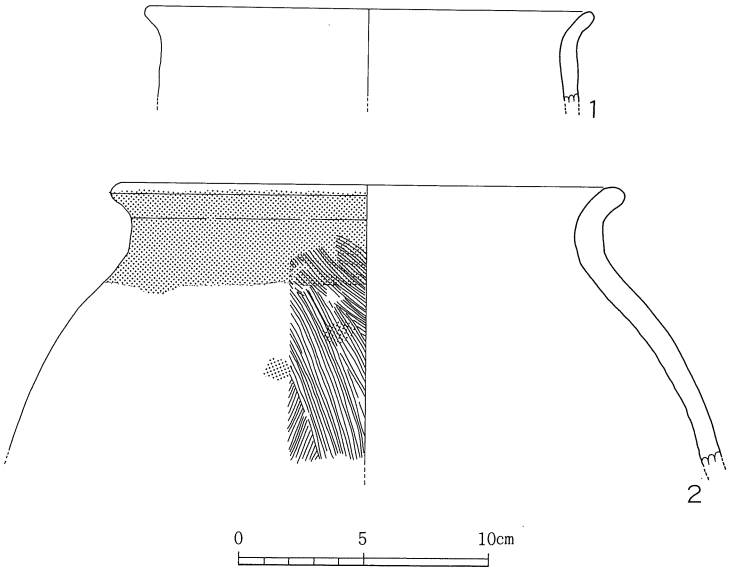
5～7は16号、17号土坑より出土した土師器の坏底部である。5・6は回転篦切り痕を残し、5は底径7.2cm、6は底径9.9cmである。7の高台はやや斜めに張り出す。底径7.9cm。

8～10は17号土坑より出土した甕の口縁部と丸底部である。8の口縁部はゆるやかに外反し、内面は刷毛目調整で表面は撫で調整を施す。9も同様であり、底部内面は篦削り痕をとどめる。10の口縁部はゆるやかに外反し、表裏に篦削り痕をとどめる。

11は17号土坑出土の土鍋である。肥厚した口縁部からゆるやかな弧を描いて底部に至る。底部付近は器壁が薄く敲き痕を残し、周辺部には炭化物が付着している。底部内面には削り痕が認められる。口径35cmである。



第70図　16号、17号土坑出土遺物実測図(1/3)



第71図　18ｂ号土坑出土遺物実測図(1/3)

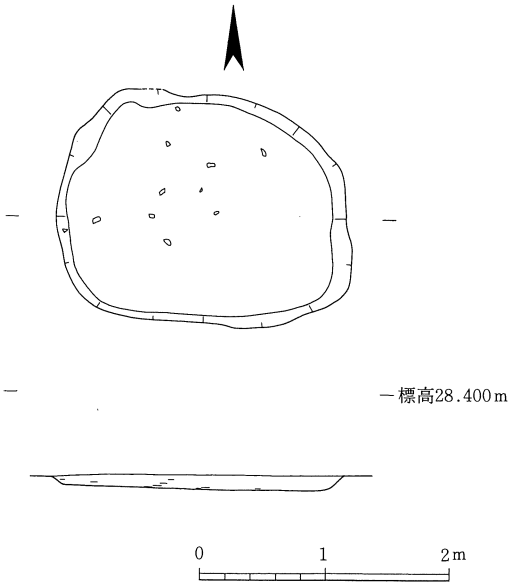
石器 12は17号土坑から出土した砥石である。結晶片岩製。長さ14.4cm、幅4.6cm、重さ210g。

土師器　第71図１・２は18b号土坑より出土した甕である。１の口縁部は心持ち外反し、口径18.1cm。２は口縁部が短く外反し、胴部が球形に誇張される形態であり、頸部を中心に赤色顔料が塗布されている。表面は刷毛目調整痕を残す。

19号土坑(第72図)

調査区の北西部に位置し、12号掘立柱建物の西側妻部に隣接する楕円状の土坑である。長軸を西・東にとり、長さ2.4m、幅1.8m、深さ約10cmである。遺物が少量出土しているが図示できるようなものは無い。

検出面の標高は27,800mである。



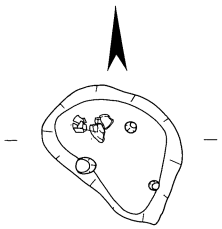
第72図　19号土坑実測図(1/60)

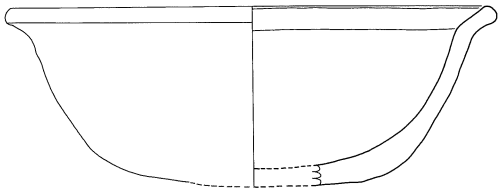
20号土坑(第73図)

調査区中央部の東壁寄りの小さな土坑である。西に21号土坑、南に9・10号土坑、東に14号土坑が位置する。形態は歪な楕円状を呈する。検出面での長径は1.2m、短軸82cm、深さは16cmである。床面からの壁の立ち上がりは緩い弧状を描く。土坑内には若干の遺物が確認できる。検出面の標高は27,400mである。

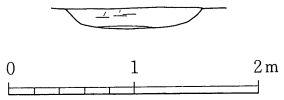
出土遺物(第74図)

第74図は土師器の鉢型土器である。口縁部は「く」の字に外反し、口唇を丸く整える。底部は緩い丸平底である。口径19.8cmで器高7.3cmを測る。





第74図　20号土坑出土遺物実測図(1/3)



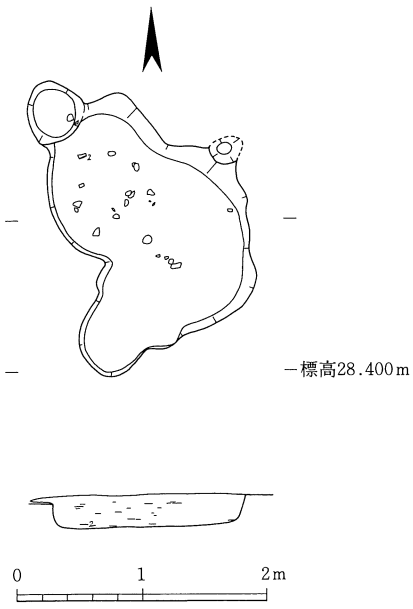
第73図　20号土坑実測図(1/60)

21号土坑(第75図)

調査区の中央北東寄りの歪な小型の土坑である。西に9・10号掘立柱建物、南に10号土坑、東に20号土坑が位置する。土坑の規模は北・南軸で約2.2m、西・東軸で約1.6m、深さは25cmを測る。土坑内には土器類が若干包含されていた。土坑検出面の標高は27,400mである。

出土遺物(第76図)

第76図1は甕である。ゆるい外反口縁を呈し、口唇部は丸味を持つ。表面に刷毛目痕を残し、内面は撫で調整。口径19cmである。



第75図　21号土坑実測図(1/60)

2は片口鉢である。胎土や焼きは須恵質である。表裏は撫で調整。口径は24.4cmである。

22号土坑(第77図)

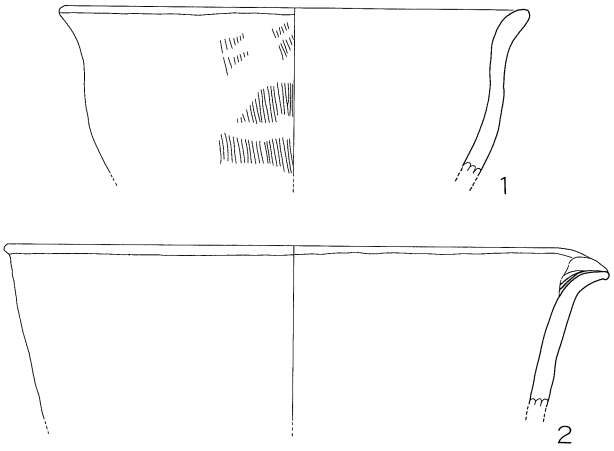
調査区の北西隅部の境界線上に位置する。形態は歪な隅丸の四角形状を呈する。長軸を西・東にとり、長さ3.3m、幅2.8m、深さ20㎝～30㎝を測る。床面は緩い起伏が認められる。土坑の内側には数本の柱穴が遺存するが、これに伴うものではない様子である。土坑覆土には遺物等は検出されなかった。

23号土坑(第78図)

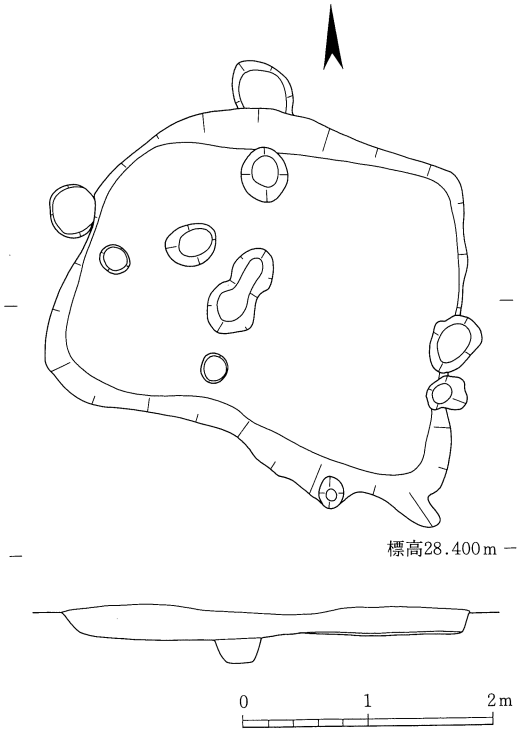
調査区中央部の東寄り、4号掘立柱建物に隣接する小さな土坑である。土坑は歪な楕円形状を呈し、長径2.5m、短径1.5m、深さは中央部で25㎝、南東部で30㎝を測る。南東部の若干低い部分には焼土が検出されている。底面から壁面へは緩く丸味を持つ傾斜面である。　検出面の標高は26,900mである。

出土遺物(第79図)

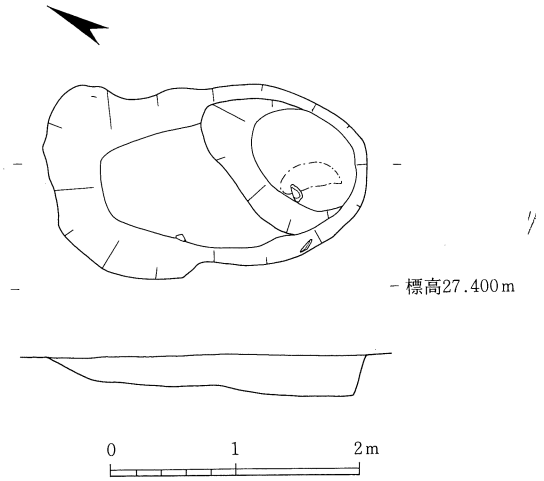
第79図は土師器の高台付きの坏である。断面四角形の高台はやや外側に傾斜し、体部は斜めに直線的であり、端部を丸く整える。底部は回転篦切りである。口径14.2㎝、器高4.7㎝、底径10.2㎝を測る。



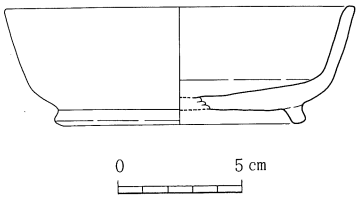
第76図　21号土坑遺物実測図(1/3)



第77図　22号土坑実測図(1/3)



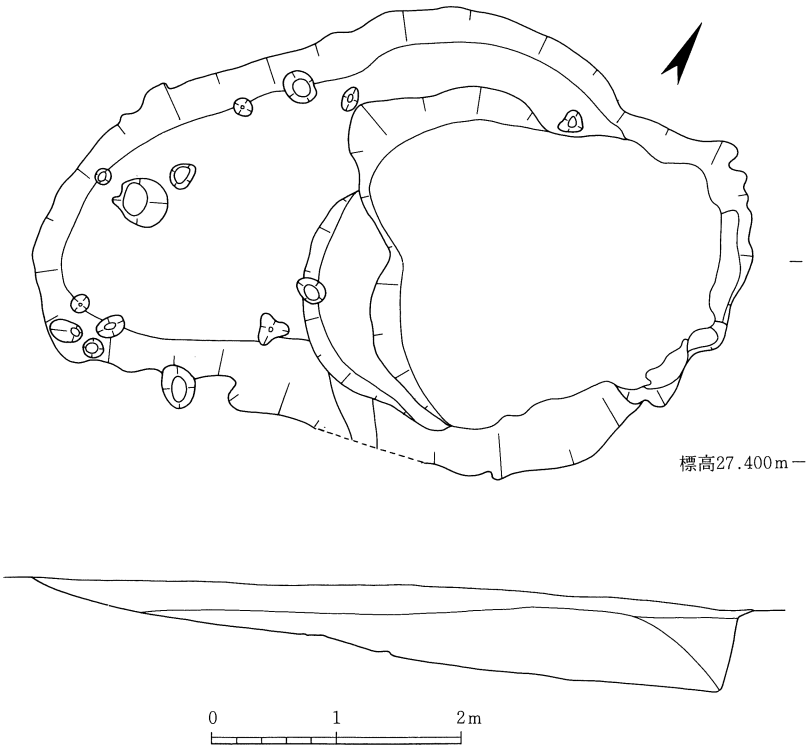
第78図　23号土坑実測図(1/60)



第79図　23号土坑出土遺物実測図(1/3)

24号土坑(第80図)

調査区の南端近くに位置し、①号掘立柱建物の北側に隣接する不整楕円形の土坑である。長軸を西・東にとり、長さ5.8m、幅3.7mである。土坑の深さは西側で約30cm、東側で約70cmを測り、床面は西から東へと傾斜している。土坑内には数本の柱穴が確認できるが土坑に伴うものではなさそうである。

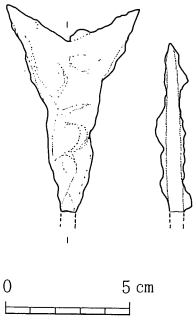


第80図　24号土坑実測図(1/60)

土坑の検出面での標高は26,200mである。

出土遺物(第81図)

鉄器が1点出土している。雁股の鉄鏃である。最大幅は先端で5.4cmを測る。



第81図　24号土坑出土遺物実測図(1/3)

3．柱穴内及び表土・包含層出土遺物

柱穴内及び包含層出土遺物

須恵器　第83図1・2は須恵器である。1は器高の低い蓋である。平坦な天井部から小さく折れた端部は尖る。撮みは欠損し、口径13.1cmを測る。2は高台付きの坏である。体部は弧状を呈し、口縁部でゆるく外反する。口径14cm、器高4.2cmである。高台は底部端にあり、畳付きは内側にある。底部は回転篦切りである。

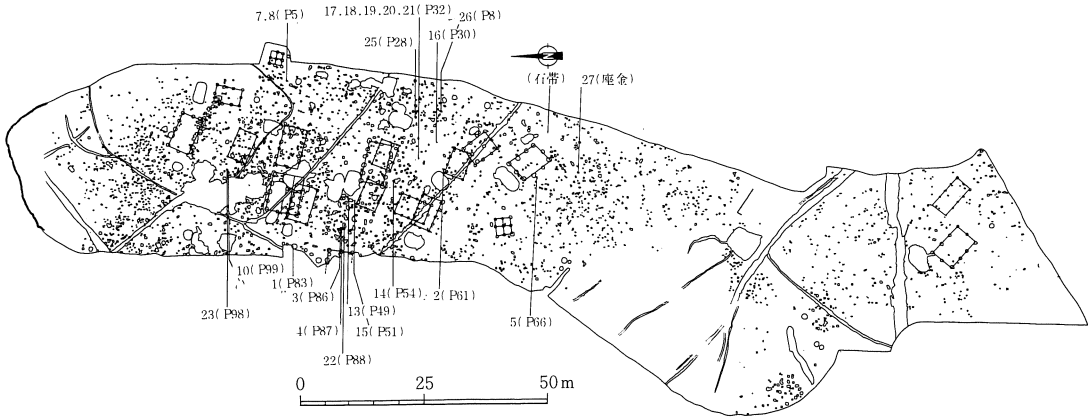
土師器　3は土師器の高台付きの坏である。断面四角形の高台は底部と体部の境界に付き、体部は斜め直線的に延びる。口径14.2cm、器高4.5cmを測る。

4～6は土師器の蓋である。4は撮み部、5・6はいわゆる嘴状を呈する。天井部は丸く、表裏撫で調整を施す。口径13.8cm、器高3.2cm。6の天井部は低く平坦である。口径14cm。

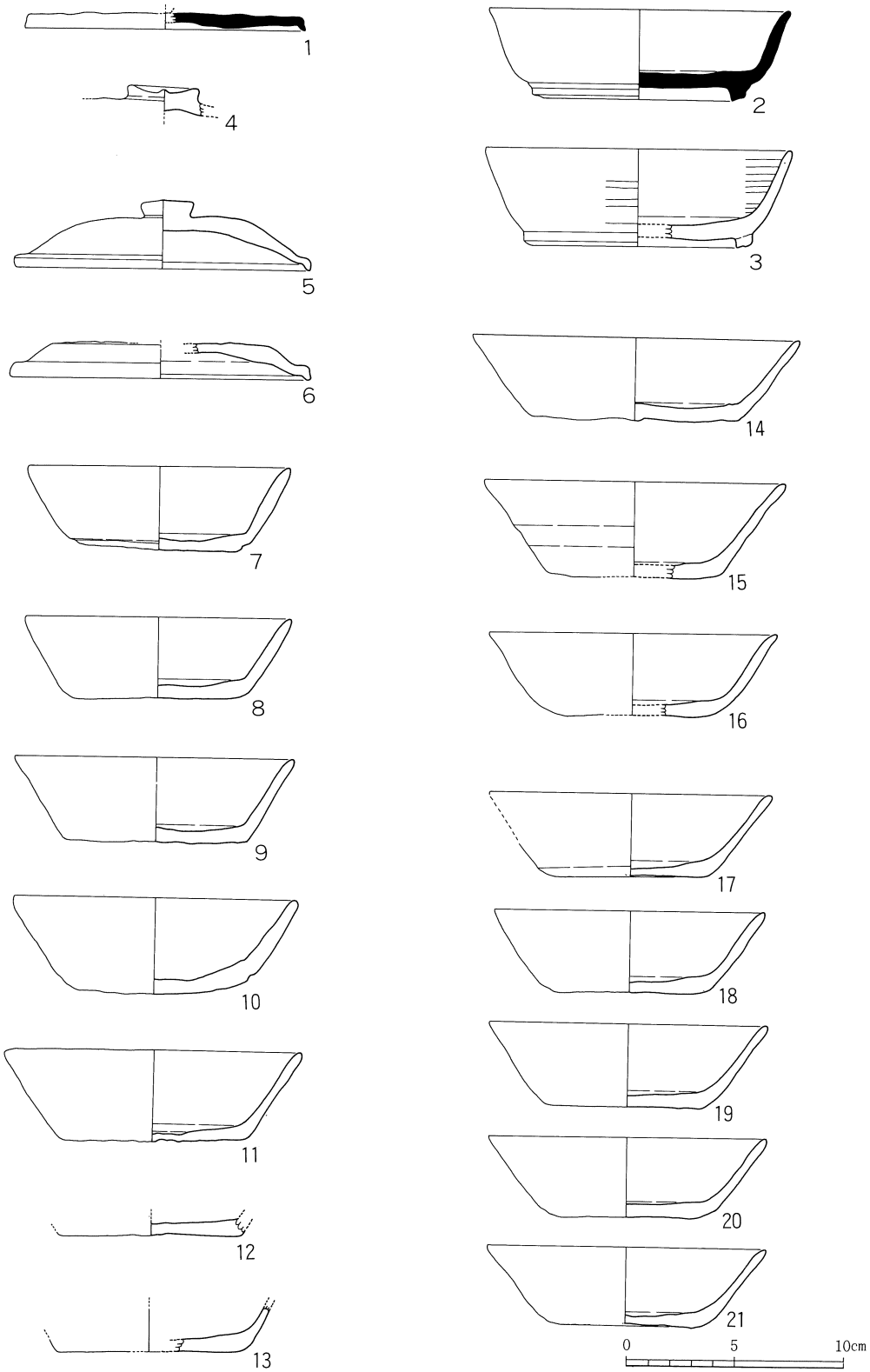
7～21は土師器の坏である。平坦底部から斜め直線的に延びる体部である。16の心持ち外反する口縁部には内外に希薄な炭化物が付着している。これ等は底部回転篦切りであり、体部表裏は撫で調整を施している。17～21は包含層内に坏が重なり合い、デポ状に検出されたものである。7～16までは口径12.2cm～15.2cmを測り、器高は3.7cm～4.5cmである。17～21は口径12.6cm～13.2cmで器高は3.5cm～3.8cm内に収まる。

弥生後期の土器　第84図22は弥生後期後半の二重口縁壷である。口縁に2段の波状の櫛描文を施文する。

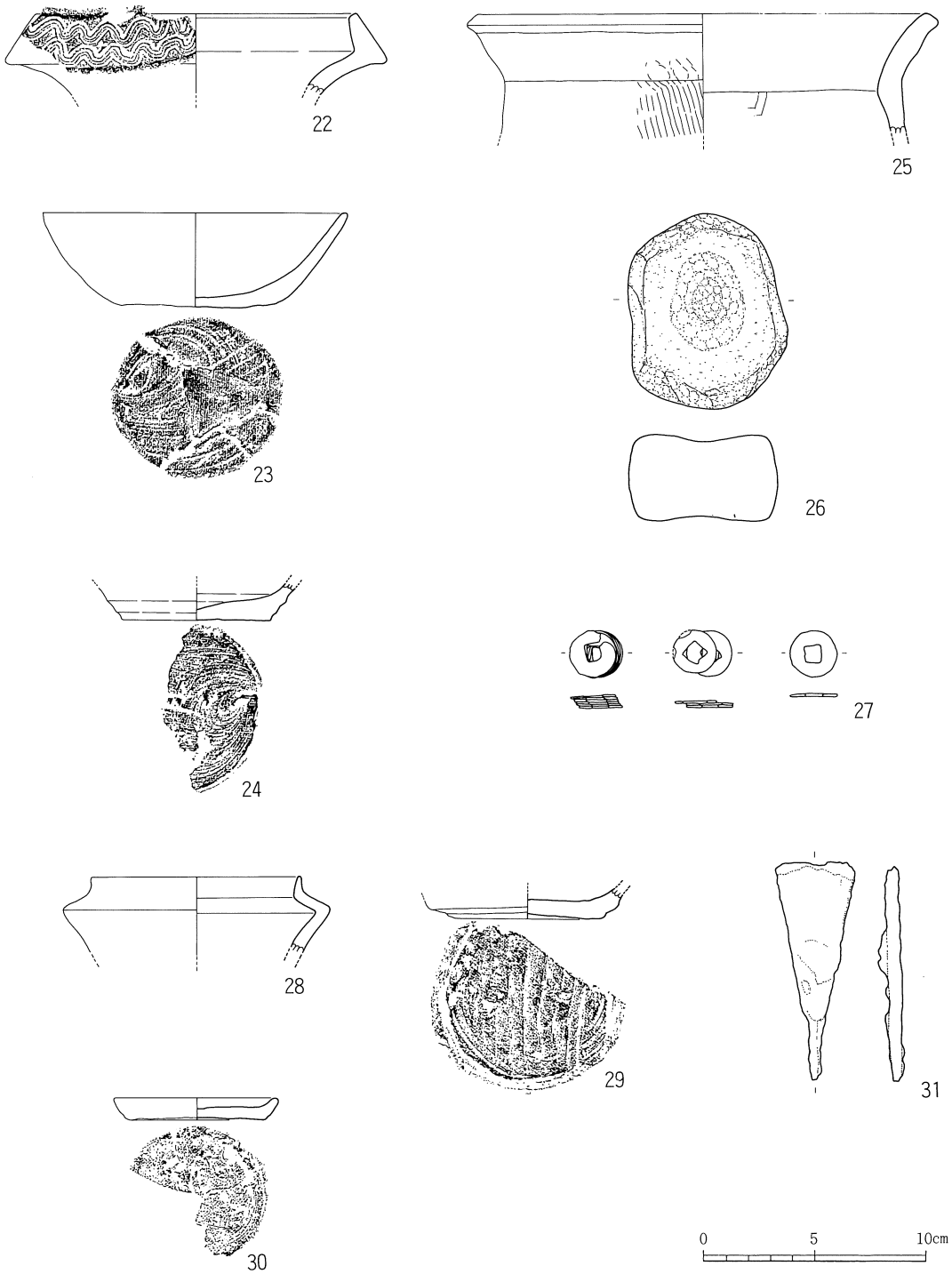
糸切り底部の土師器　23・24は糸切り底の坏である。23は口径13.4cm、器高4.3cmである。25



第82図　柱穴内及び包含層出土遺物位置図(1/1500)



第83図　会下遺跡柱穴及び包含層出土遺物実測図(1/3)



第84図　会下遺跡柱穴及び包含層出土遺物実測図(1/3)

は甕の口縁部である。外反口縁を持ち、表面に刷毛目を残す。

石器　26は拳大の安山岩礫を使用した敲石・凹み石である。側縁は敲打痕を残し、礫の表裏は凹んでいる。

青銅製品　27は柱穴内から一括出土した銅製品である。径2.1cmの円形を呈し、厚さ1mm強である。中央部に1辺7mm前後の方形の穴が穿たれている。一見古銭を想像させるが、座金の一種であろうか。

表土及び包含層出土遺物(第85～88図)

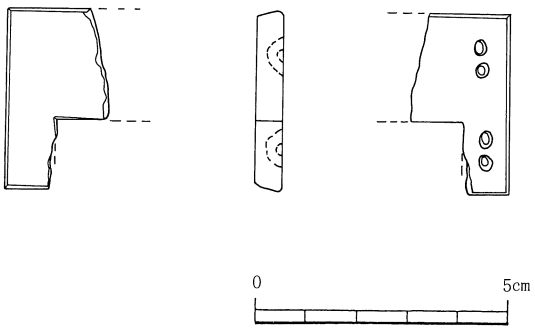
石帯　第85図は淡緑色に黒斑のある蛇紋岩製の岩帯である。縦幅は3.6cm、横幅は2＋αcm、厚さ0.6mmを測る長方形の巡方である。石帯の中央下半には長方形の透し孔が施されている。全体的に研磨されており、表面は光沢を帯びる。裏面は潜り穴が縦辺に沿って上・下の2個所に穿たれており、全部で4個所の潜り穴が推察できる。石帯の周縁は表裏とも面取りが施されており、側面でみると表面が裏面より2mmほど短い。大分県内で初の発掘事例である。

ナイフ形石器　第86図1～3は後期旧石器時代のナイフ形石器である。1は風化の顕著な黒曜石製の分厚い縦長剝片を利用した二側辺加工のナイフ形石器。2・3はホルンフェルス製の横長剝片を使用する。2は切出形を呈する。1は重さ2g、2は1.1g、3は11.9g。

石鏃　4～9は石鏃である。4は風化が顕著な安山岩製で重さ0.5g。5～7は姫島産黒曜石製である。5は1g、6は1.7g、7は0.6gを計る。8・9はチャート製である。8は三角形を呈し、9の脚は大きく開く。8は0.6g、9は1.4gである。

須恵器　第87図1～3は須恵器の蓋である。1は天井部から急角度で折れ曲る短頸壷の蓋である。2・3の天井部には篦削り痕を残す。体部は曲線的であり、端部で短く折れる。1の口径は14.5cm、2は口径14.2cm、器高2.4cmを測る。3の口径は16.7cmである。4は須恵器の広口壷の頸部である。2本の沈線が廻る。5・6は高台付きの須恵器の坏である。5の体部は丸味を持ち、口縁部で心持ち外反する。6は外曲気味の体部である。いずれも底部と体部の境界に高台があり、6の畳付きは内側にある。5は口径14.6cm、器高4.3cm。6は口径16cm、器高5.5cmを測る。

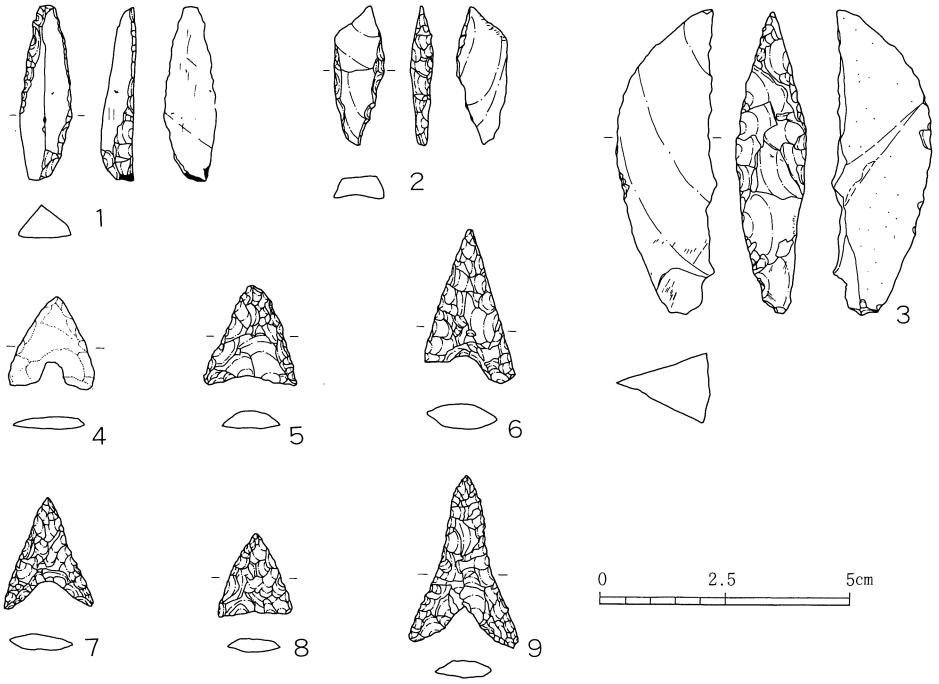
土師器　7・8は土師器の蓋である。弧状の天井部から曲線的な体部を持つ。7は口径14.6cm、器高2.9cm。8は嘴状口縁であり、天井部に篦削り痕を残す。口径14cm。9～15は土師器の坏である。9～11は回転篦切りの底部から斜め直線的な体部を持



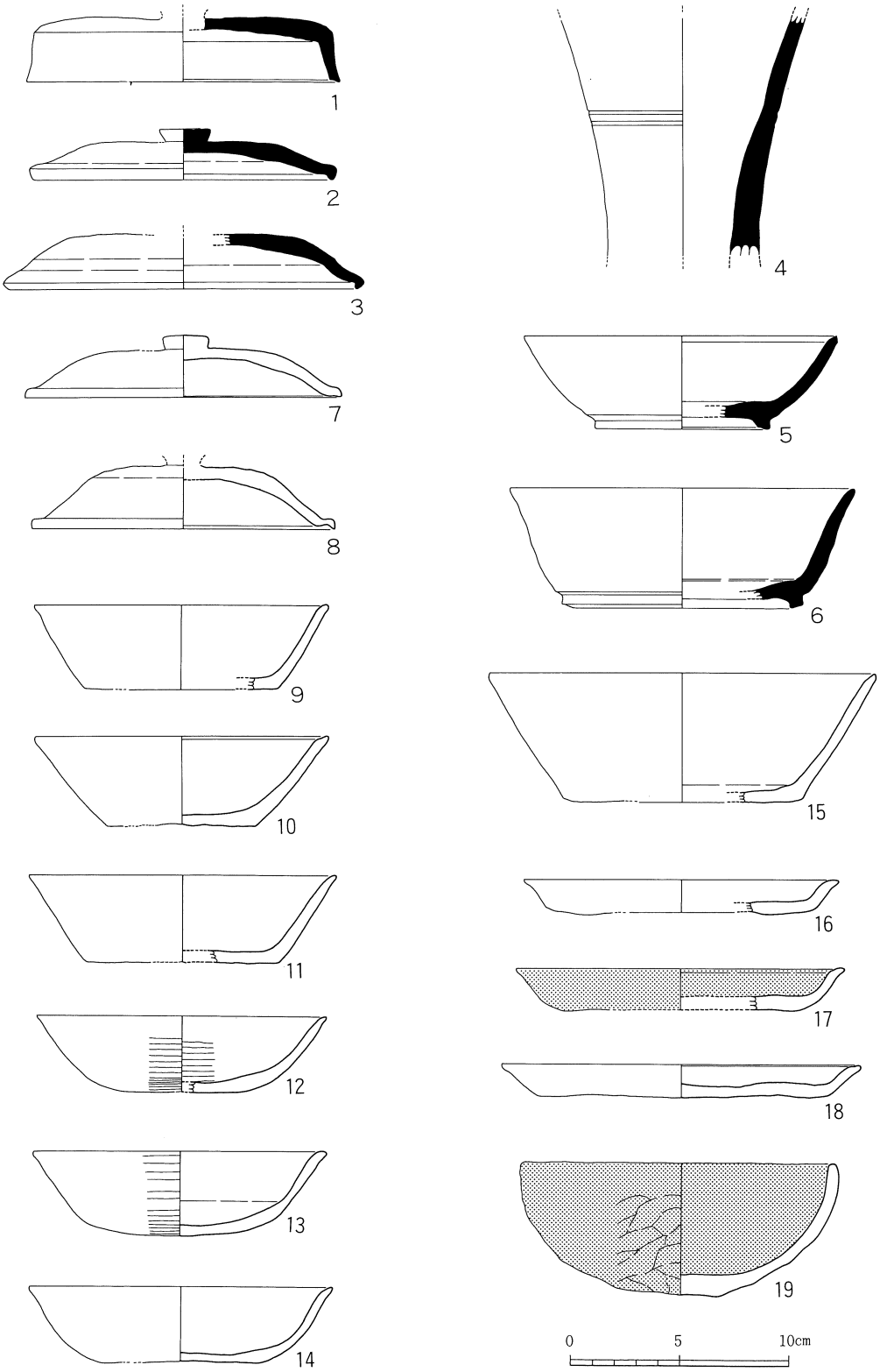
第85図　会下遺跡出土の石帯実測図(2/3)

ち、口縁近くで心持ち外反する。12～14は底部から体部へは丸く仕上げており、口縁部で心持ち外反する。12の底部は内外とも回転篦磨きが施され、13は内面篦磨き後撫で調整されている。14は表裏撫で調整である。これ等の坏は口径13.3cm～14.2cmで、器高は3.5cm～4.1cmである。

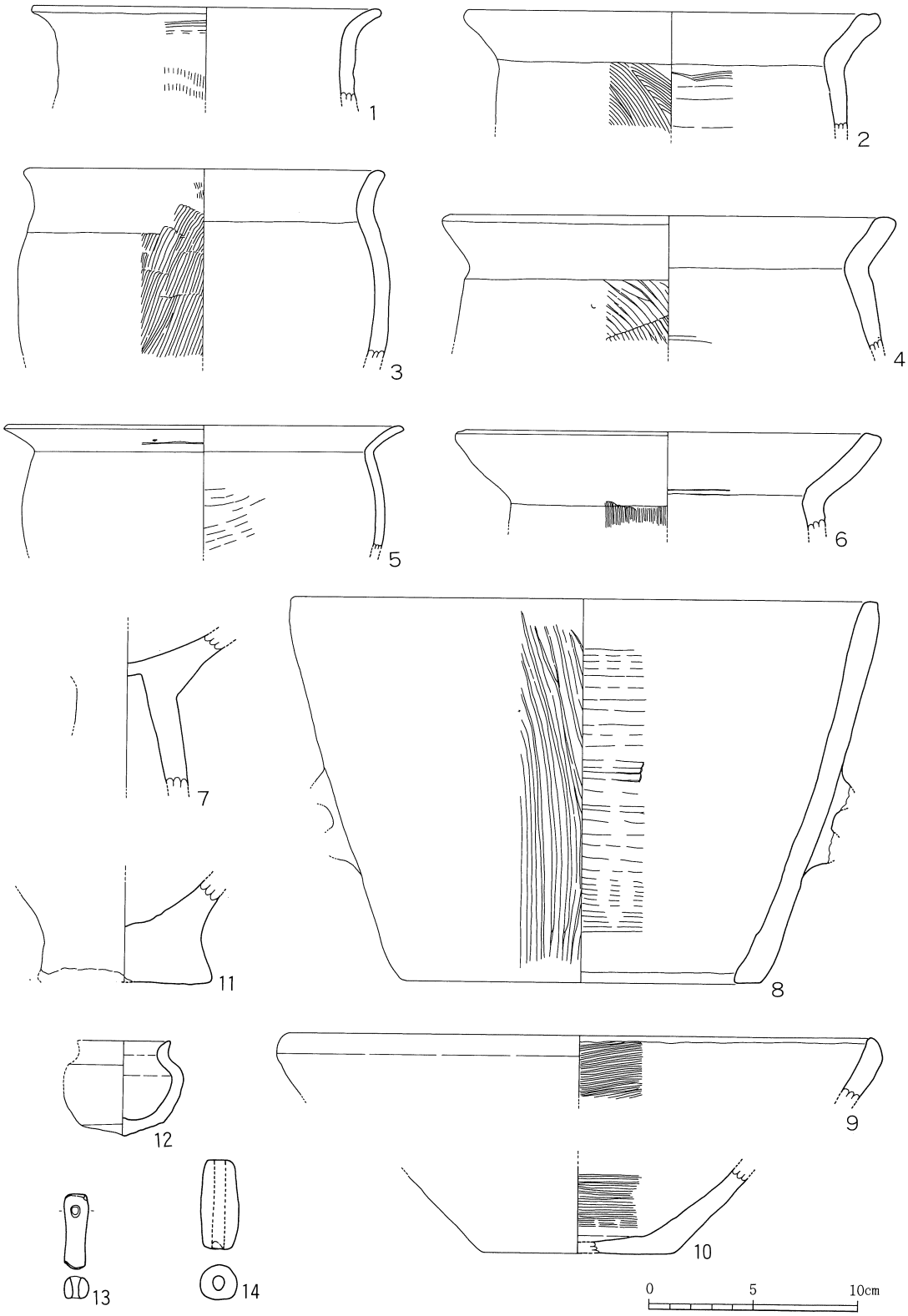
15は口径17.9cm、器高6cmを測るやや大型の坏である。傾斜体部の口縁付近は一部剝落が認められる。底部は回転篦切りで体部表裏は撫で調整。16～18は土師器の皿である。底部から丸味を持つ体部は口縁部で外反する。表裏共撫で調整を施す。17・18は回転篦切りである。口径は14.6cm～16.6cmで、器高は1.5cm～1.9cmを測る。17の表裏には赤色顔料を塗布する。19は表裏に赤色顔料を塗布する椀である。内面は撫で調整され、外面は手持ち篦削りで整えられている。口径14.7cm、器高6.1cmを測る。第88図1～6は甕の口縁部である。1・2は外反口縁である。1は口径17cm、2は口径17.5cm。3は薄手で内面篦削りの甕であり、口径19.4cm。4～6は外反口縁部がやや内湾し体部は下脹れになる一群である。内面は撫で調整され、外面は刷毛目調整されている。口径は20.6cm～22cm内に収まる。7は高坏の脚部である。8は甑であり、口径28.4cm、器高18.5cm、底径17.3cmを測る。体部中央下の2個所に把手を付けている。底部は大きく開き、端部は肥厚して段を持つ。9・10は鉢の口縁部と底部である。須恵質であり、内面に細かな刷毛目痕を残す。同一固体かもしれない。口径29.1cm、底径9.3cmで復元すると器高は13～14cmであろう。11は分厚い平底部。12は小型壷である。口径4.5cm、器高4.6cm、肩



第86図　会下遺跡表土層及び包含層出土遺物(2/3)



第87図　会下遺跡表土層及び包含層出土遺物(1/3)



第88図　会下遺跡表土層及び包含層出土遺物実測図(1/3)

部最大径は約5.8cmを測る。

第84図28は土師器の短頸壷の口縁部である。口径9.5cm。

土錘　第88図13・14は土錘である。13は指頭状に穿孔を持ち、14は管状を呈する。13は下半欠損し重さ5.7＋αg、14は13.3gを計る。

糸切り底部の土師器　第84図29は糸切り底の坏底部である。板状圧痕を残す。第84図30は小皿である。底部は糸切り痕を残し、口径7.5cm、器高1cm、底径6.5cmを測る。

鉄器　第84図31は鉄器である。方頭型の鉄鏃であろうか。

第Ⅴ章　まとめと考察

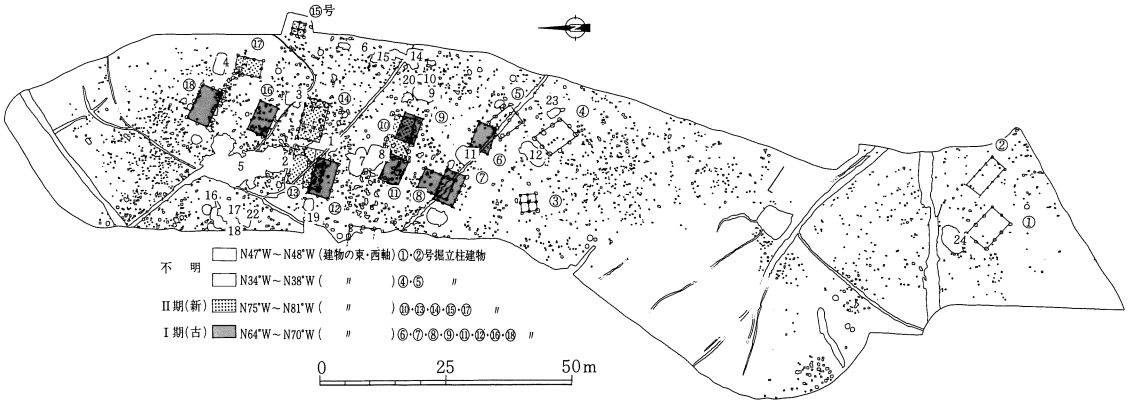
1．掘立柱建物群と土坑の機能について

会下遺跡から検出された遺構は多数の柱穴群と19棟の掘立柱建物、24基の土坑である。掘立柱建物は２間×２間の総柱建物が２棟、２間×３間が８棟、２間×４間が６棟、２間×５間が２棟であり不明が１棟である。これ等の内、２棟が南・北棟で残り16棟は全て東・西棟である。建物は標高26ｍ～28ｍの微高地に展開しており、当然調査区の東側や西側をはじめ、柱穴群の中にも建物が建つであろうことは推察できる。

18棟の建物は相互に重複関係が確認できる建物が存在することから、一時期の所産ではないことは明白である。建物が計画的に配置されたのであれば、建物の主軸方位の並びや建物の大きさ等を一つの指針として、同時期に当る建物の抽出も不可能ではない。(第89図)

第90図は建物の西・東軸の傾きを示した数値であるが、建物はＮ34°Ｗから Ｎ97°Ｗの間に分布している。これ等は④・⑤号、①・②号、⑥・⑦・⑧・⑨・⑪・⑫・⑯・⑱号、⑩・⑭・⑮・⑰号、③号の５つに区分し、各々包括できる。これ等の内、建物の配置や重複等を考慮すると、Ｎ34°Ｗ～Ｎ48°Ｗの４棟、Ｎ64°Ｗ～Ｎ70°Ｗの８棟、Ｎ75°Ｗ～Ｎ81°Ｗの５棟に大きく３分割できそうである。またＮ64°Ｗ～Ｎ70°Ｗの８棟の内、⑦号と⑧号は切合い関係にあることから、18棟の建物群は少くとも３～４回の建て替えと時期的区分を示唆するものと推察できるのである。

一方、建物群の柱穴の掘方は直径30㎝～100㎝の間であり、平均70㎝～80㎝と比較的大きなものであった。しかし、柱痕跡は掘方の大小に係らず平均20㎝前後と小型であり、柱並びの稚劣さ等は否めない。柱で囲まれたこれ等の建物面積を先述した建物主軸の傾きごとに比較したのが第91図である。建物は5.8㎡～8.7㎡の小型２棟、17.7㎡～26.7㎡の中型10棟、31.7㎡～

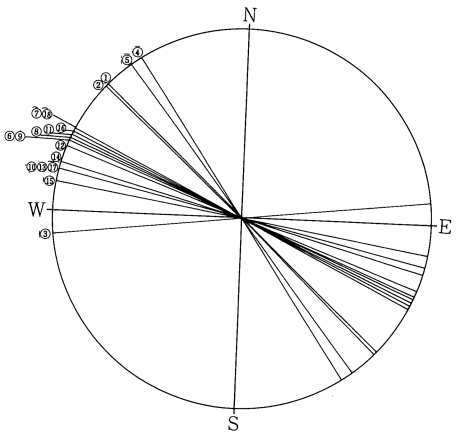


第89図　掘立柱建物の方位別配置図(1/1500)

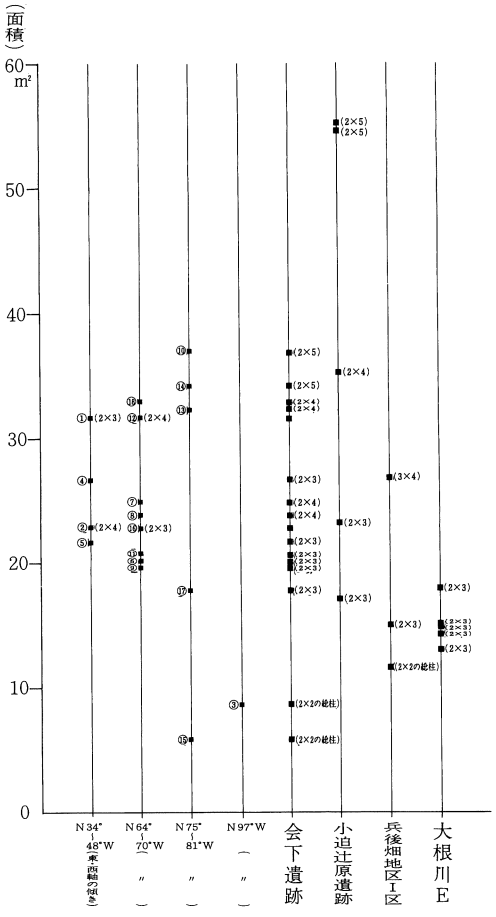
36.8㎡の大型6棟に3分割できる。小型は2間×2間が2棟、中型は2間×3間が7棟、2間×4間が3棟、大型は2間×3間が1棟、2間×4間が3棟、2間×5間が2棟という内訳になる。そして、各々が建物主軸の方位ごとに配分されている様相も認識できることから、建物面積の大小は建物の機能・用途の分化を暗示していると言えそうである。

次に伴出した24基の土坑については、その用途や機能等は推測の域を出ないがいくつかの要素の中から、その可能性を指摘してみる。土坑は歪な楕円形や不定形を呈するものが多く、土坑の壁面も緩い傾斜面であり、土坑に伴出する柱穴等も確認できない。そして、これ等は5号土坑で象徴されるように、小さな楕円状土坑が相互に重複しつつ全体を構成している様相が指摘できるのである。この様な状態は、比較的に安定した形態の4号、11号、13号土坑を除く全ての土坑中に認識し得るものであった。このことは、土坑が当初からこの形態を保っていたのではなく、徐々に拡大されていったことを意味している。5号、8号と7号・9号と10号、14号と15号、16～18号等はその代表であろう。

一方、土坑の配置には全体的な企画性は読み取れないが、掘立柱建物と土坑との関係は示唆に富む。例えば、④号掘立柱建物の西妻側に12号土坑が隣接し、⑥号掘立柱には11号土坑、⑦号掘立柱には13号土坑、⑰号掘立柱には4号土坑という具合に対応できる。その内、4号土坑と12号土坑の床面は、貼り床状に黄色土と黒色土が反転して混じり合った状態であり、黒色土だけを取り除くとあたかも多数の足跡のような痕跡を届めていた。

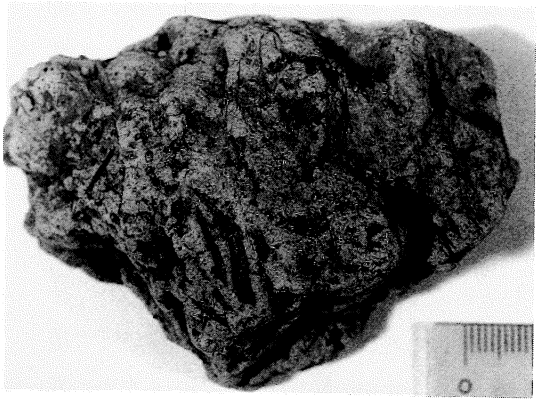


第90図　掘立柱建物の東西軸傾斜度
(①～⑱は建物番号)



第91図　掘立柱建物の面積の比較
〔①～⑱は会下遺跡の建物番号で(　)内は梁間×桁行間数〕

また一方、土坑の一つの用途や機能を暗示するものとして、5号土坑、2号土坑、8号土坑、13号土坑、23号土坑の床面や壁面近くに浮いた状態で部分的に焼土が堆積していたことである。焼土は恒常的なものではなく、希薄な感じは否めない。



第92図　焼けた壁土粘土
（スサ等が混ぜ込まれている。1号土坑出土）

以上のことを総合的に判断すると、検出された土坑群は建物の建設と不可分な関係にあることが推断できそうである。つまり結論から言えば、建物に付随する土坑群は単なるゴミ棄て用の穴として掘られたのではなく、第1義的には建物の壁土を採取した穴であり、これを水と苫とで捏ね合せた場所と考えられなくもないのである。その後、土坑は結果として廃棄物の処理場として二次的に活用されたことは推測に難くない。その理由として、

(1)　土坑は建物に付随するように傍に位置すること。

(2)　土坑は重複しつつ、必要に応じて目的々に拡張されていること。

(3)　土坑は平面的な拡張だけでなく、垂直的な拡張も認識できること。これは、床面の高低に象徴されている。

(4)　4号土坑、12号土坑で顕著なように、床面は貼り床状の斑文様と足踏みによる土捏ねを示唆する様な凹凸の痕跡が残ること。

(5)　1号土坑内より、壁に使用されたのであろう苫入りの粘土壁の一部が検出されていること。（第92図）

(6)　土坑の断面は緩い傾面であり、覆土や遺物は流れ込みや廃棄状態にあること。

(7)　24基の土坑中、4基の床面や側壁近くから焼土が検出されたこと。

等を掲げることができる。これ等の要素の内、(4)・(5)は建物の建設と深い関係を示唆し、(6)・(7)はゴミ棄て穴としての二次利用として解釈できる。また(1)～(3)はこれ等の両方ともに及ぶ要素でもある。以上のことから、会下遺跡で検出された土坑群は前述した結論として認識できそうである。(5)にみる苫込りの粘土塊は、日田市の小迫辻原遺跡[註1]等からも発見されており、当該期の建物群を複元するうえで、極めて留意すべき現象である。

2．出土遺物の様相と5号土坑遺物の層位的出土例

会下遺跡の24基の土坑群や多数の柱穴群をはじめ、表土・包含層中より多量の遺物が検出されている。遺物は大部分が須恵器や土師器類等であり、これ等に伴出して、刀子、鏃・鉄滓等の鉄器類、青銅の座金、石製紡錘車、鞴の羽口等が出土している。中でも最も注目されるのは、石帯の発見である。石帯は蛇紋岩製の巡方であり、発掘例では県内初例にあたる。

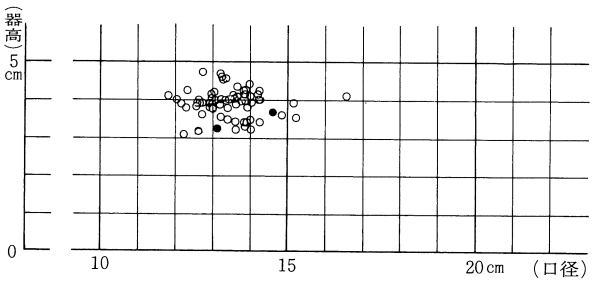
石帯は奈良時代末～平安時代の初頭にかけて出現する。古墳時代以降、官位・職階の象徴とされた鍔帯[註2]が、延暦15年(796年）に鋳銭(隆平永宝）を支えるために禁止されている。これ以降、5位以上の玉帯を除いて、それ以外は鍔帯を禁止されたが、弘仁元年(810年）に雑石腰帯の使用が許されている。ちなみに、5位以上はメノウ等の玉帯を許され、6位から初位及び無位の官人までが、雑石帯を許可されている。「日本後紀」にみるこのような規定が、地方へどれほどの規範と強制力を伴って施行されたかは判断しかねるが、会下の蛇紋岩製の石帯は雑石帯に入るものとみなし得るものである。

石帯は律令体制の宮位・職階制を象徴する鍔帯が材質転換をとげたものであり、鍔帯の材質や大きさ等が官位の上下を示す以上、これが石帯にも踏襲されるとする説が一般的ではあったが、最近の研究成果では鍔帯、石帯の大きさと官職とは必ずしも対応しないとの見解[註3]が趨勢をしめる現状にある。いずれにしても、石帯の出土は律令体制という政治機構の中でその意味付けと性格を把握せねばなるまい。例えば、各地域における郡司クラス（大領・小領・主政・主帳）の官位を一覧すると[註4]、七位・八位・初位等の低い官位のものが多いことは事実である。日田市の小迫辻原遺跡[註5]では「大領」と判読できそうな、当該期の墨書須恵器が発見されているが、第91図で比較した建物群の面積をみる限り、小迫辻原では55㎡前後の大型家屋が2棟検出されており、会下遺跡をはじめその他の遺跡との較差は一目瞭然である。しかしながら遺跡の性格や遺構の機能をも考慮の対象として比較せねばならず、例えばより公共性を帯びた郡役所の場合と私的な居館とではその規模にも自ずと差異が生じることは推測に難くない[註6]。そういう意味で会下遺跡の平均的な建物群に石帯が伴出したという事実から遺跡のより私的な性格や特徴が推察されそうである。

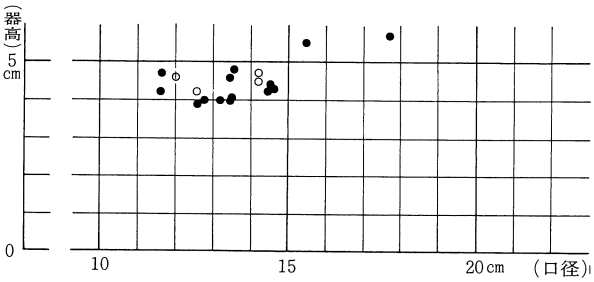
一方、出土遺物は主に土坑内より検出されている。24基の土坑中、遺物が比較的に出土した土坑は1号、2号、5号、7号、8号、9号、11号、13号、14号、16・17号の10土坑である。これ等の土坑の中で、時間的な先後関係として把えられるものとして、古い方から2号土坑→⑫・⑬号掘立柱建物→1号土坑と、8号土坑→⑩号掘立柱建物という2例があるのみである。しかし、これ等の土坑や掘立柱建物には遺物が僅少であり、2号土坑→1号土坑という関係を、出土遺物の相互比較から読み取るのは至難である。

会下遺跡出土の遺物は奈良時代後半～平安時代の初頭頃（8世紀後半～9世紀前半）に位置

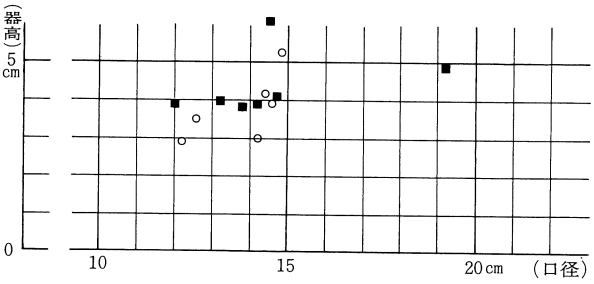
付けられる。この時代の土師器や須恵器の編年や手法上の変遷は富永直樹氏の報告書や[註7]佐藤浩司氏の「奈良時代の須恵器と土師器－旧豊前国を中心として－」[註8]に詳しい。これ等は須恵器の相対的な後退とあいまって、土師器の底部手法では手持ちヘラ削り→回転ヘラ切りという変化と、ヘラ磨き手法の漸次的衰退等を相対変化を把握し、これに器形変化や技法の特徴から時代的画期を指摘したものである。この論考を基準に考えてみると、県内例としては宇佐宮弥勒寺旧境内の弥勒寺[註9]より検出されたＳＤ―７、ＳＫ―１出土土器等はその大半が８世紀中頃～後半に置かれるという。この一群の土師器と須恵器の割合いは5.5対4.5であり、小型雑器の５割強には回転ヘラ磨きが施されている。しかし底部仕上げは回転ヘラ切りとされており、当該期に普遍的な回転ヘラ削り仕上げはあまり顕著ではない様子である。一方絶対年代を探る資料としては、豊後国分寺跡出土のＳＢ―４の柱穴から出土した「尼寺」の墨書土師器は回転ヘラ磨きが



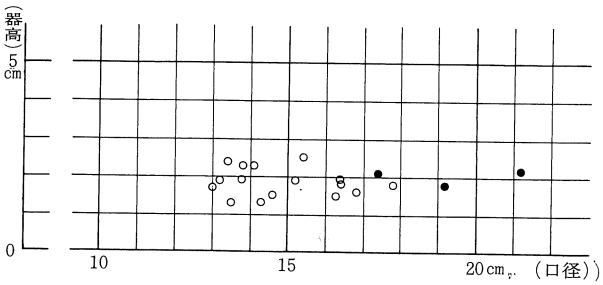
第93図　会下遺跡出土の坏法量分布
（白丸は土師器、黒丸は須恵器）



第94図　会下遺跡出土の高台付碗法量分布
（白丸は土師器、黒丸は須恵器）



第95図　会下遺跡出土の丸底碗法量分布
（黒四角は赤色塗彩土器）



第96図　会下遺跡出土の皿法量分布
（白丸は土師器、黒丸は須恵器）

施され底部は回転ヘラ削り仕上げのされた土器であり、同ＳＫ―４から出土した「尼寺天長九年」（832年）銘の土師器は[註10]底部回転ヘラ切りはなしの特徴的なものであった。尼寺の建造は国分寺と共に８世紀中葉以降の所産とみなされることから、「尼寺」及び「尼寺天長九年」銘の土師器は、ともに８世紀中頃～後半と９世紀前葉という絶対年代とその土器の特徴を探るメルクマールとなり得るものである。

会下遺跡の土師器須恵器類を総体として把えると、手持ちヘラ削りの顕著なものは、赤色塗彩土器の２～３片であり、回転ヘラ磨きを施す一群は十点弱と少なく、回転ヘラ削りを顕著に残すものは数片と例外的である。そしてその全てが底部回転ヘラ切り痕を顕著に残すか粗いナデ調整を併用する一群であると考えて良い。坏の底部から斜め直接的に延びた体部の特徴や、底部と体部の境界近くに付く断面コの字の高台、鳥の嘴状を呈する蓋の屈曲口縁等は奈良時代末～平安時代初頭の土器の特徴を象徴している。

第93～96図は会下遺跡出土の坏、高台付碗、丸底碗、皿の法量を器種ごとにまとめ、土師器、須恵器の別を表示したものである。

坏は口径が12㎝～15㎝の間が多く、器高３㎝～５㎝の間に収まるものが大部分を占め、法量の均一化、集約化が顕著である。計測できた70点中、須恵器は僅か３％の２点であり残り68点、つまり全体の97％が土師器で占められている。

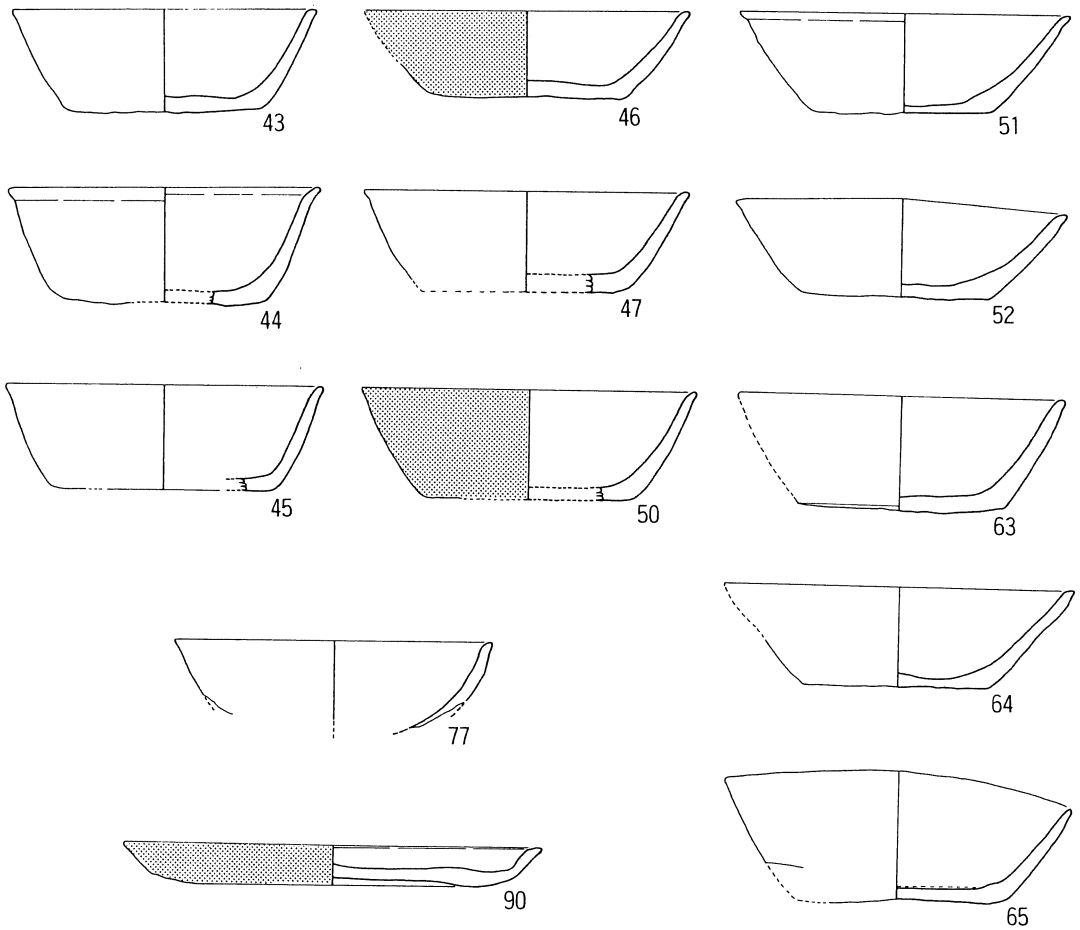
一方高台付碗では口径11.5㎝～14.5㎝の間で、器高４㎝～５㎝の間に収まるものが大部分を占める。法量の集約化も坏と同様に顕著である。計測できた18点中、土師器は僅か４点の20％であり残り14点、つまり全体の80％が須恵器で占められている。土師器の坏と須恵器の高台付碗が共伴する以上、器種による土師器と須恵器の明瞭な使い別けを示唆する現象といえるであろう。

丸底碗では口径は12㎝～15㎝に収まるものが大部分であり、器高は４㎝前後にややばらつきがある。丸底碗は全て土師器であり、計測できた13点中、54％にあたる７点が赤色塗彩土器である[註11]。丸底碗の底部には手持ちヘラ削りを残すものが２点ほどあり、従来の編年では８世紀前半頃に位置付けられる要素ではあるが、この器形が後述するように５号土坑上層土器群まで認められることや８世紀前半に位置付けられる他の資料が乏しいこと、全体の半数以上が赤色塗彩土器であることを考慮して、祭祀的なある特種な用途に使用される器であると推察し、一応これ等の丸底碗も当該時期に位置付けて考えられそうである。

皿は、口径13㎝～20㎝前後であり、器高は２㎝前後に収まる。計測できた19点中、やや口径の大きな３点が須恵器であり、残り84％の16点が土師器である。

以上が会下遺跡の小型雑器の全体的な特徴である。ちなみに、上記した小型雑器の土師器と須恵器の割合は土師器84％、須恵器16％となる。

ここで、比較的まとまった資料が検出された５号土坑について、少し詳細に遺物の比較検討



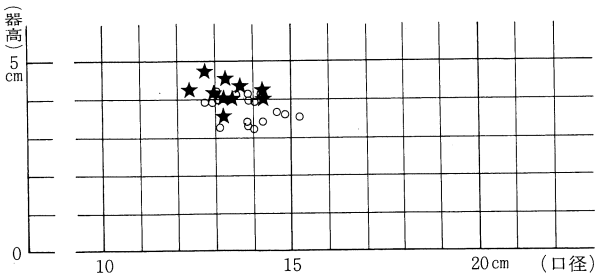
第97図　会下遺跡出土の５号土坑上層土器群（層位的に出土した５号上層土器群を抽出した。番号は第40～42図と同じである。なお土坑一括で層位の不明な第40図48・49・53等も上層土器の可能性が高い）

を試みてみよう。５号土坑が幾つか位置をづらしつつ重なり合うか、拡張されていった様相を呈しており、全体形態は連珠状の不定形な土坑である。遺物は土坑の全体に分布するが、集中分布するブロックが５～６個所認められる。これ等は本来、各土坑に伴う遺物であれば、各々に遺棄された時間が異なることが推測できる。しかしながら、各々の遺物を比較しその先後を断定するのは至難である。

５号土坑において計測できた須恵器と土師器の小型雑器と、煮沸具としての甕の割合を求めると、須恵器雑器18％：土師器雑器70％：煮沸具12％となる。そして、煮沸具の甕を除いた須恵器と土師器の比率は、数量比では24％対76％、重量比では25％対75％であった。このことは、他の土坑内出土の須恵器10～23％：土師器、77～90％という数値と何ら矛盾するものではなく、須恵器が全体の$\frac{1}{4}$弱であることを示している。

さて、５号土坑の中でも北端部に流れ込んだ遺物群は、床面近くの５号土坑上層土器群とし

て一括して取り上げることができた。5号土坑上層土器群は第40図の43～47と50～52、第41図の63～65、第42図の77と90である。これ等は全て土師器であり、坏11点、丸底碗1点、皿1点の計13点であった。器種の全てのセットではないが、丸底碗の伴出は留意できる。土師器の坏の特徴を抽出すると次のように整理できる。



第98図　5号土坑上層土器群(黒星)と5号土坑下層土器群(白丸)の坏法量分布

第97、98図は5号土坑上層土器群と下層土器群の坏の形態及び法量を対比したものである。第97図は5号土坑の中でも層位的に把えられた5号土坑上層土器群を抽出したものである。時期決定の一つのメルクマールに成り得る特徴を列挙してみる。

(1)　5号土坑下層土器群の坏口縁が斜め直線的に延び、そのまますぼまるのに対して、5号土坑上層土器群（第97図）の坏口縁部は口唇付近で心持ち緩い外反口縁を呈する。

(2)　第98図で示した口径と器高との法量対比では、5号土坑下層土器群に比較して5号土坑上層土器群の器高が相対的にやや高く平均4㎝～5㎝の間に収まる様相を呈する。また口径も相対的にやや小さくなる傾向がある。

(3)　坏底部の調整では5号土坑下層土器群がヘラ切り後、粗いナデ調整が施されるものが多いが、5号土坑上層土器群はヘラ切り離しのままのものが相対的に多い様相が認められる。

(4)　5号土坑上層土器群の口縁部特徴は伴出した丸底碗や皿の口縁部にも共通性がある。

以上が5号土坑北端部で層位的に検出した5号土坑上層土器群の特徴である。

これ等を一つの指標として遺構の重複関係も考慮してみると、会下遺跡の24基の土坑群のうち、古式に当る遺構としては5号土坑下層土器群、2号土坑、8号土坑、9号土坑等があり、10号土坑、11号土坑、13号土坑、14号土坑の一部等が古相の土器群を包含している。一方、これ等より新しい遺構としては、5号土坑上層土器群、1号土坑、3号土坑、16、17号土坑がこれに相当し、14号土坑等一部が新相の土器群を包含している様子である。

先述した土坑と建物との相関係が当を得たものであれば、より古式の5号土坑下層土器群に相当する2号土坑や8号土坑を切った関係にある⑬号掘立柱建物や⑩号掘立柱建物は5号土坑上層器群というより新しい土器群に伴う可能性が高い。つまり第89図で示したN64°W～N70°Wに相当する8棟の建物群（1期）は⑩、⑬号掘立柱遺物を含むN75°W～N81°Wに相当する5棟の建物群（Ⅱ期）より古く位置付けられるのである。

以上のように、会下遺跡の５号土坑の遺物群を層位別に把え、これに遺構群を各々比定してみた。つまり５号土坑下層土器群で代表される遺構群が会下遺跡を構成する主体であり、これを奈良時代末～平安時代初頭（８世期後半～９世紀初頭）の所産に位置付ける。そして、５号土坑上層土器群を９世紀前葉～中葉頃の遺物として把握しておきたい。

そうした場合、前述したように石帯は古くても延暦15年（796年）、一般的には弘仁元年（810年）以降に出現する遺物であり、石帯の出土が土坑内ではなく、包含層内からの出土であることも考慮し、どちらかというと、５号土坑上層土器群との関係で把握しておくのが妥当である。

註

註１　土居和幸・行時志郎『小迫辻原遺跡発掘調査概報』日田市教育委員会1990年

註２　阿部義平「鍔帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』東出版寧楽社1976年
佐藤興治「Ｆ金属器」『平城宮発掘調査報告Ⅵ―平城京左京一条三坊の調査―』奈良国立文化財研究所学報第23冊　奈良国立文化財研究所　昭和50年

註３　亀田　博「鍔帯と石帯―出土鍔・石鍔の研究ノート―」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設参拾周年記念』昭和58年

註４　岡崎　敬・平野邦雄編「古代の日本９研究資料」昭和46年

註５　註１に同じ

註６　広瀬和雄「畿内の古代集落」国立歴史民俗博物館研究報告第22集　共同研究「古代の集落」

註７　富永直樹「Ⅱ・下見遺跡の調査(2)」『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第４集』久留米市文化財調査報告書第43集　久留米市教育委員会　1985年

註８　佐藤浩司「奈良時代の須恵器と土師器―旧豊前国を中心として―」『東アジアの考古と歴史下』岡崎敬先生退官記念論集　1987年

註９　宮内克巳「３．出土土器の編年」『弥勒寺』宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査報告書大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1989年

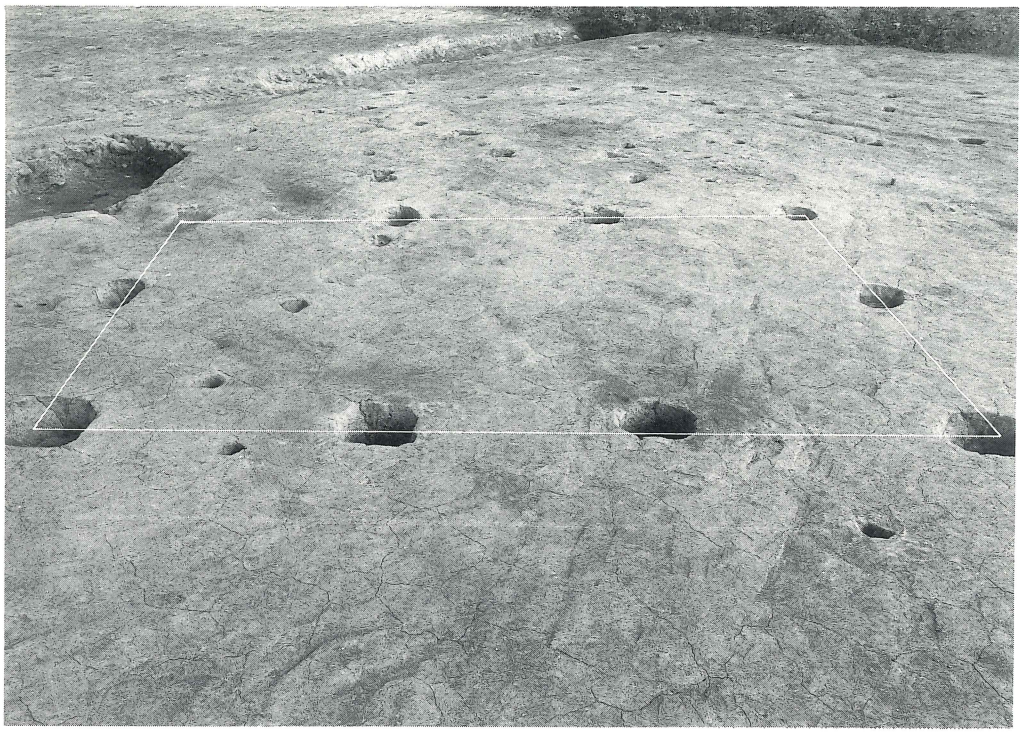
註10　常設展示図録『おおいたの歴史と文化』　大分市歴史資料館　昭和63年
小田富士雄「豊後国分寺跡出土の墨書土師器」『郵政考古紀要』ＸＮ　大阪・郵政考古学会　1989年

註11　鶴間正昭「奈良時代赤色塗彩土師器の様相とその意味」『古代学研究122』古代学研究会　1990年

図　版
PLATES

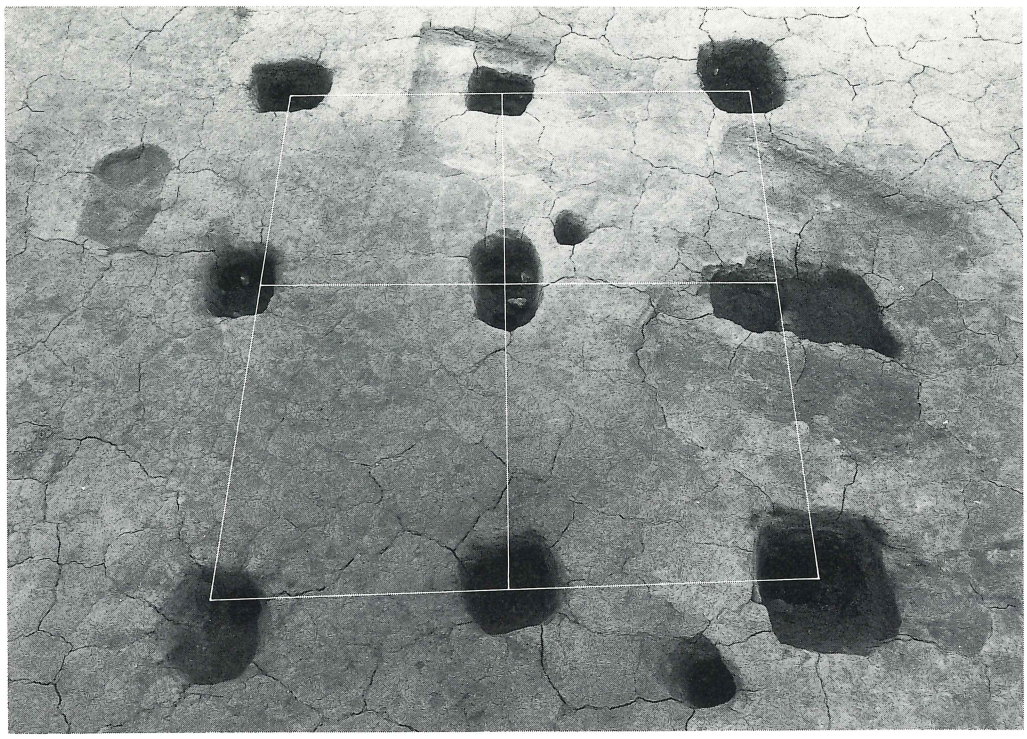
図版１　調査区近景（北側より）

図版２　発掘調査風景（北側より）



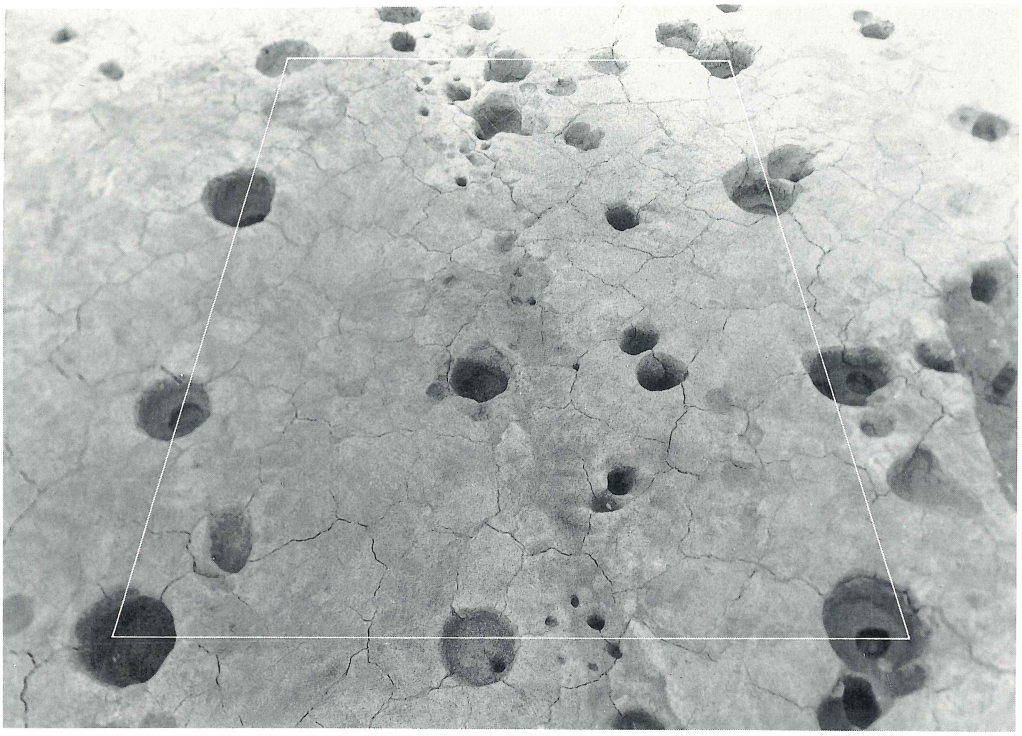
図版 3　①号掘立柱建物

図版 4　②号掘立柱建物

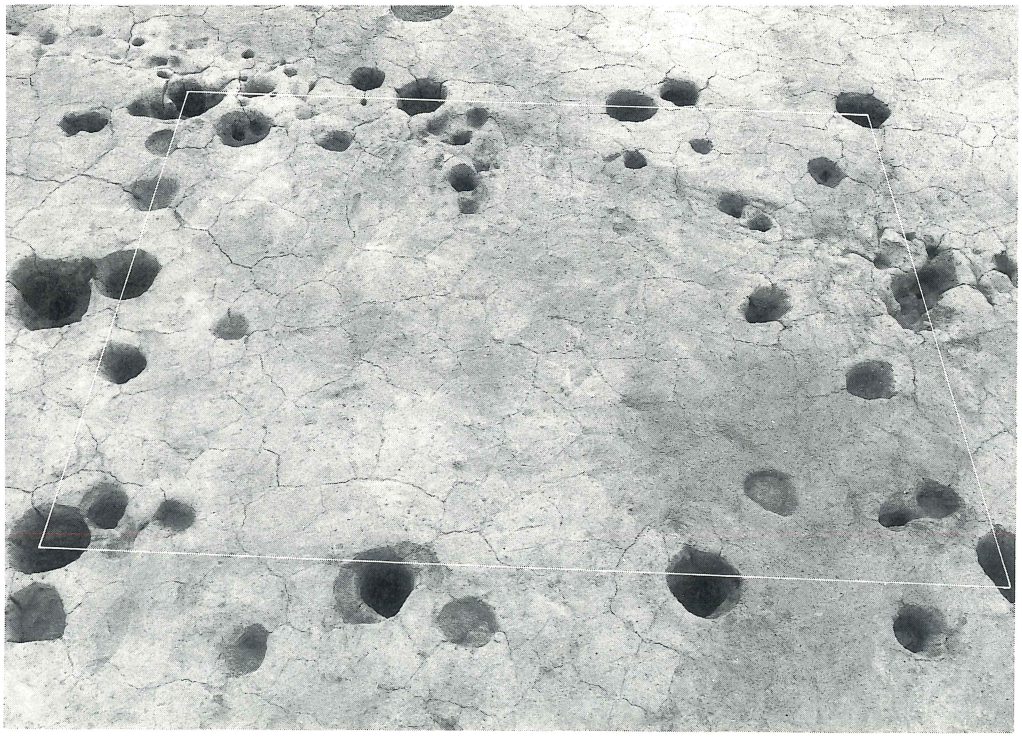


図版５　③号掘立柱建物(西側より)

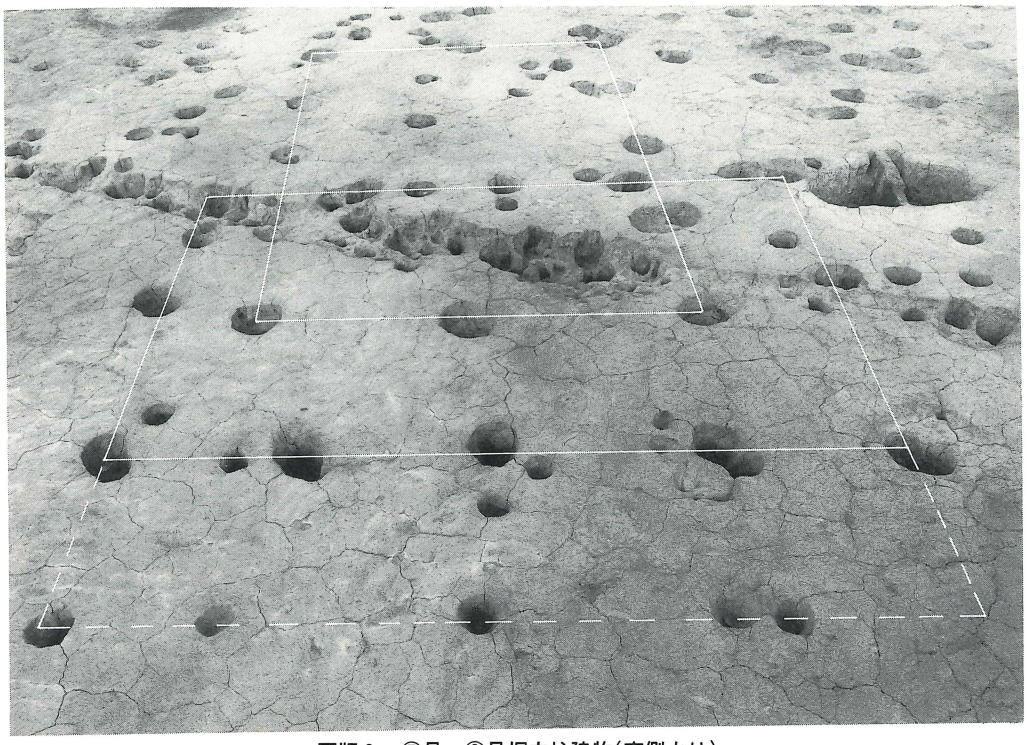
図版６　④号掘立柱建物(東側より)



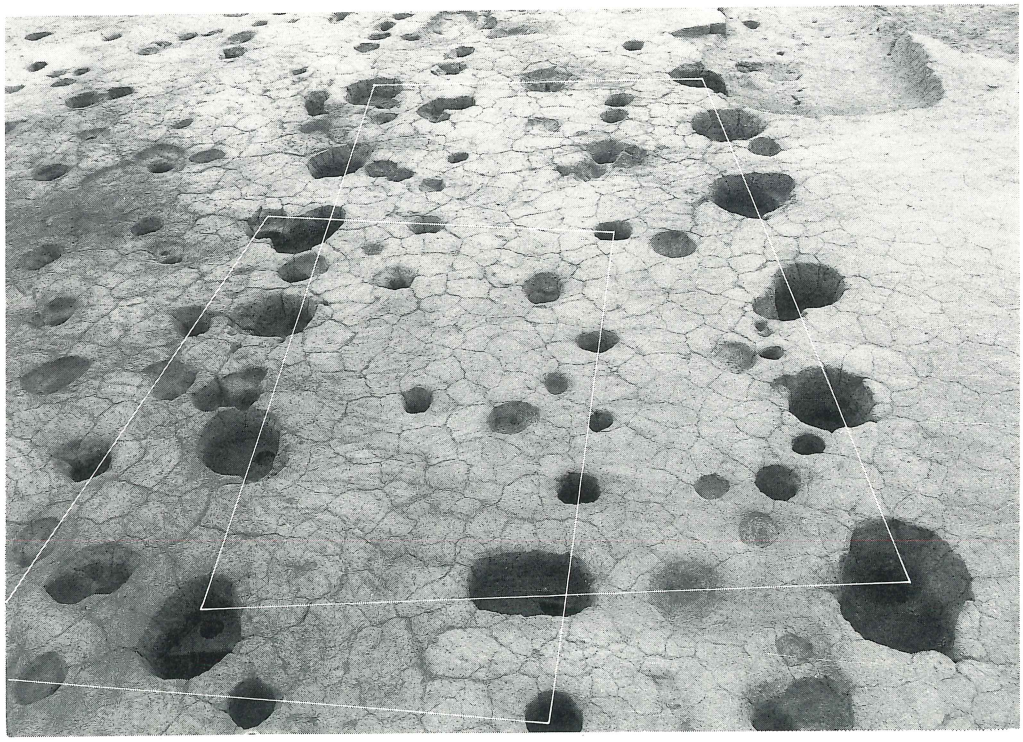
図版７　⑤号掘立柱建物(東側より)



図版８　⑥号掘立柱建物(北側より)

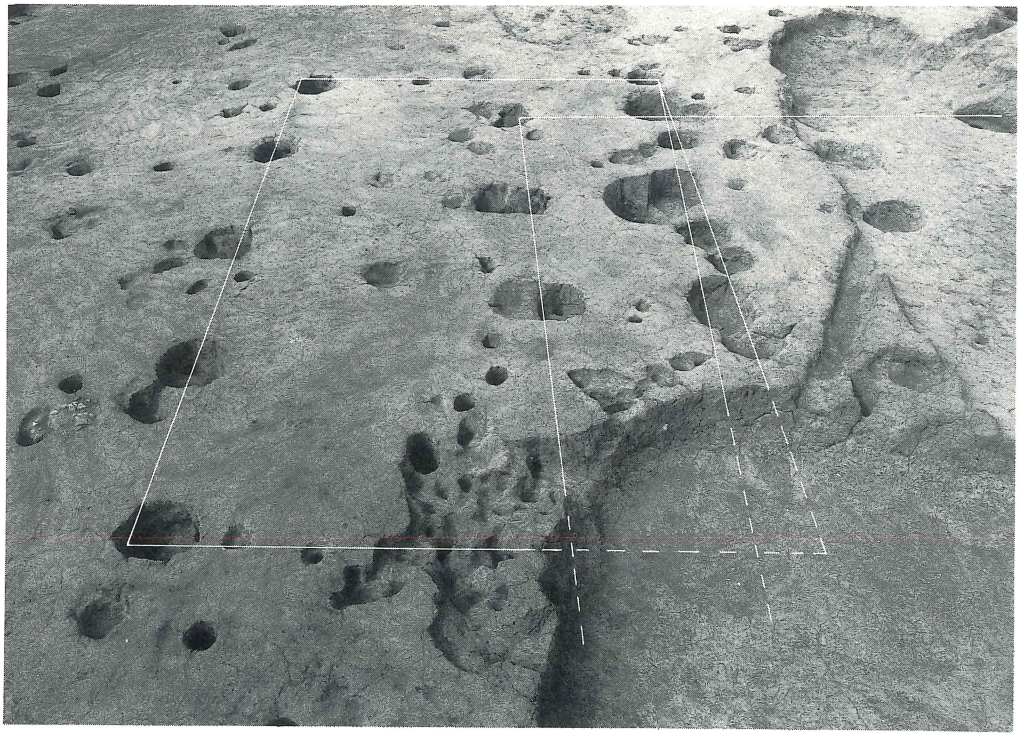


図版 9　⑦号、⑧号掘立柱建物(南側より)



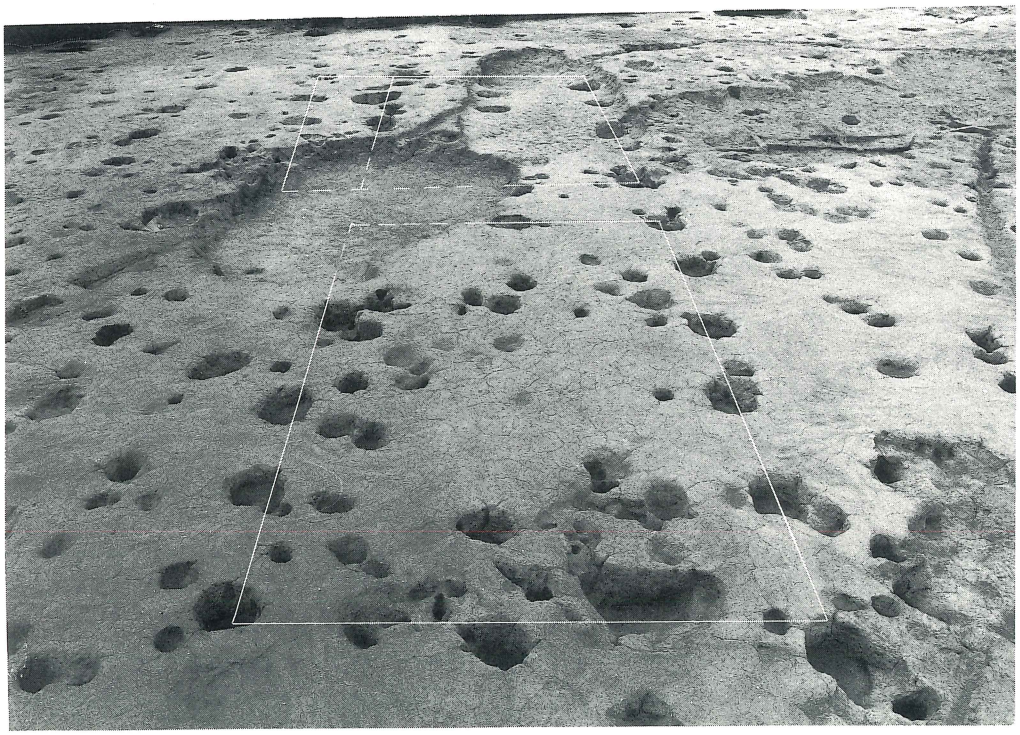
図版10　⑨、⑩号掘立柱建物(東側より)

図版11　⑪号掘立柱建物(東側より)

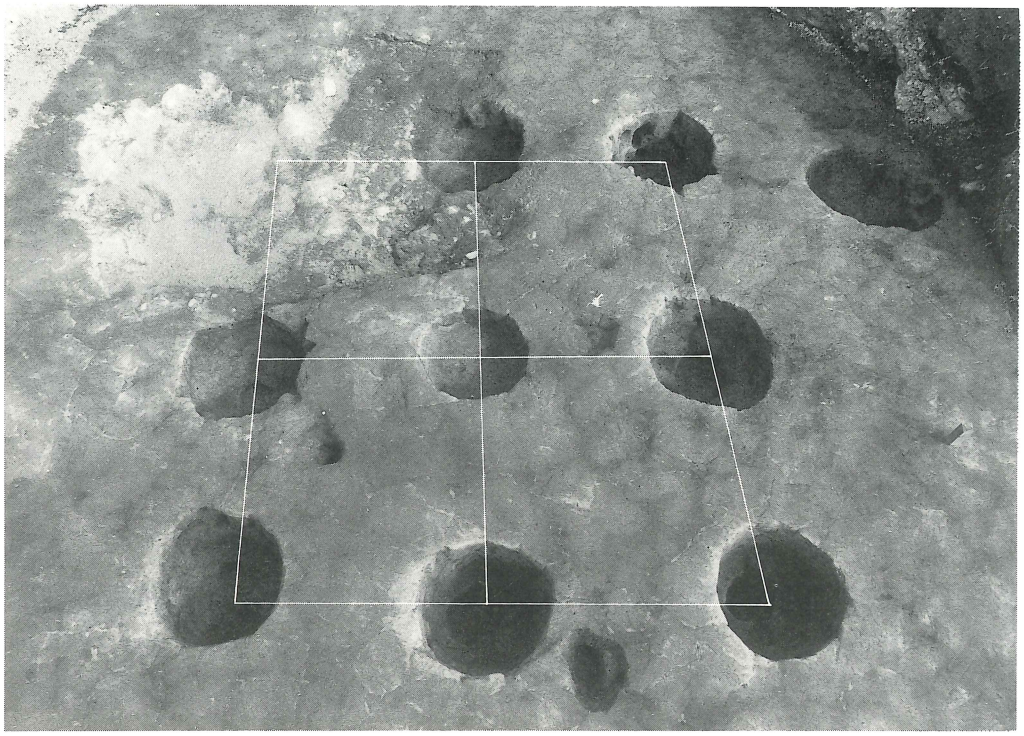


図版12　⑫号、⑬号掘立柱建物(東側より)

図版13　⑫号、⑬号掘立柱建物(東側より)

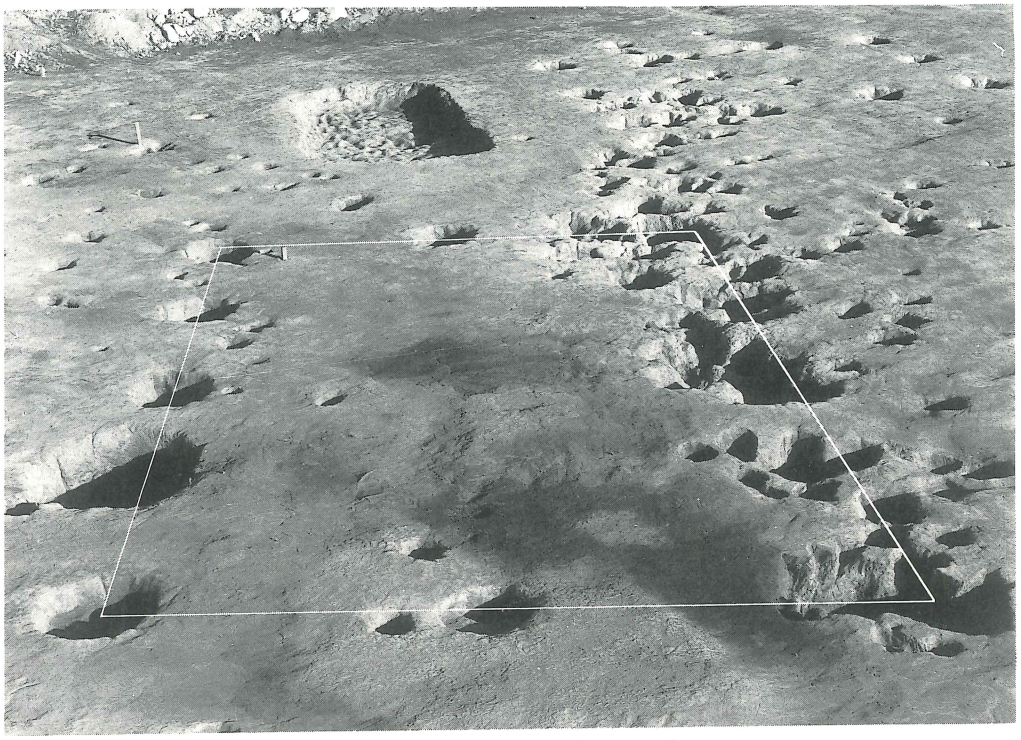


図版14　⑬号、⑭号掘立柱建物(東側より)



図版15　⑮号掘立柱建物(西側より)

図版16　⑰号掘立柱建物(南側より)



図版17　⑱号掘立柱建物(西側より)

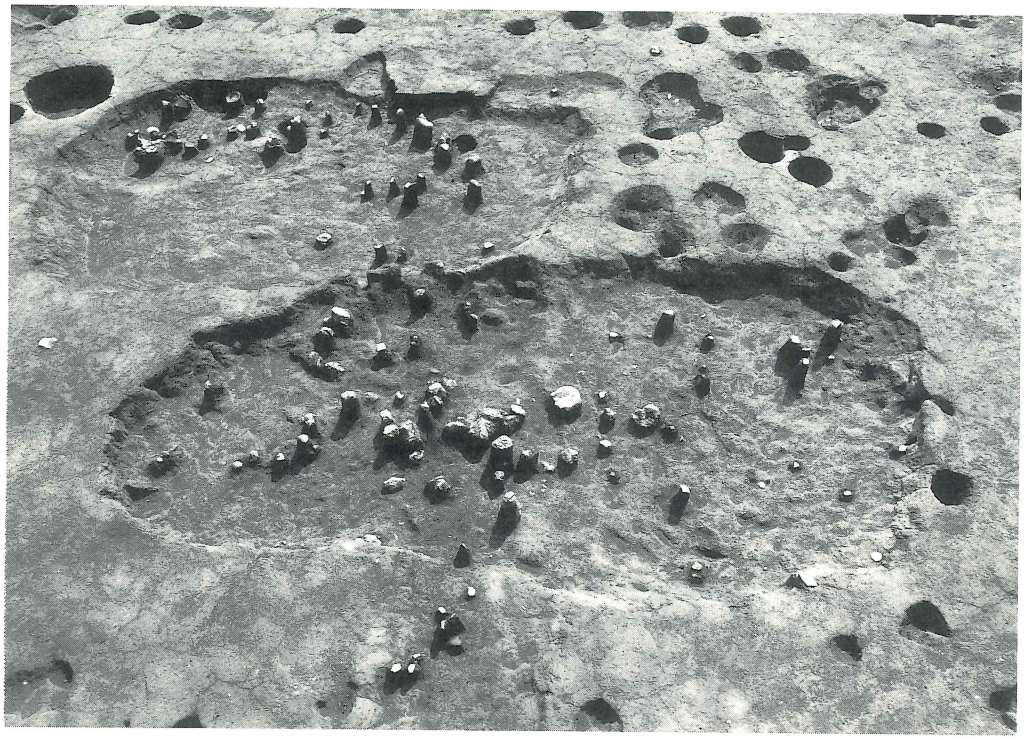
図版18　1号土坑(南側より)

図版19　2号土坑(南側より)

図版20　4号土坑(南側より)

図版21　5号土坑(北側より)

図版22　5号土坑内遺物出土状態



図版23　8号土坑、7号土坑(南側より)

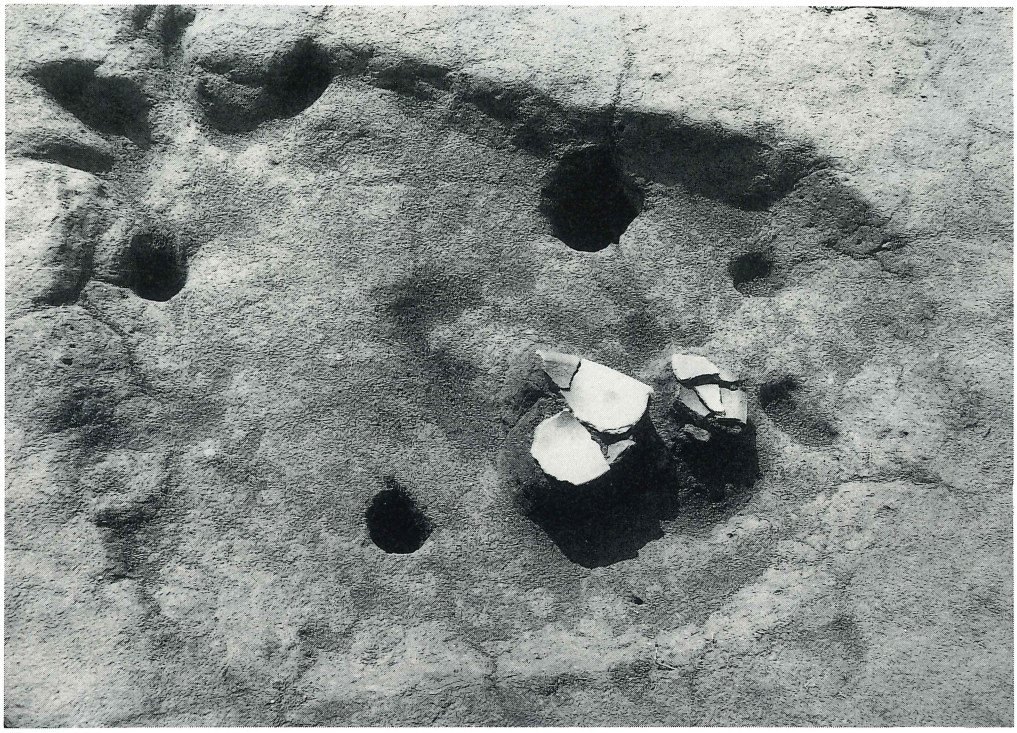
図版24　9号、10号土坑(東側より)

図版25　11号土坑(北側より)

図版26　12号土坑(北側より)

図版27　13号土坑(東側より)

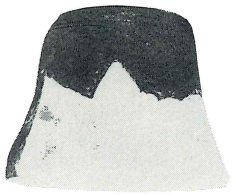
図版28　19号土坑(東側より)



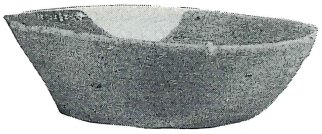
図版29　20号土坑(北側より)

図版30　24号土坑(南側より)

29図 5



31図 2



31図11

31図10

31図 6

33図 2

33図 1

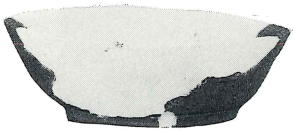
37図 1

37図 7

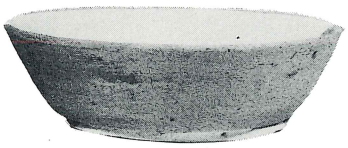
37図10

37図 2

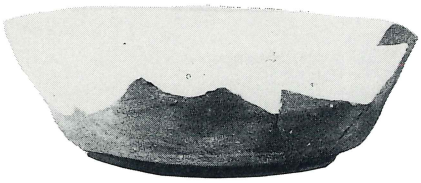
37図 8



37図14



37図19



37図20

図版31　出土遺物 1

37図17

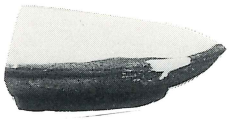
37図15

37図21

37図22

37図12

38図25



38図28

38図23

38図27

38図32

39図34

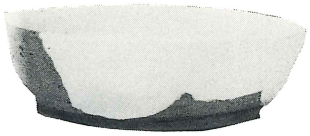
図版32　出土遺物２

40図35

40図38

40図36

40図39



37図18

40図41

40図52

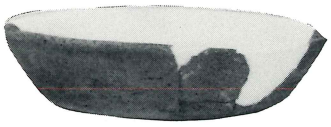
40図43

40図51

41図63

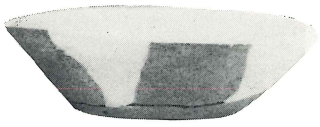
40図47

40図49



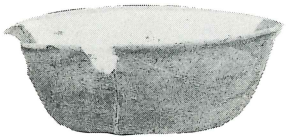
42図83

40図48

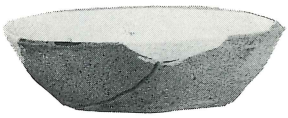


41図64

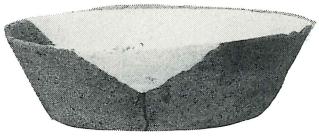
図版33　出土遺物３



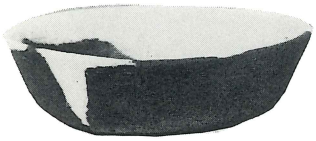
40図44



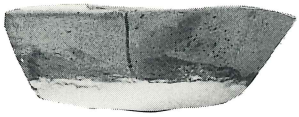
40図46



41図59



41図60



41図65

42図86

41図56

41図69

41図61

41図71

42図77

41図54

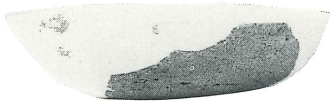
41図57

41図62

42図75

図版34　出土遺物 4

42図73



42図82

42図78

42図79

42図84

42図85

42図90

42図91

42図89

42図88

42図87

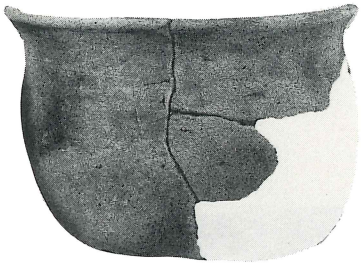
43図92

43図93

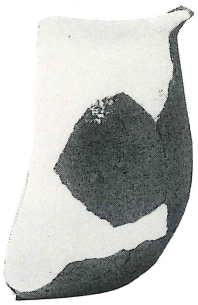
図版35　出土遺物５

43図94

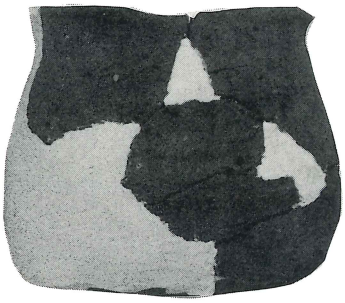
44図109



44図102

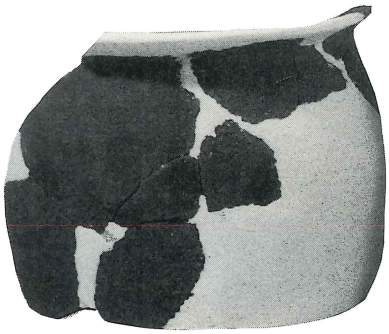


43図101

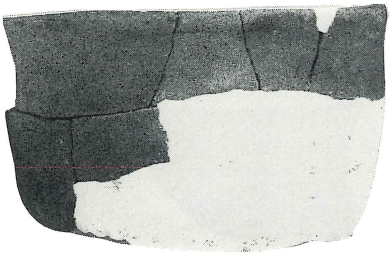


44図105

46図120



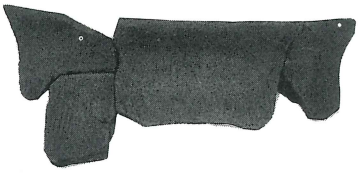
47図126



44図103

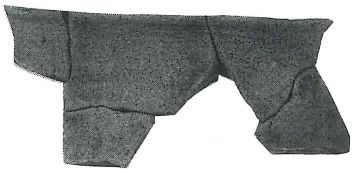
図版36　出土遺物６

47図127

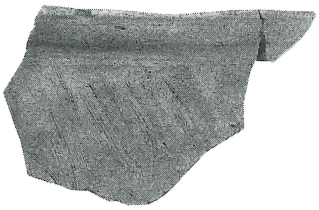


44図106

45図115



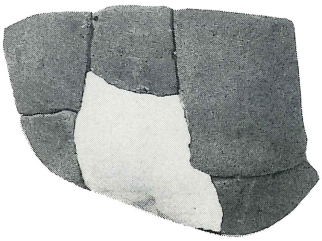
44図108



46図123

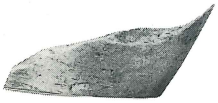
47図125

47図128



43図97

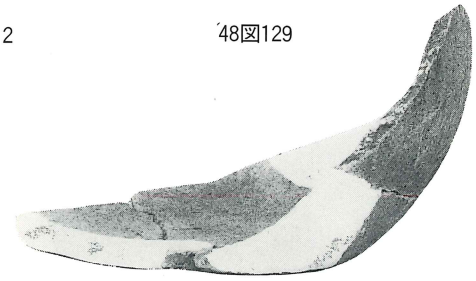
45図112



48図129

43図98

43図99



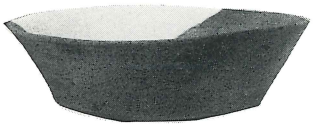
48図133

図版37　出土遺物７

50図

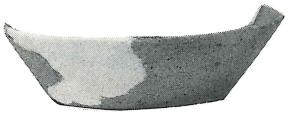
54図 1

54図 8



54図 3

54図 6



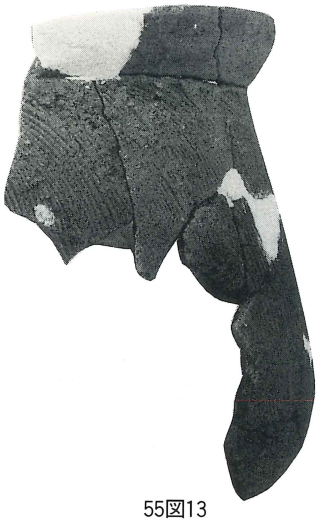
54図 2

54図 4

54図 7

54図 9

55図14



55図13

55図16

図版38　出土遺物 8

57図 5

57図 7

57図10

57図 4

57図 9

57図12

57図11

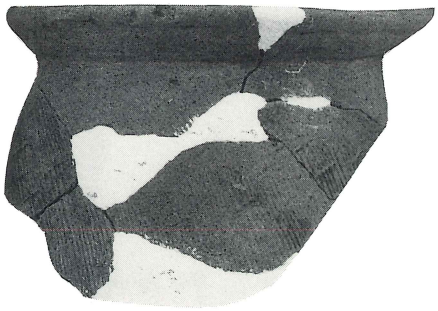
57図16

57図15

57図14

57図17

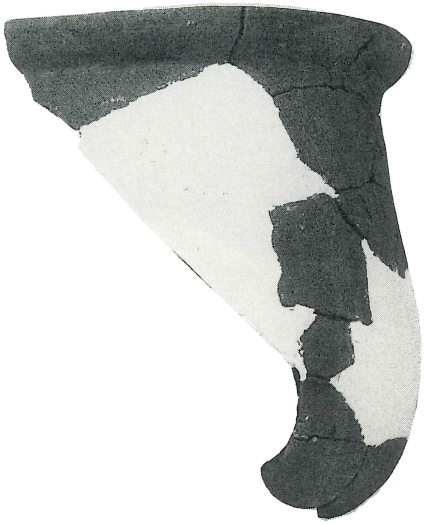
58図18



59図24

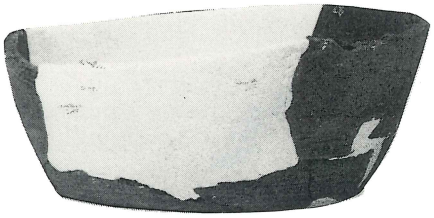
59図23

図版39　出土遺物 9



58図19

58図20

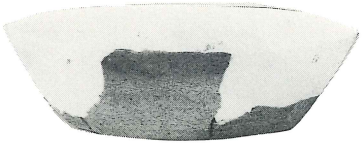


59図27

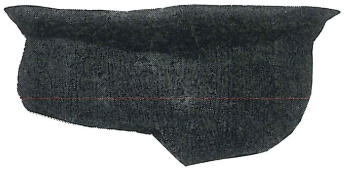
60図 1

60図 2

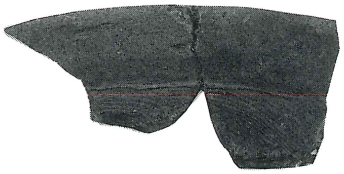
62図 2



62図 3



62図 4

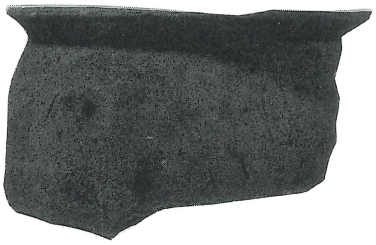


62図 5

図版40　出土遺物10

65図 3

65図 7



65図10

65図13

67図 1

67図 3

67図 5

67図 4

67図 7

67図 6

67図 8

67図10

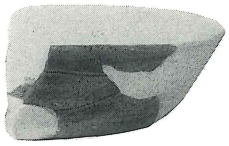
67図 9

67図11

図版41　出土遺物11

70図 7

70図 1



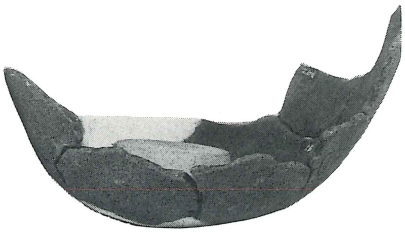
70図 2

70図 5

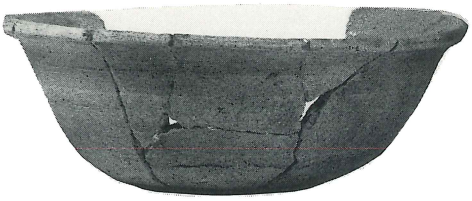
70図 6

70図10

70図 8



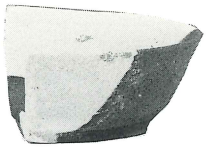
70図 9



74図

図版42　出土遺物12

83図 1



83図 2

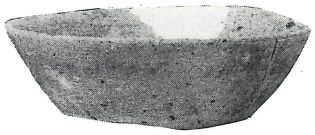
83図 6

83図 5

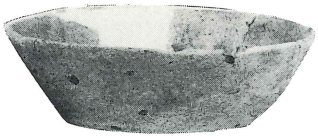
10図 1

79図

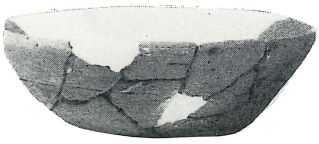
83図 3



83図 7



83図 8

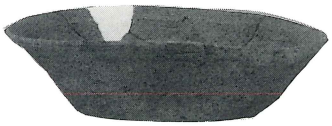


83図10

83図17

83図18

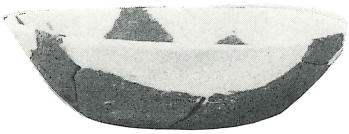
83図21



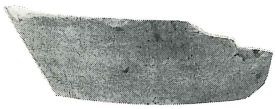
83図20

83図19

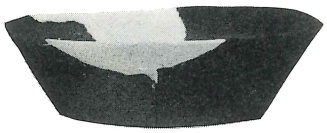
図版43　出土遺物13



84図23



10図 2



83図 9

83図11

83図16

83図15

83図14

83図13

12図

16図

10図 3

84図22

87図 2

87図 3

87図 1

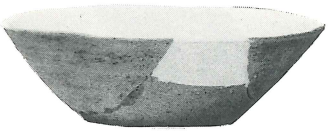
図版44　出土遺物14

87図12

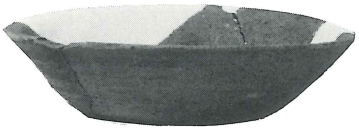
87図 6

87図 7

87図 8



87図10



87図13

84図28

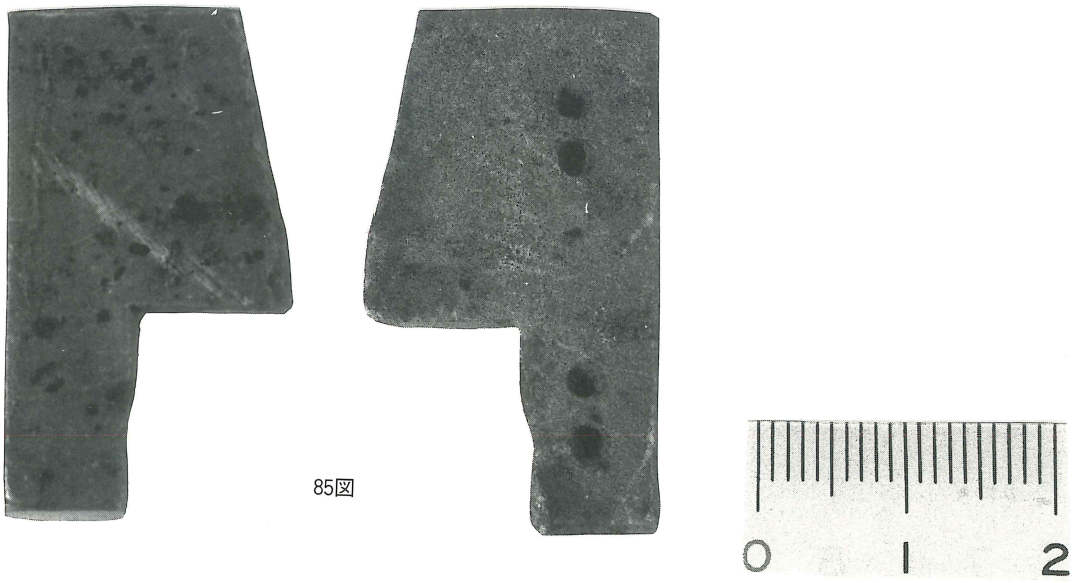
87図16

87図17

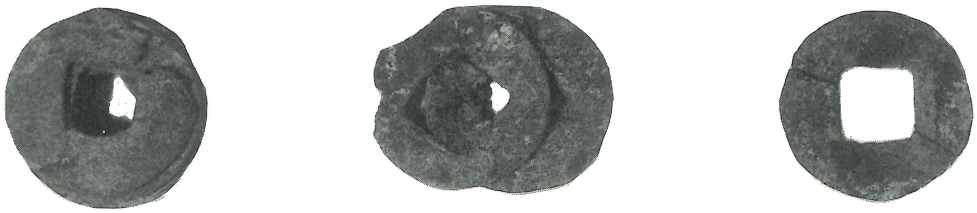
87図19

88図 8

図版45　出土遺物15

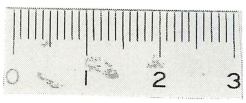


図版46　出土遺物16



84図27

48図138　48図137　29図 6　15図　84図31



図版47　出土遺物17

48図135

48図134

88図13

88図14

48図136

図版48　出土遺物18